

学生教養新書

川柳とは何か

川柳の作り方と味い方

麻生路郎

至文堂

自序

川柳はサタイヤであると云う人もあるが、そうでもない。パックだという人もあるが、それもあたらない。日本の俳諧の真似事である仏蘭西ハイカイでないことは云うまでもない。以上挙げた短詩型はいずれもどつかに類似点があると云うに過ぎない。

その点川柳は世界に類例のない短い詩型であつて、しかも日本独自のものである。しかし短いと云うことが、必ずしも、作り易いと云う理由にも、つまらないと云う理由にもならないことである。

作り方については出来るだけ平易に書いた。書いただけのことは判つてもらいたいし、判つたら大いに作つて欲しいからである。句の味い方は解説本位にした。その方が判り易かろうと思つたからである。例句は主として現代作家のものを拝借した。新仮名遣以前の作品も学生が読み易かろうと思つて新仮名遣に改めた。その点については作家諸君の諒承を願いたい。次に私の川柳観を少し書いておきたい。

私は川柳を人間陶冶の詩であるといつてゐる。人間へ締め木をあてて絞ると、いろんな悪汁が流れ出て、そのあとには朗らかな脱俗した人間が残るのではないかと思う。その締め木の役を川柳が果し

てくれているように思えてならない。句はその人の心であり、十七音字はその人の姿であり、リズムはその人の呼吸であるからである。

人間は生れながらにして、跪くように出来ている。しかし、いくら跪いても、どうにもならないことに気づかないようである。しかし私は川柳することによつて体内の悪汁を排出することに成功している。だから私にとつて川柳することは単なる趣味ではなくて、人生をいかに生きるかということを知るためである。拙句の

寝転べば畳一じようふさぐのみ

と云うのが川柳によつて得た私の人生観なのである。更に私は

人類は悲しからずや左派と右派

と云う句を詠んでいる。これが私の世界観である。私は常に川柳に生きることによつて、平和な世界を生み出したい念願に燃えているものである。

本書を手に入れる人達も又川柳によつて、よりよき人生に生きぬいていただきたい。

一九五五年仲秋

川柳雑誌社編輯局にて

麻 生 路 郎

目次

川柳の作り方

川柳とは……………	一
川柳の形式　Ⅰ・Ⅱ……………	二
川柳の三形態……………	三
（一）文語体の句——（二）口語体の句——（三）話し言葉の句……………	三〇
川柳を表現する文字……………	三六
川柳を表現する語彙……………	三六
（一）雅言を用いた句——（二）俗語を用いた句——（三）術語を用いた句——（四）漢語を用いた句——（五）外語外来語を用いた句……………	四二
多読多作……………	四三
雑吟と課題吟……………	四五
入門は身辺の写生から……………	四七
写生句は斯うして……………	五五

穿ち味の句	六四
可笑味の句	七〇
皮肉味の句	七六
真実味の句	八〇
軽味の句	八四
感覺味の句	八七
比喻法の句	八九
誇張法の句	九三
擬人法の句	九五
擬音法の句	九八
前書の句	一〇一
慶弔句のこと	一〇四
七七型の句に就いて	一〇
恋の句に就いて	一三
時事吟に就いて	一九

川柳と俳句の相違点と類似点……………一三

句会の在り方……………一六

(一)句会——(二)句報

選に就いて……………一三

(一)自選——(二)簡人選——(三)共選——(四)互選

暗合と類句……………一四二

(一)暗合——(二)類句

推敲の仕方……………一四八

句品に就いて……………一五

風格に就いて……………一五六

川柳の味い方

「腐るから」其他の句の鑑賞……………一六

川柳の作り方

川柳とは

川柳（せんりゅう）を説く前に、川柳を少し並べて見よう。

- | | | |
|------|--------------------|-----|
| (1) | お酒でも出せと病人氣を使い | 春 巢 |
| (2) | 金魚屋に舞妓たもとを教えられ | 彫 秀 |
| (3) | 女なる悲しみおんな酌をする | 梨 里 |
| (4) | バアテンダァコップをふいてとりあわず | 路 生 |
| (5) | うじむしが仲間を蹴つてせりあがり | 貴志子 |
| (6) | 子の部屋を易々諾々と追い出され | 猫 三 |
| (7) | 姑の不幸は耳がまだ聞こえ | 満 潮 |
| (8) | 税務署と聞いて蠅取紙を踏み | 玲 人 |
| (9) | 挨拶の物をもらつた声となり | 栞 |
| (10) | 新世帯ポンプは僕が押してやる | 花川洞 |

右に列挙した短詩の一つ一つを一読されたなら、川柳とは短詩型文学の一つの形式に与えられた呼称であるということがうなずけるであろう。そして、その形式は五音・七音・五音即ち十七音字中心であり、そして、その内容は所謂川柳味と称するユーモアや諷刺や穿ちを主流とした人間探究の批判詩であると云うことも理解できるであろう。私はこれを「川柳とは人間及び自然の性情を素材とし、その素材の組合せによる内容を、平言俗語で表現し、人の肺腑を衝く十七音字中心の人間陶冶の詩である」と定義しているが、それは大たいこの程度のものであると云うワクを示したに過ぎない。

短詩型文学には散文と違つて語齣の上に多くの省略が行われているので、一読しただけで句意を充分汲みとりにくいかもしれないが、前掲の句を熟読玩味されたいものである。そうすることによつて、(1)の病人心理、(2)の祇園風景の穿ち味、(3)の女性心理の穿ち、(4)のバアの風景の穿ち、(5)のうじむしを詠んでいるのが人間への諷刺、(6)の家庭川柳の穿ち、(7)の姑へ痛烈な批判、(8)の商人心理、(9)の人間共通の心理、(10)の朗らかな新家庭の写生句等々を興味深く感じ取ることが出来れば次の解説を読む上に大きな力となるであろう。

川柳の形式

短詩型文学としての川柳は十七音字中心の形式で構成されていることは前述の通りである。十七音字とは五音・七音・五音のことであり、その配列は必しも五音・七音・五音でなくてもいい。七音・五音・五音でも五音・五音・七音でも、八音・九音や九音・八音のような他のくぎり方でもいいのである。そこに形式上幾多の変化を生じ、川柳の味に深みや軽みやその他の力を添える上に大いに役立つのである。大たい、それらの音数が一句を構成するのに音律上ゆるされる範囲は十二音字から二十二、三音字ぐらいまでの音数であるが、それは両極端を示したに過ぎないのであつて、その殆んどが、十七音字と云う基礎的な音数で構成されているので十七音字中心と称しているのである。従来音数の長いのは字余りの句と称していたし、七音・七音の十四音字の短い句は短句とか、十四字詩とか呼んで特殊の場合に一部の作家が作っているくらいのものである。その点から云つて、川柳は十七音字中心で作句しなければならない。どうも十七音字では巧く纏らないからと云つて、短いままのものや、だからと長いままのものを作つてはならない。形式による制約が自分の思想を盛り込むのに何等不自由を感じない程度の作品を作りあげることがのぞましいのである。むしろ、この十七音字中心の制約が、川柳本来の姿であることを知らねばならない。

形式あつての川柳である。然るに伝統的なこの形式を簡単に棄ててしまつて、ダラダラと長い散文のちぎれのような

三十年も帰国せぬという中華理髪師の気さくな物腰

水 声

を自由律川柳だと称したり、或は単に印象の焦点だけをポツンと表した

元旦——暮る

半 文 銭

が川柳であるなどと称したところで、それは作者のひとりよがりであつて決して川柳ではないのである。前者は三十一音字であり、後者は六音字である。単にこれ等の句が形式の上で川柳の範疇から脱却しているだけでなく、その内包するものすら川柳としてはうけとれないと云いたい。

形式の尊さに馴れすぎてはならぬが、と云つて安易な反逆はゆるせないのである。川柳の形式が十七音字中心以外にないとは断言しないが、多年伝承して来たこの美しいリズムミカルな形式が余程の天才でない限り、そうヤスヤスと打破出来るものではない。

たとえばここに一個の卵がある。その卵を卵として認識するのは、その外郭の卵殻の形式による外はないのである。この卵殻を割つて見てはじめて、ああ、コレは卵だと気づくのではない。中身は腐つているかもしれないが、兎に角、その外殻によつて卵であることを知るのである。川柳の十七音字は、卵の殻と同様に一応それが川柳であることの目標になるのである。

しかし、川柳に於てはその川柳がすぐれた川柳であるか、どうかは中身が決定する。若し中身が腐

つてゐるか、栄養不足のものであれば、それは卵には違ひないが、卵としての価値はないことになるのと同様に、川柳に於ても中身が腐つてゐるか、栄養不足のものである場合にはそれは一見川柳には違ひなくとも棄ててかえりみられないということになるのである。ここで卵を川柳と仮定したが、では卵であるならば、すべて川柳かと云えば必ずしもそのすべてが川柳であるという訳にはいかない。卵と云つても、鶏の卵もあればアヒルやウズラの卵もある。それは外殻にあらわれた形状の大小や色彩や重量やその他によつてコレは鶏の卵である、コレはアヒルの卵である、コレはウズラの卵であるとするのである。それと同様に、三十一音字であるから、これは短歌である、十七音字であるから、コレは川柳であるとか、俳句であるとかいう風に認識するのである。しかし、川柳と俳句とは同じように十七音字であるから、鶏の卵と家鴨の卵とを、はじめて見た人が、どちらが鶏の卵であるか、家鴨の卵であるかが判らないように判りにくいかもしれないが、一度覚えたらそれを区別することはさう難しいことではない。

次に、短歌と俳句と川柳の三つの例をあげて見よう

○

指をもて遠く辿れば水いろのヴォルガの河のなつかしきかな

土岐善麿

○

夏は来ぬ相模の海の南風にわが瞳燃ゆわがこころ燃ゆ

吉井勇

よこたわる煙草いつぱん冬帽に

不死男

春の昼遠松風のきこえけり

草城

一本の外はどうでもよいテープ

橙舎

闘争に勝った途端に社がつぶれ

喜由

最初の二首は短歌であり、次の二句は俳句であり、最後の二句は川柳である。この例によつても短歌と俳句、短歌と川柳との違いは、その形式に於てアヒルの卵とウズラの卵ほどに違っているのを見して判るが、俳句と川柳との違いは、俳句も川柳も作つたことのない人には一見して判りにくいかもしれない。しかし、その道に入ればそう難事ではないのである。

俳句と川柳は共に十七音字の形式をとつてゐるので、全く同一の形式のようではあるが、それは同

一の形式に見えるだけで川柳眼或は俳句眼と云う虫眼鏡で覗くと微細な点で違っていることを発見するのである。単に形式が違うだけでなく、素材の構成が違つて来るし、作句の態度も違つているので、全然違つたものになるのである。しかし、ここで、その相違点を述べても一寸判りにくいと思うので、川柳と俳句との相違は別のところで説くことにしたい。

誰でも、川柳とは何かということを解説するのに、形式と内容を別々に説くが、その実、形式と内容と云うものは別々に存在するのではない。形式と内容が巧みにマッチして全く一つのものに溶け合つてこそ、はじめてすぐれた川柳になるのである。それは堅牢な卵殻と充実した中身の卵白と卵黄とで品質の良い卵が出来上ると同様である。良い卵を一つの川柳とすればその作者のあただが、卵殻や卵白や卵黄の品質のよさや含有物質のパーセンテージを決定して作者のオリジナルな作品を作りあげるのであつて、幾ら多作しても、品質の悪いものや、全く異質の物質であつては問題にならないのである。それは腐つた卵が栄養にならないのと卵殻の中に綿をつめたのでは卵だと云えないのと同様である。

敗戦後、姿ずしという寿司があつたが、いつの間にか姿を消してしまった。なるほど姿は寿司の姿をしていたが、箸で挟むとすぐにバラバラになつた。寿司に用いた飯も、飯の姿はしていたが、味にうま味がなかつた。すしであることは、その形式で一見して判るが、すべて形式だけではダメだと云

うことはこの姿ずしが証明していると思う。

しかし、内容だけで、すぐれた川柳が出来上るものではない。その内容と称しているものは、すぐれた川柳が出来上るための素材にすぎないのである。素材の組立ての如何によつて、よくもなるし、悪くもなるのである。たとえば、寿司の中身である飯や、その上に載せられた魚類はそれぞれ一つの素材にすぎないのであつて、その一つ一つが寿司である訳はないのである。それ等の素材のあんばいによつてはじめて寿司の形式が生れるのである。これによつて見ても十七音字の形式をはなれて川柳のないことは明らかであろう。

II

ここで、もう一度前へ戻つて、十七音字の形式を分解してみよう。作る人のために、どういう風に組み立てられているかということを知らなければならないからである。

無造作に	うしろへ投げた	洗濯屋
指させば	拭いてから出す	骨董屋
釣竿屋	釣れる手つきで	客に出し
塵埃事	あそこの角で	又こぼし

二葉	吐二也	柳蛙	墨水
----	-----	----	----

辛 ⁵ じて	一人 ⁷ 坐れる	煙 ⁵ 草店
福 ⁵ 寿草	松 ⁷ にしたがい	い ⁵ かしこ
七日 ⁵ 過ぎ	出 ⁷ したから来た	年 ⁵ 賀状
火 ⁵ の姿	蠶 ⁷ と揺れ	尾 ⁵ と揺れる
蚊 ⁵ 張の蚊も	実 ⁷ は出口を	探 ⁵ してる
尋 ⁵ ね人	浴衣 ⁷ のままと	書 ⁵ いてある

湧	聴	耕	愚	葭	佳
三	松	一	平	乃	山

これ等の句は何れも五音・七音・五音で組み立られたものである。表現形式としては基本的なもので、初心者はこの形式にあてはめて作句すれば句の良否は別として兎に角川柳らしいものが出来るのである。しかし、どんな句でも五音・七音・五音で詠みさえすればいいという訳ではない。内容によつては他の音数形式で表現しないと句が生きた場合があるのである。

右に述べた五・七・五型の外に、七・五・五型や、八・九型、九・八型、六・七・五型、五・八・五型、七・七・五型、五・七・七型等幾らでもある。異例としては七・七型もある。

前述の五音も更に二音と三音、三音と二音、二音二音一音、一音二音二音、二音一音二音というように分解することが出来るし、七音も三音四音、四音三音、二音二音三音、三音二音二音、三音一音

三音、三音一音二音一音、一音三音一音二音というように幾らでも分解することが出来る。これは日本語の特性を生かし、句の内容を尤も適切に表現するため、音の硬軟を選む上に必要となるのである。音の硬軟は発音によつて誰でも判るので詳しくは説かぬが、サ行のサシスセソは硬音でハ行のハヒフヘホは軟音である。そして日本の文学は一字で一音を表わしている。字は二字でも、しゃとかちやというように、つまる音は一音として扱うのである。

次に五・七・五型でないものの例句を示すこととする。

車窓暖か	チルチルミチル	顔並べ	形	水
めつたにく	女	女をはめず	喜	由
ヨヨと泣いといて	他人さんへ嫁ぎ		栞	
万障繰り合せて	ロハの席に行く		没食子	
底にたまつた牛乳を	勿体なしと見る		水	客

はじめの「車窓暖か」の句は七・七・五型で十九音字、二句目の「めつたにく」の句は六・三・七型で十六音字、三句目の「ヨヨと泣いといて」は八・九型で十七音字、四句目の「万障繰り合せて」は九・八型で同じく十七音字、五句目の「底にたまつた牛乳を」は十二・八型の二十音字で構

成されている。そしてそれぞれの内容を巧みに生かしているのである。

川柳を構成する音数については以上の通りであり、それ等の句は音数に従つて音読すれば句意が、素直にアタマに這つて来るのであるが、基本的な五・七・五に読んだのでは句意がスラリとアタマに這つて来ない句がある。たとえば

妻として	来れば芝生へ	もう座せず	小松園
5	8	5	
貧乏に	美あり	菊いま吹かんとす	谷水
5	8	5	
百円の	肴は箸の	先で喰べ	弓削平
5	9	5	
また後で	来ますと女中	話好き	潮花
5	9	5	
都会人	エスカレーター	でも歩き	句沙彌
5	7	5	

等は何れも、右側に横線で示したように五・七・五型に区切つて読めないことはないが、これを左側に横線で示したように、五・九・三型、九・八型、九・六・二型、八・二・七型、八・四・五型の句

として読めば、句意が素直にアタマに這入ることを知らなければならぬ。

従来のような切り方と、句意による切り方とが句によつては一致するが、すべて句意によつて切れば句の価値を一読しただけで明瞭に味うことが出来るのである。斯うした研究を作家が自作の句に試みられたならば表現上のささいな疵でも摘出することが出来、句の推敲上大いに役立つものである。

川柳の三形態

川柳の形態は用語によつて次の三つに分類することが出来る。

その一つは文語で構成された句、その二は口語で、その三は話し言葉で綴られた句である。

(一) 文語体の句

次に文語体の句を例示し、それ等の句を通して文語による句の在り方を述べて見よう。

完膚なく虫に螫されしキャンピング

閑 生

袈裟とれば何を憚る酒肴

鉄 洲

男みなモシヤ／＼と悼みけり

沐 天

ともだちの現れては消ゆ雲のごと

丹 路

何れも今人の句であるが、「完膚なく」と云い「虫に螫されし」と云う表現が、文語であることは説明するまでもなからう。「袈裟とれば」にしても「悼みけり」にしても同様である。「現れては消ゆ」「雲のごと」にしても文語である。そして以上のような文語を用いた句は口語体の句や話し言葉の句と比較して何処となく重苦しい感じがするが、それだけに嚴肅、莊重、静寂と云つた内容の表現に適するようである。総じて句品も秀れているように思われるが、芸術的価値は必ずしも句品の尺度だけで決定することは出来ないものであるから、句品のよさが、他の口語体の句や話し言葉の句よりも秀れているとは云えない。

右に挙げた句で、「完膚なく」の句は完膚という漢語を用いたため文語の語勢を一段と強調しているし、「螫されし」と更に文語を続けて句意をグン／＼強化させていることを知らねばならぬ。同じく文語体の句であつても「男みな」の句は他に比して遥かに柔かみがあるのは「モシヤ／＼」と云うリズムミカルな擬音語が含まれているからである。

どちらかと云えば文語を用いた句は、句中の漢語などによつて句意を一層強めるのに効果的ではあるが、それ等の語彙の持つ魅力に頼りすぎて、陳腐な句、厭味な句、内容の空疎な句になり易いこと

である。次の句はその一例だと云えよう。

母校にて

校門よ久し六月みなづきの空晴れぬ

既に満つ笑ひたのしも古生徒

×	×
×	×

この作者は殆んど文語によつて作句している。句品のよさを誇りとしているのかも知れないが、私の云う文語による作句の弱点を余すところなく露出している。これでは陳腐な單なる叙情句にすぎなくて川柳とは云えない。六月を特にみなづきと読ましたり、笑いたのしもと雅言を用いたところで川柳味とは全く縁遠い句となつたに過ぎない。川柳に文字の遊戯は禁物である。

文語による句例を今人の句によつて示したが、古句にもその例は少なくない。その二三を挙げて見よう。

神代より日月今に地に落ちず

女房の云つた師走になりにけり

われ未だ精進と云ふ日を知らず

去る時に曆に沙汰もせざりけり

「女房の」の句の「師走になりにけり」のなりにけりや、「去る時に」の句の「沙汰もせざりけり」のせざりけりの文語が、いかに句意を強化して皮肉な味を出すに役立つているかを知つたならば川柳の構成上文語の力もそう軽々しく見遁してはならない。

(二) 口語体の句

川柳の生い立ちは前句附（まえくづけ）の附句（つけく）を独立させて句意の判り易いものを蒐めて「柳多留」（やなぎだる）を編んだのにはじまるのである。では、その半身である前句附の題とは一体どんな形式のものであつたかと云えば、その多くは「今やおそしと今やおそしと」「一方は海一方は山」「引ッ張りにけり引ッ張りにけり」「すましこそすれすましこそすれ」の如く、七音・七音の十四音字であつて、それへ五・七・五の十七音字を附けたのである。時には「さりとてはくわりとしたる心なり」と十七音字の題を課し「よめが小唄をしうとめが弾く」のように、十四音字を附けたのであるが、それ等の課題の多くが文語体であつたにもかかわらず、附句の多くが口語体として詠まれていることを発見するのである。そして川柳として単独に詠まれるようになって、それ等の多く

が、俳句のように文語体で詠まれずに、口語体で詠まれている原因がどこにあるかと云えば、川柳は所謂庶民のものとなつて、平言俗語で詠まれたためであらうと思われる。詰り平言俗語は文語体を口語体へ誘導した訳である。袴を脱がして丹前を着せた形である。そして、袴をぬいで丹前を着たために、人間味がウンと出た訳である。

明治の初期までは文語体で小説を書いていたのを、山田美妙斎や二葉亭四迷などの先覚者が言文一致を提唱してから口語体で書くようになったのと一寸似ていると思う。尤も小説の方は選まれた人たちが意識的に、口語体で書くようになったのであるが、川柳の方は一部に武士階級の作家もいたが主として庶民が作家であつたことから、それ等の用語として平言俗語が自由に、しかも自然に用いられるようになったのであらう。そして文語体を僅に残して、その殆んどが口語体の句となつたのである。しかし、口語体の句と云つても、すべてが話し言葉の句となつた訳ではない。それは文語体で書いていた小説が口語体で書かれるようになったと云つても「何々なりき」と書いていたのを「何々であつた」と書き「何々なり」と書いていたのを「何々である」と書くようになったのと似て、文語体くずしと云つてもいいし、文語体と話し言葉との混合体のような口語体で句を詠むようになったのである。尤も小説が口語体で書かれるよりも、川柳が口語体で詠まれた方が年代的にはずっと古いのである。では、どんな句が文語体くずれの口語体の句かと云えば、

乳母が顔あやしてござは笑われる

かなな屑かみかみ大工といでいる

里帰り夫びいきにもうはなし

などがその例である。「柳樽」(やなぎたる)にあるこれ等の句は何れも、文語体の句でもなければ話し言葉の句でもないが、所謂川柳の大半は斯うした表現で構成されているのである。つまり平言俗語で作句したために、文語体を放れて斯うした句風が自然に生れたのである。これは現在でも同じである。斯うした表現の句を私は口語体の句と呼んでいる。そして従来口語体の句としていたものを私は話し言葉の句と呼ぶことにしている。

(三) 話し言葉の句

文語体の「何々なりき」を口語体では「何々であつた」と表現するが、話し言葉では「何々でした」と云う云い方をする。演壇でなら兎も角、人と對話する時には「何々であつた」とか「何々である」とは云わない。私の云う話し言葉の句と云うのは詰り会話に用いられる言葉で表現した句の謂である。構成それは句の内容を飛躍させるために、句の中の人物の一人或は一人以上の言葉を藉りて句

を構成し、光景を髣髴とさせるのである。その代り一歩あやまると、平々凡々の句となるおそれがある。

お詣りに行くってやっと出て来たの

小次郎

この句を一読して、愛人の呼吸使いを間近かに感じさせられるのも、話し言葉の句の持つ妙味に外ならないと思う。

葬式で会いばろいことおまへんか

豆 秋

「葬式で会い」と云う説明語と「ばろいことおまへんか」と云う話し言葉で構成された句である。ばろいことは利益の多いこと、おまへんかは、有りませんかと云う意味の大阪地方の方言である。大阪の商魂の逞くまじさは人の顔さえ見れば「ばろいことおまへんか」を連発するのであるが、この句は処もあろうに葬式で会つても、この言葉が飛び出したことを詠んだのである。厳肅であるべき筈の場所だけに、この話し言葉はおそろしくユーモラスな響きをかもし出しているではないか。

お千代さん蠣がひろくば泊まろうか

古 句

これは加賀の松任の俳人千代女が廿五歳で夫に死別した時に、

おきて見つ寝て見つ蚊帳の広さかな

と云う句を詠んだので、その千代女に呼びかけた句である。「ひろくば」は文語であるが、人によつては言し言葉として「ひろくば」という云い方をする。よしんば「ひろくば」が文語であつても、この句などはその大半が話し言葉で構成されているので、話し言葉の句に入れてよからうと思う。

床の軸親和とやらが書きんした

古 句

「床の軸」は「葬式で会い」と同じように、その場面を表わすための説明語である。「親和とやらが書きんした」が吉原の花魁の言葉であるから「床の軸」は花魁の部屋にかかっている軸であることを表現しているのである。「琴棋書画ならべたばかり知りません」と云う古句があることから類推出来るように、多くの花魁は性慾の対照に過ぎなかつたのであるが「親和とやらが書きんした」と云い得る女もいたのである。三井親和（みついいしんな）は江戸深川の住人で、安永天明の頃、能筆で世に知られて居た書家である。「書きんした」「知りません」はアリンス言葉と云つて吉原の花魁用語だったのである。曾て軍人用語に「そうであります」があるように、各地から売られて来た花魁に用語の統一をは

かり、参勤交代で江戸へ出て来た田舎侍が遊客として吉原に遊んでも花魁言葉さえ覚えれば話が通じ
るようにしたのである。そうした風俗や習慣を知る時に、話し言葉の句の味が一段深められるのであ
る。

京極でお踏みやいたといひ募り

只 英

にしても、

そいどすか　　そいやおへんに乗りすごし

汀 果

にしても、云い争いの言葉でありながら、いかにも物やわらかな京言葉で、京都と云う土地柄を実に
巧みに捉えているではないか。話し言葉の妙味も、ここまで来れば大したものである。

川柳を表現する文字

川柳を表現する文字と云ったところで特別な文字が使用されている訳ではないが、表現しようとする
内容を出来るだけ作家の意図通りに読ませようとするためには、多少とも文字の使い方に就いて特
別な苦心を払わねばならないので、そのことについて少しく述べて見たいと思う。

「柳樽」や「武玉川」のような古句集には、誤字や当て字が多いので、そうした表現上の文字に就ては全然無関心のように見えるが、必ずしも無関心だとは云えない。

例えば「夜」と云う字に「夜^ル」と片仮名の小さい「^ル」を附けて「よ」と読むか「よる」と読むかを区別させていることが、多少とも表現上の文字に対して関心を示していると云えよう。

大イ そうなせきばらいする大がらん

柳樽八篇

の「大イ」の「イ」も「たい」と読ませるために附けたものである。斯うした例は幾らでも挙げる事が出来る。しかし濁音の点が落ちていたり、今日の当用漢字の新聞を読んでいるように、熟語の一字が仮名で、一字が漢字だったりするところを見ると、現代の作家のように、文字に対して特に神経質でなかつたと云えるのである。兎に角間違いのないように読ませることが本位で、そうした送り仮名をつけたのである。尤もこれは作者がつけたのか、句集の編纂者がつけたのか、作者がつけたのもあり、篇纂者がつけたのもあるのかも知れないが、何れにしても間違いのないように読ませる目的で、こんな表現をしたのであろう。前述の「大イそう」にしても、特に斯うした表現をする必要はないと思う。むしろ「たいそう」と全部仮名で表わした方が穩当ではなからうか。

しかし、句によれば、そうした特別の注意が必要だつたのである。古句に使用された文字を分類し

て見ると、仮名ばかりの句、仮名を多く使用した句、平仮名と片仮名を混用した句、仮名と漢字を混用した句、漢字ばかりを用いた句など、いろいろあるが、前後の關係上読み易いように片仮名を挿入したもの、又は特に注意を喚起したために、片仮名を使用したのであらうと思われる程度であつて、それ以上文字に対する深い省察が行われたとは考えられない。

右に述べたような観点から、現代作家の句に就いて文字の使い方を検討して見ることにしよう。
先づ平仮名ばかりで表現された句の例として拙吟の

ひるふかし

いいたいことを

いうている

を挙げておく。句は「須磨雜観」の中の一句で、この句は全部平仮名で表現されているばかりでなく、三行に配列して発表している。それは句を鑑賞する上に、ゆとりを求めているのである。いささか贅沢ではあるが、私の考えでは句というものはそれぞれの内容に従つて、一行のもの、二行のもの、三行のものと云つた風に発表するのがホントだと思つてゐるので、紙面がゆるす時にはそれを実行して来たのである。従つてこの句は三行にして発表しているが、これを一行にすると、いささか読みず

らくなり、漢字を入れて読み易くすると、漢字からうける刺戟が強すぎて、この場合、作家の持つ感覚がそこなわれるように考えられたのである。拙吟を例に引いて恐縮だが、斯う云う考え方もあるということを例に示したのである。古句にも、

こつちでもふるといふよとかしてやり

と、云うように、平仮名ばかりで表現された句もあるにはあるが、作者が意識して平仮名ばかりで表現したのではないと思われる。斯うした穿ちの句になると、平仮名ばかりで表わすよりも、

こつちでも降ると要るよと貸してやり

とした方が、読みよくもあり、強く響いて効果的だと思う。文字の使い方もなかなかむずかしいものである。前述のように平仮名を多く用いる場合の効果もあるにはあるが、一面には又、あまりに平仮名が多いために、同音で他の意味に解せられるという難もないことはいと云う欠点も知っておかねばならない。

バアテンダアコップをふいてとりあわず

路 生

この句は片仮名と、平仮名を混用した例である。バーテンダーは英語の Bartender であり、コップは英語の Cup であるから、共に片仮名で表わした訳である。「ふいてとりあわず」はわざと漢字を使わずに、文字からうける強い刺戟を避けたのである。文字に眼を奪わせないで直接内容へ眼を向わせるのに役立つからである。

では、句の表現にはなるべく漢字を使わない方がいいかと云えば、必ずしもそうではない。漢字を適切に使用すれば、句が読みよくなるし、句意が強化されると云う効果も奏するのである。「降ると要るよ」の場合がそれである。時には漢字ばかり羅列して句をなすことがある。その例は古句にもあれば現代句にもある。

次に今人の作例を示すことにしよう。

本家本家元祖元祖土産物	八
若旦那映画鑑賞会幹事	破衣
一步一步一万二千尺	六文銭
月給日弁当屋靴屋洋服屋	紋太

漢字ばかりで表現した句はかなりある。これ等の句は何れも助詞が省略されているのであるが、そ

うした省略によつて反つて句意は強化されている。これ等の句は漢字が押しならべられただけで、内容を誇張し、その誇張によつて穿ち味が強められて居り、読み下して行くに従つて情景がうかび上つて、何んとなくはおえましくなる句である。

しかし、これは少しでも川柳の表現というものになずんだ人たちにとつては、はおえましい句であるかも知れないが、初心者から見ると単に名詞の羅列に過ぎないのであるから、句意を充分に解しにくくて、共感することの出来難い句ではなからうか。そうした人たちのために、句意を簡単に解説して見よう。

「本家本家」の句について云えば、温泉場や奈良のような観光地へ出かけると、軒を並べて土産物を売っているが、どの店を見ても、何々本家であり、何々屋元祖である。旅人の眼には、どれがホントの本家なのか、元祖なのか全く戸惑いさせられる。

本家と云い元祖と云えば一軒しかない筈のものが、軒を並べて本家があり元祖があるのである。作家はそこに興味を感じたのである。そして誰でもが、そう感じるところに穿ちがあるのである。

次の句は「若旦那」「映画鑑賞会幹事」と二つに区切つて見る。何んでもない単純な想に違いないが、若旦那らしい誇りや、イヤ味たっぷりの態度が大映しになつて来るではないか。人がどう思つていようと一切おかまいなしに、幹事の名刺をふりまわしている若旦那を想う時、何んとなくはおえま

しいものが感じられるのである。

第三句目の「一歩一歩一歩」の句は言うまでもなく富士を詠んだ句である。この句のよさは遥の雲間にそそり立つている雪をいただいた富士の麗姿と、一歩、一歩、一歩と蟻の歩みを続けている麓の旅人との対照にあるが、多少格言じみてとられるところに、この句の表現には指がある。

最後は「月給日」の句であるが、これは時間的に少しく遡上つて鑑賞しなければ、ホントの味を受ることが出来ないのではないかと思う。古句が徳川時代の風俗習慣や人情や制度などを知つていないと、ホントの句意を解することが出来ないように、この句も、この句が作られたころの世相を知つていないと解釈が適切でないことになり、句の面白味が感じられない結果を招くのである。しかし句に一々年代が書いてある訳でないから、ホントにその句の味を知ると云うことはむずかしいことである。

この句が作られた頃には月賦販売と云う制度が非常に旺んだつたのである。そして会社員などは電話一つで、呼びつけて買物が出来たし、それも当然のように支払は月賦の方法を採つたものである。これだけの前置をすればこの句の句意は半ば以上解することが出来よう。月給日になると、それ等の売主や、店員が少し大げさに云えば殺到して支払を要求しに来るのである。この日を遁せば更に一ヶ月支払を延期させられるからである。安いサラリーで、何んとかやりくりして来たサラリーマンに

とつて、月給日は反つて厄日だったとも云えるのである。そこを擱んだのがこの句である。

以上四句のうち「一步一步」の句をのぞいた他の三句は何れも穿ちの句である。漢字ばかり並べた句には概して穿ちの句が多いようである。漢字の持つ固さが、穿ち味を強調するのに適するからであろう。

要するに、川柳を表現する文字は、内容に適正な文字が使用されると云うことになる。内容の固さを表わすためには多くの漢字を使用する方がいいし、内容の柔らかさを表わすためには、平仮名を多く使用した方がいいことになるのであるが、内容そのものを強く感じさせるために、直接眼に触れる文字から強い刺激をうけさせぬようにするためには平仮名を多く使用すればいいのである。そして特に注意を喚起させたい場合や、外国語を用いた時には片仮名にすることは前述の通りである。極く稀れではあるが特に必要な場合には原語をそのまま用いることもある。

人によつては「曲」の字に、ルビを附して「うた」と訓ませたり「六月」に「みなづき」とルビを附したりして、いろいろ文字に技巧を施す作家もいる。眼に訴える表現として、ある程度はそうした技巧もゆるされるのではあるが、あまりに技巧が過ぎると、文字の遊戯に終つて、内容が空疎になる惧れがある。そうした作家は文字の魅惑に囚われすぎるのである。

斯うしていろいろと研究を進めて行くに従つて眼に訴える川柳の表現は完成されて行くのである。

川柳を表現する語彙

川柳は短歌や俳句と違つて、平言や俗語で創作するならわしになつてゐる。それは昔も今も同様である。しかし昔の平言や俗語が、そのまま今の平言や俗語でないことは云うまでもなからう。

建て前としては平言や俗語として作句をするのであるが、平言俗語以外に、雅言や術語や漢語や外語外来語さえも自由に駆使することをゆるされてゐるのである。要は如何にそれ等の語を適正に消化して行くかにかかつてゐるのである。次に平言俗語で構成される川柳を一段と飛躍させるために使用された雅言（古語）、俗語、術語、漢語、外語外来語等の語彙を使用した句に就いて少しく述べて見ようと思う。

(一) 雅言を用いた句

雅言（古語）を用いた句は古句にもあるが、今人の句では

学習院同じ机にいらせられ

孤 柳

正直であれ親鸞がみそなわす

松 郎

子にしかめやもと思いつ腹がたち

塊 人

王の座にましますメロン売れ残り

柳川 亭

などの「いらせられ」「みそなわす」「しかめやも」「まします」などがそれである。これ等の雅言は平言の中に混用されることによつて、句意を、より厳肅にしたり、皮肉やユーモア味を強調したりする役目を果しているのである。しかもそれ等の混用が少しの目障りにもならないし、木に竹をついだような感じのおこらぬのも、川柳に与えられたよさの一つに数えることが出来ると思う。

(二) 俗語を用いた句

句を構成するのに、俗語が用いられていることは、前にも述べたが、平言で綴られた句中に、俗語を混用して一句を成す場合に、その俗語が句意を一段と飛躍させていることは、雅言が平言中に含まれて特殊的な効果を挙げているのと同様であつて、川柳表現上の幅の広さを思わされるのである。次に今人の句を例示して寸評を試みよう。

くされ緑雨にふりこめられたよう

曙 草

苦勞なら一緒にするとぬかしたり

露 斗

てきばきあおぐ朝のかんてき

山雨楼

「くされ縁」の句は、離れようとしても離れられない俗に云う悪縁の二人の憂鬱さをしとしと降る雨に降りこめられたさまにたとえた句である。くされ縁と云う俗語に、句の内容複雑な二人の関係のすべてを想像させる力が含まれていることを思うと俗語の効果の大きいことが判るであろう。

「苦勞なら」の句は、罵つて云う言葉のぬかすという俗語で句意をウンと強調させたところにこの句のいのちがあるのである。「てきばきあおぐ」の句は、七・七型の句であり、それと断定は出来ないが出勤前の風景を想像させられて、ほおえましくなる句である。この句にしてもてきばきという俗語が表現効果を一〇〇パーセントにしている訳である。

(三) 術語を用いた句

術語又は専門語と云うのは英語の Technical terms のことである。それぞれの畑で、専門的に使用される語を句に採りいれて、句意を適正化させるのに役立たせるのである。これを他の語で云い表わそうとすれば、随分多くの言葉を使用しながら、しかもその語の持つ意義を充分に云い表わすことが出来ないうらみがあるので、専門語をそのまま句中に採りいれるのである。術語の持つ特徴は句意を

的確にすることと、使用文字を短縮することである。しかも内容に深みや複雑味を持たせることも出来るのである。しかし、あまりに専門的な語彙を使用すると、一面難解な句になったり、ひとりよがりの句になるおそれが多分にあるのである。要は術語と云つても、その畑におけるやや普遍性のある語であることが条件とされるのである。句例によつて示すと、

凡聖一如元旦のころ知る

路 郎

と云う句で「凡聖一如」は凡人も聖人もおなじだと云う仏語であるから、術語である。従つてこの句の場合でも「ぼんせい一じよ」と訓まないで仏教での読み方によつて「ぼんしょう一によ」と訓むのである。

南無阿弥陀仏と炬燵へぐつと伸び

雅 幽

転落の石の姿で無常来る

橙 舍

の「南無阿弥陀仏」も「無常」も仏語であるから、矢張り術語だと云える。雅幽も橙舍も比較的天折の方で、雅幽は病死であつたが、医博であつた橙舍は往診の途次、自分の乗っている自動車が郊外電車の下敷になつたため、世を早めただけに、この句を読むと辞世句のような思いがするのである。

盗塁へ夕日は既に落ちている

路 郎

この句の「盗塁」も野球用語で、所謂術語なのであるが、あまりにも普遍化されてしまつて、術語の域を脱しているような感じがするが、術語であることには間違いない。その証拠にはこの盗塁の内容を他の語彙で表現しようとしても、これほど簡勁に適切に表現し得られる語彙が見つからないのである。これ等の語彙によつて見ても、術語の妙味が奈辺にあるかが判るであろう。劇には劇の術語があり、鉄道には鉄道の術語があり、それぞれの畑に、それぞれの術語があり、そしてそれ等の術語が巧みに作句に活用されていることは一々例示するまでもないことと思う。

(四) 漢語を用いた句

漢語は外来語に外ならぬのであるが、外語や外来語を主として欧米語に限定して別項で説くことにしたので、漢語を用いて、句の内容を適正化したものをここで解くことにした。

春眠を配給物におこされる

一 笑

春日遅々として仁王さん眠くなり

白 柳 子

完膚なく虫に螫されしキャンピング

閑 生

愚かさを包む綾羅にことかかず

麾下に集るは鶏ばかりなり

町 二

二 柳 子

作例としては以上にとどめるが、漢語を採り入れた句は幾らでもある。ただ問題は漢語が漢語として、どれだけ役立っているか、いないかにある。右に例示した句で圈点をつけた「春眠」「春日遅々」「完膚」「綾羅」「麾下」等の語彙はいずれも、その句の内容を飛躍させるために特に選ばれた漢語なのである。それ等の一つ一つに就いて少しく述べて見よう。

この句の詠まれた頃の配給物は日日の糧として必要欠くことの出来ないものであつたが、その配給物と、春眠曉を知らずと云われる春眠とは好対照だと云えよう。こころよい春のねむりからたたき起されて、あわただしい配給物の世界へ引張り出された生活描写がこの句の生命である。

「春日遅々」の句も、仁王さんにして春日遅々の語が水際立つて浮かび上つて来る。仰山な云い方をしたところに仁王さんを写し出すにふさわしい語だと云える。ホントに眠たさを感じたのは山門に立つた作者自身であつたことは云うまでもないが、仁王さんを藉りて、春日の長閑さを巧みに描出したのが、この句の手柄である。そしてこの句に画竜点睛をあたえたものは「春日遅々」と云う漢語の力に外ならないのである。

「完膚なく」の句は文語体の写生句であるが「完膚なく」の「完膚」と云う強い語彙が、句に生命をふき込んでいるのである。キャンピングしている人たちの洗面が眼に見えるようである。

「愚かさを」の句では「綾羅」と云う語彙が、氏なくして玉の典をさえ想像させるではないか。これによつて見ても、漢語の使い方によつて、いかにその力が大きいかと云うことを知ることが出来る。

「麾下に集るは」の句は、退職した人の淋しい心境を詠んだ秀れた句である。「麾下」の二字はこの句の脊骨をなしている。在りし日の華やかさも、今の淋しさも、みな麾下という語に集約されている。これ等の句に徴しても漢語が持つている大きな力に想到することが出来るのである。しかし、そうした力を持つ漢語にしても、尤も適正な語を選むと云うことが優秀な作品を創り出す第一歩だと云うことを知らなければならない。

一括して云えば、川柳に使用する語彙は前述したように、雅言であろうと、俗語であろうと、術語であろうと、漢語であろうと外語外来語であろうと、全く自由であつて、何等の束縛をうけない訳であるが、それだけに、木に竹をついだような表現となつたり、飯の中に砂が混じつたような結果を招くことも稀れではない。要するに、この場合にはこの語以外にはないと云う尤も適切な語彙の発見に つとめなければ佳吟は得られないのである。

(五) 外語外来語を用いた句

川柳を構成する用語が主として平言俗語であること、更に適正に用いさえすれば雅言であろうと、漢語であろうと、術語であろうと何ん等の束縛をうけるものでないこと、むしろそうした用語の自由さが、川柳の幅や深さを増すのに大いに役立つものであることを説いたが、ここでは川柳の構成上どんな外語や外来語が句中に挿入されているか、それ等の句の中で外語や外来語がどんな役割を果しているかに就いて少しく述べて見よう。

一つ二つ句例を示すと、

君の指アスパラガスに似て細し

路 生

の句中のアスパラガス (Asparagus) がそれである。比喻法の句である。

ノートではおいしい筈の洋食よ

筑 川

のノート (Note) がそれである。アスパラガスもノートも共に英語であるが、ペーパやコップと同じほどに普遍化されている。

川柳では斯うした外来語を早くから句中に挿入して句の内容の適正化を図っている。

古句の中に散見する外語外来語ではポルトガル語、スペイン語、オランダ語が多い。これは足利時代の末期から、徳川時代へかけて渡来した外人の勢力範囲を反映するものである。明治の末葉から大正時代の句を調べて見ると、外語外来語引用の傾向はますます助長され、昭和時代に入つてからは夥しい数に上つている。そして英語米語が最も多数を占め、ドイツ語、フランス語、ロシア語などを引用した句は稀にしか見当らない。満洲語、朝鮮語は別として、日支事変勃発以後中華語引用の句がかなり殖え、戦争が拡大されるにつれてビルマ語やタイ語やジャワ、スマトラあたりの土語まで註釈つきで引用されていた。一々日本語訳にしたのではその内容がピッタリしない憾みがあるので、原語をそのまま用いたのである。これ等の中には全然翻譯の不可能なものもあり、たとえ翻譯が可能であっても、環境によつてはストーヴを暖炉と訳さないでストーヴのまま用いるのもいいし、ストーヴよりも露語のペーチカの方が適切であればペーチカで表わすことが真に句を活かすこととなる。時には外語をそれぞれ国字のまま引用して句意を明瞭にさせようとつとめたり、新味を感じさせようとしたりしているのを見うける。外語、外来語の引用が句の構成用語として適不適の論は遠く通り越して、ドシドシ実用化されているのであるが、果してどの程度まで外語や外来語を活用したらいいとか云うことについては一応検討を要する問題であらう。

川柳は日本の持つ独特の短詩なのであるから原則としては純化された話し言葉の日本語で創作すべきであるが、複雑多岐な世相を、或は事物を描出するためには語彙の豊富さが第一条件となるので、日本語以外の語彙を借用することも又やむを得ないのである。しかし、それは何処までも内容を適正化するための借用であることと、第三者が容易に理解し得る程度のものでありたい。あまりに専門的な術語を使用した句の多くが、ひとりよがりの句となつて、第三者に理解されなかつたり、説明を聴いて漸く句意が判つても、芸術味が稀薄であつて直ぐに忘れられてしまうような句では折角外語や外来語を借用した意義の徹底を欠く訳である。その点から云つても、第一は巷間に流布された外語、外来語であること、第二はたとえ巷間に流布されていなくても普遍化され易い外語、外来語であること、第三は専門家間で普遍化されている外語、外来語の術語であること、第四は特別な固有名詞などの外語、外来語である。特別な固有名詞の外語、外来語に至つては全く翻譯の余地がないからである。そしてそれ等の外語、外来語の表現には主として片仮名を用いることにしているが、ある人達は目に訴える感触から特に平仮名を用いている場合もある。時にはシャツを襦袢のような漢字を当て嵌めてシャツと読ませている場合もないことはない。

古句でも外来語のカルタに歌留多、タバコに煙草、ラッパに喇叭、カップに合羽という漢字を当て嵌めているのがそれである。では川柳の構成上、どんな外語、外来語が引用されているか、手許の雑

誌五、六冊の中から拾つて見よう。

アイロン、アクセサリー、アナウンス、アバン、アバート、アベック、アブレ、アマカメラ、アメリカ、アル
 サロ、アルバム、アンケート、アンペラ、イエスマン、イヤリング、インキ、インタービュ、ウイスキー、
 ウインド、エキストラ、エネルギ、エプロン、エレジー、エレベーター、オートバイ、オーバ、オペラ、オ
 ルゴール、オンリー、カクテル、ガソリン、カタログ、カーテン、カバ、カメラ、カメラマン、カルタ、ガ
 ールフレンド、カレンダー、カンナ、キッス、ギター、キャパレー、キリスト、クイズ、グラム、クリスマ
 ス、クリスマスツリー、クリーム、グループ、グロ、グロップ、コック、コスモス、ゴーストツブ、コード、
 コップ、コメデイ、コンバクト、サイレン、サインブック、サーカス、サービス、サラリー、サロン、サンダ
 ラス、サンタクロース、サンドイッチマン、シグナル、シネマ、ジープ、シベリヤ、ジャズ、シャツ、ジャン
 グル、ジャンプ、ジョーカー、ショート、シラノ、ジングルベル、スイッチ、スカート、スキー、スキヤンダ
 ル、スクーター、スクラム、スケート、スケール、スター、スタイリスト、スタイル、スタイルブック、スタ
 ンド、ステップ、スト、ストープ、ストリップ、ストロー、スナップ、スビード、スランプ、スリッパ、ス
 リル、ゼスチュア、セーター、セツト、ゼロ、センス、センチ、ソフトボール、ソフトクリーム、タイプ、ダ
 イヤル、タオル、タクシー、タックル、タブレット、タミナル、ダンス、チークダンス、チップ、チャーチ
 ル、チャンス、チューインガム、チンパンジー、デコレーションケーキ、デッサン、テニス、デパート、テ
 ー、ティープレコーダー、デフレ、テレビ、ドクター、ドライヤー、トラック、トランプ、ナイロン、ナホト
 カ、ナンパーワン、ニュース、ヌード、ネクタイ、ネオン、ノール、ノア、ノルマ、パパ、ハイヒール、ハ
 イヤー、ハンカチ、ハンチング、バー、バイオリン、バイト、バイバイ、バイブル、バック、バージン、バ

まだまだ幾らでもあるが、これ位にして、次に、これ等の外語や外来語によつて構成された例句を挙げ簡単な解説を試みることにする。

ス、バスガール、バッハ、バルコニー、バレエ、パイプ、パス、バスボート、パトロン、パバママ、パフ、パーマ、バリ、バリモード、パレット、パン、パンパン、ヒットソング、ヒューマニズム、ビニール、ビール、ピクニック、ピケライン、ピヤノ、ブルジョア、フレックス、フレッシュ、ブレイキ、ブローチ、ブラット、プラトニック、プリンス、プロ、プロマイド、ヘップバーン、ヘルメット、ベースアップ、ベストセラー、ベストテン、ベーターベン、ベビー、ペタル、ペニシリン、ペン、ホース、ホテル、ホネムーン、ホームシック、ホームラン、ボート、ボータス、ボーヴォワール、ボイント、ボーズ、ボスト、ボマード、ボリ、マイク、マイナス、マスク、マスコット、マダム、マダムジュジュ、マツチ、マルキスト、マレンコフ、マンボ、マンホール、ミキサー、ミス、ミルク、メッセージ、メーデー、モデル、モーニング、ユダヤ、ユートピア、ライオン、ライバル、ラケット、ラジオ、ラブシーン、ラブレター、ランドセル、ランプ、リズムカル、リットル、レインコート、レジスター、レントゲン、ロケーション、ロボット、ロマンチック、ロング、ロンドン、ワイフ、ワルツ、ワンマン

ガールフレンド、嫁の気もちで母は見る

兼比羅

智慧の輪へ、私も本気で坐り込み

春日

小半里もアベック、黙つたまま歩き

奇童

マイナスになる酒ちやとて酒ちやとて

パンの耳好きなのも居る子沢山

がたがたのバスで名所とやらへ着き

バツハ聞き一人で飯を噛む暮し

ドクタイも人間癌で死んで行く

チャンスだが然し子の顔妻の顔

クリムだけは妻の老いたもの

キリストが何と説こうがあの眸

カタログの程ではないが菊ひらく

一瓢

春巢

文化

児郎

旋風

草一郎

一善

古木

旭童

「ガールフレンド」の句はアバンの母が、アプレ息子の気持を充分に理解することが出来ないで、ガールフレンドを嫁の気持ちで見ようとするとところを詠んだものである。そのくせ自分では理解ある母だと思つているところにこの句の面白さがある。「智慧の輪へ」の句はパパでなくて父と云う同義語を用いてもよかりそうに思えるが、特にパパとかママとか云わせているクラスの家庭を表わすためにはこの句のようにパパを用いるのである。

「小半里も」の句はアベック心理を巧くつかんだ句である。ガールフレンドにしても、パパにしても、アベックにしても、日本語で表現出来ないことはないがニュアンスが違ってくるので外語をそのまま使ったのである。「マイナス」にしても「パン」にしても「バス」にしても同じことが云えるのである。「バッハ」や「キリスト」は固有名詞であるから、そのまま使うより方法はない。以下それぞれに、それ等の語彙でそのものの実質なり、環境なりを適切に表現するために用いられたのである。

前述の外に、句の構成上、

ロングよしシヨトまたよし好きな娘の

文 秋

スランプだスランプだとして飲み歩き

圭 三

十二月ストが仕事のマルキスト

沐 天

のように、一句中に二語以上の外来語を用いているものもあるが、ここに例示したロングだのシヨトだのスランプだのストだのマルキストだのと云う語彙はコーヒやタバコ式に殆んど日本語化した日常語になつていたので、特に外語や外来語によつて句意を強調すると云うように解釈することは当らないのではないかと思う。

同じ外来語でもストライキをスト、ビルディングをビルと云つたように省略した語彙も多数に行

われている。その外に、外語や外来語と日本語の合成によつて句語の豊さ、内容の適正化を図つたものもかなり沢山ある。句の例示は省略するが、「クラス会」「ローカル線」「ガード下」「ヌード集」「ビル街」「ドル箱」「エロ雑誌」「豆スター」「終バス」「宣伝カー」「逆コース」「蒸タオル」の如きがそれである。その他原語をそのまま用いたり、「MSA」「PTA」「NHK」「KK」などのように外語の省略語をそのまま用いたものもある。これ等の実例を見ても川柳表現上外語や外来語が如何に自由に用いられているかが判るであらう。

多読多作

どうすれば川柳が巧くなるか。どうすれば川柳がホントに判るか。作句に対する質問はこれで尽きていると思う。形式のこと、音律のこと、表現技巧のこと、用語のこと、推敲のこと等々々、研究する項目は幾らでもあるが、一番大切なことは常に川柳から心を放さないことである。これを具的に云うと多読多作である。

第一に多読することであるが、それはどんな句でも手当り次第に読みさえすればいいと云う意味ではない。では、どんな句を多く読めばいいかと云えば、人生を凝視したオリジナル（独創的）な作品を目標に一句一句の内容を批判的に読むと同時にその句の表現技巧に眼をとめるのである。そこには

必ず新しい発見があるものである。句を批判的に読むと云うことは出鱈目に千句二千句を濫読するよりも遥かに効果的であることは贅言を要しないであらう。柳書、柳誌、箇人句集の中から自分で名吟だと思ふものや、先輩から名吟だと教えられたものを常に抜き書きして、一冊の句帳を作り、それ等の句を繰り返し精読味読するのである。句が巧く作れるようになるのも、川柳がホントに判るようになるのも、この方法より外にはないのである。尤も読むと云つても黙読よりは音読することである。音読すれば、句の音律を自得する便宜があり、句の音数のくぎり方もハッキリと判るようになり、それによつて句の味も充分に感じとることが出来るし、作句する時にもおのずと調子の整つた句が作れるようになるものである。

柳書、柳誌、箇人句集などの良否はなるべく先輩の指導に俟つがよいと思うが、身近かによい指導者のない場合には信用ある書店や発行所のものを選らむのが一番捷徑であらう。

前述の方法によつて多読されたならば、おのずから句の鑑賞力が出来る。そして次ぎ次ぎと名句の抜き書を殖やすことによつて多読の範圍を拡げて行けば、ホントの川柳とはどんなものであるかと云うことが段々判つて来るようになるのである。

次に多作のことであるが、多読によつて川柳とはどんなものであるかと云うことが少し判ればドシドシ作句をして見ることである。どんなにいい素質を持つていても、常に作句を続けていないと、表

理技巧がまわりくどくなつたり、リズムがマ伸びしたりして、秀れた句にはならない。しかし、無闇矢鱈に作つたからと云つて、名句が生れるに限つた訳ではなく、まして名作家になれるに決まつてはいないのである。

多く作ると云うことは作句の練習なのであるから、作つた句をよく検討して見ることである。

この句は自分の詩想が的確に描出されているかどうかと云うことを先ず審査して見る。その点はどうにか合格しているが、句に余韻がない、従つて川柳としての味が出ていないように思う。ではどうして味が出ないのかと云う点を吟味して見る必要がある。

これは句を構成する素材の選択を誤つていのではないだろうか、表現技巧が拙劣なためではなからうかと、あらゆる角度から、その作品に対してメスを当てて見るのである。

句としては面白く出来ている。リズムの点にも難はないが、はじめに自分の意図した詩想から脱出してゐると云う場合もある。どんな句であつてもいい、句にさえなつていれば満足だと云う訳にはいかぬ。それでは碁や将棋で勝ちさえすればいいと云つてのと大して違わない。碁や将棋のように勝負を争うものであつても、ただ勝ちさえすればいいと云うものではなからう。すくなくとも私はそう思つてゐる。その点、句は自分の詩想を描出するものであるから、自分の詩想から脱出した句となつたのでは全く意味のないものとなる。そうした場合には再考し三考して自分の詩想にピッタリ合致

するところまで推敲しなければならない。しかも満足するに足りるだけの句として纏らない場合には、その詩想を深く棄てることである。

しかし、初心者が作句練習として多作する場合、多くは題を課して作るものであるから、それ等の句にすべて独創的な味や匂いを出せと云うのはムリであろう。従つて所謂川柳らしい川柳が出来れば先ず先ずいいとしなければならぬ。しかし、これでいいのだと思つたら大きな間違いである。ホントの川柳は雑吟にあるのだし、その雑吟はあくまで独創的であること、個性を思ふ存分に生かした芸術的な作品であることである。

多作が一つの習性となつて、多数の駄作を作りつぱなしにすることは全く意味のないことであると前にも云つたが、そうした多作なら、むしろ慎重に寡作した方がいいことをつけ加えておきたい。

雑吟と課題吟

川柳を作るのに、雑吟と課題吟の二つの方法が行われている。雑吟と云うのは、折に触れ時に臨んで、その人の人生観、社会観、世界観と云つたものを詠むのである。その点から云つて川柳は雑吟だけ詠んでいればいい訳である。ところが作りはじめは題がないと、何を詠んでいいのかサッパリ見当がつかない。そこで「親」なら親と云う題を与える。そこで作家は「親」と云う焦点を目標に、過去、

現在、未来に於ける親を対照として詩想を喚起し作句するのである。そして作家の脳裡に表われるあらゆる親の影響を、捕捉するのである。ところが、それが一つの習性となつて、柳歴のそう浅くない作家でも課題がないとどうも作れないと云う人がある。かと思うと比較的初心者であるのに、殆んど雑吟ばかり作つている人もいる。しかし、そんな人は稀れにしかない。

新聞や雑誌では殆んど題を課して句を募集しているし、句会でも殆んど課題で作句している。それには次のような理由があるからである。

作家が課題によつて多作することは一つの作句練習である。それはバイオリニストの大家でも毎日ドレミハの練習をしているのに比すべきものであつて、課題吟の主たる目的は作句の練習にある。絶えず作句の練習することによつて、表現技巧の練磨をしていけば、イザ雑吟を作ろうとする場合に、表現上に渋滞を来たきないと云う可能性が多いからである。誌上又は句会などで、同一の課題の下にする作句は他の作家と類想の句を生む場合がかなり多い。その場合、その何れかが入選するか、共に没となるか、或は類想句でありながら共に入選することもあり得るとしたら、作家は云うまでもなく、一般の読者又は句会の出席者にとつて、その句の詩想と、これが表現技巧の違いについて親しく検討することの出来る便宜が与えられるのである。そのために課題吟は作家にとつて二義的な作品であるといながらも続けられているのである。では、どんな課題が課せられるかと云えば、その多くは

私達の生活からこれを選ぶことになるので、人によつては、殆んど変らない程に作家の個性の出た句に接することも稀れではない。自分の作句練習と同時に、個性のにじみ出た作品を得られることもあると云うことが、課題吟に対する一つの魅力であつて、課題吟をぜんぜん無視しない主因だと云えよう。中には雑吟と課題吟と作句態度を異にし、作風の全く違つた作品を作る作家もいるが、課題吟が作句練習の手段として作句する以上、自分の雑吟に近い詠法によつて作句するのが妥当な手法であると思う。

課題は森羅万象何んでも課するのであるから、俳句の季題などとは全く趣を異にしたものである。

初心者になるべく周辺の人事を課題とされる方が鳥獸草木や天象などを題として作句するよりも作り易いようである。課題はなるべく名詞を選ぶ方がいいと思う。動詞の題を出すこともあるが、初者はその句の中に、その文字をとり入れるだけに嚙心してよい句を得ることが難しいようである。仮りに「母」という題が出ても必ずしも課題の文字を入れて作らなくてもよいのである。

入門は周辺の写生から

川柳の入門は写生から——ということになつてゐるが、手当り次第に写生したからと云つてものになるものではない。では、どうしたらいいかと云えば、先ず最初は、自分にとつて尤も手近かなとこ

ろへ眼を向け、心に触れたものをさきに述べた五音・七音・五音の形式で写生することである。

自分にとつて尤も手近なものと云えば家庭ということになる。』

家庭には妻もいる。子どももいる。そこで妻や子どもの動きについて眼を向ける。妻が朝寝の自分を出勤に遅れぬように毎朝起すとすればそれも一つのテーマにはなる。日曜には父に動物園へ連れて行つてもらう約束をしたので、日曜の来るのを毎日待ちわびていると云うのも一つのテーマにはなる。しかし、こんなテーマは既に詠み陳るされているので、作者の句として発表する価値のない句にしかならないからと云つて、作らないといつまでたつても上達しない。どうせ入門早々から秀れた句が作れるものではないから、少々拙くとも、ドシドシ身近かな題材を促らえて十七音字にまとめて見ることである。

仮りに妻の動作や性格や心境から句をまとめたいと思えば、妻と洗濯、妻と炊事、妻と留守居、妻と市場、妻とミシン、妻とPTAの役員、妻と押売り、妻と貯金、妻と添乳、妻と内職、妻と銭湯、妻と旅行と云つたように、妻の身边から、自分の心に尤も強く感興の湧くものを写生して見るのである。子どもを主題にしても矢張り同じことである。自分の眼に触れ、心を強く打つものであれば、何んでもいいから一句に纏めて見ることである。そうすればいつのほどにか、見たものの感じたものを句にまとめるという習性が出来て来る。はじめは十七音字にまとめるだけでも容易ではないが、いい悪

いは別として、ドシドシ作つていると、十七音字にまとめると云うことは、そんなにむずかしいことではないことになる。

出来た句はノートしておいて、誰か先輩に見てもらつて、それらの句の良否を聴かしてもらえばいい。しかし、あたりに先輩がいない場合にはどうしたらいいかと云えば、新聞の柳壇や、柳誌などに投句して抜けるか、抜けないかを試めて見る。折よく身辺句を募集していれば好都合であるし、自分の作つた句が募集している題に、当てはまらない時には雑詠の募集欄へ投句すればいい。少しずつ抜け出すと、作句にはげみが出て来るものである。そのうちに句会へ出て見るのも上達法の一つである。句会では同じ課題でみんな作句するので、自分の考えたことを自分が句にまとめて出出したよりも、もつと巧くまとめる人がいたりするので、非常に参考になるものである。そこには自分よりも先輩が沢山いるので、没になつた句についての意見を聴かしてもらつて便宜もあるし、柳友も出来て、次の句会が待ち遠しい思いをするようになるものである。

ここで川柳人は妻をどんなに詠んでいるかを例示して見よう。

通俗に妻は育てゝゆきたがり

美 笑

妻に見れば何も東京まで勉強にやらないでもいい。偉くなつてくれれば兎も角、悪友に誘われて、

とり返えしのつかぬ子になつてくれば大変なのである。それよりは世間並みに育つてくれさえすればそれに越したことはないと言ふ妻の心境を詠んだのである。

こどもを詠んだ句では

パンの耳好きなのも居る子沢山

春 巢

というのがあつたが、これでよいのである。

子の部屋を易々諾々と追ひ出され

猫 三

この句は「勉強の邪魔になるから出て頂戴ッ」という子どもの要求に、「ア、よしよし」と追ひ出されるのをむしろ愉快に感じている父性愛が強く出ている。しかも子どもの言動がハッキリと句のウラにうかがえるではないか。ここまで巧く詠めるようになるには、相当の年季を必要とするのである。

しかし、身辺句は、ありのままを詠むので表現上に多少の拙劣さはあつても、実感が出て思ひ佳吟を生む場合がある。

次に身辺雑詠の秀句を例示し簡単に解説して身辺句を作る人達の参考に資することとする。

幸福のお膳は欠けていてもよし

琴 人

たまさかの紙幣だなめて数えよう

民 郎

洗濯をするのよめだかのいて呉れ

茶 々

親子とはいいなネズミの親子でも

庸 司

御近所の子にアバババをして通り

利 里

雙手手帳

空つばの袖よその子がまたのぞき

大 八

満場の拍手われ異端者に非ざりき

同

もろ腕で抱いて欲しかる妻もまた

同

「幸福のお膳は」の作者は老夫婦で印刷を業としていたが戦禍で焼けて二階借をしていた。間もなく愛妻を亡くし、一二年後には自分も亡くなつた。客観的には幸福な人生でなかつたかも知れぬが、私の知る限りではこの句に示すような生き方をしていた。夫婦ともよい句を残している。

「たまさかの」の作者も同じく印刷を業としているが、今でも地方で盛んに営業を続けている。この句は余程以前の作らしい。この作家としては珍しい句である。

「洗濯をするのよ」の作者は女性らしい心のあたたかさのよく出た句である。

「親子とは」の作者は闘病生活十年、遂に起たなかつたが、常に郷里九州の母を慕っていたことを思うと、病院生活中の作であろう。作者自身が親一人子一人だっただけに、しみじみとしたものを感じさせられる。

「御近所の子に」の作者は忙しい都会生活はしていても、女性だけに「ホントに可愛いお子さんですネアバババ」とおあいそを云つてその家の前を通つたのである。

「空つぽの袖」の作者は北支の戦争で片腕をなくしたのである。いつも片袖がぶらりと垂れ下つていたので、よその子が不思議そうな顔をして又しても覗くのである。その度に作者の心はうずくのである。シーンと身うちの寒くなる句である。

「満場の拍手」の句も同じ作者の句である。拍手したくも、片腕では拍手の仕ようもないのである。自分だけが拍手をしないが異端者ではなかつたのだという悲痛な叫びの句である。

「もろ腕で」の句も同じ作者の句である。よその妻のように、タッタ一度でもよいから、もろ腕で抱きしめて欲しかる、しかし、しかしと云う作者の哀切の情は骨を刺す思いがする。身辺句としてこれ以上のものはなからう。

社用族だから僕でも羽田着

喪服着たままで映画を見て帰り

雑巾はひからび主婦は今日も留守

小康は柱時計を巻いても見

留守と思わせちやならんぞと旅へ出る

一生に光つた靴もようはかず

もう一ト間欲しい欲しいで年が過ぎ

餅がとろけますと亭主ひつpegれ

たまさかに夫婦で行くが葬儀なり

俸からお古を貰う年になり

やればすぐ返えすお人に肩が凝り

行く先のある川水のうらやまし

挨拶の物をもらつた声となり

静かなる日なり墨でもすりましよか

夫人夫人と云われ個性のないくらし

多久志

潮花

千容

川鳥

幽王

貴山

春巢

喜由

牛耕

花村

貴志子

齊花

栗

潮花

葭乃

まあ上れ上れと病人だけが云い

縁あつて来たビヤ樽に似た女中

貧しさは時に罪なき子を叱り

妻の智慧昨日あたりの家庭欄

同窓会貴様々々で更けてゆき

税務署を交えぬ酒のうまいこと

ふところ手してれば家を尋ねられ

ポーナスを畳が屋根が待つて居り

君はピースか一本呉れ給え

叱言だけ言う椅子午後は何時も留守

行水に面白い子のへそ父のへそ

それ丈の知能か銀の腕輪はめ

のんびりとしているようで金を貯め

月賦でも結構ですと寸をとり

出し合つて母をいたわる案が出来

水客

一瓢

鉢朗

昭象

香林

野介

紫香

文月

淡舟

井蛙

愛論

春雄

迷窓

良坊

侃流洞

▽ 學歷は人に聞かれて笑うだけ

終業のサイレンはつきり目が覚めた

女なりけりその日のうちに職につき

日曜の客朝めしを切り刻み

若いもんに聞いてくれとは旨く逃げ

悪書すら読んでくれない子に困り

招待の旅から戻りマッサージ

避妊薬ニコリともせず売つてくれ

ヤァーと来る人へはシャツのままで会い

写生句は斯うして

はじめは手近なところから写生すればいいのである。写生句だからと云つて、わざわざ遠方へ吟行するには及ばない。若し会社勤めてゐる人だつたら、会社で眼に触れ心に感じたことをそのまま十七音字に纏めさえすればいいのである。

そこで、川柳に趣味を持ち、一つ作つて見ようと云うサラリーマンが、会社へ出勤したと仮定する。

季 贊

方 大

谷 水

清 潮

春 日

一 三 夫

玲 人

東 岸 子

ま ゆ み

ドアを排して、自分の部屋に入ると既に出勤している同僚や女事務員や給仕の姿が眼に触れる。みなセッセと働いている。少し遅刻したようだ。しまった、もう少し早く来ればよかった。いつも自分がしんがりだと思つた。これも妻が朝の食事をするのにスローモーションだからだと思つたとする。そこでそうした気持ちを句にまとめて見る。

遅刻したことを女房のせいにする

これでいいのかも知れないが、女房と云う言葉は何んだか陳い感じがして自分の妻にはふさわしくないような気がする。そこで、

遅刻したことを妻のせいにする

として見た。前の句よりは自分の生活に近い気がするが、あまり巧い句のようには思えない。繰り返して読んで見ると一寸調子が悪いようだ。そこで、

遅刻したことをワイフのせいにする

と、妻をワイフに変えて見た。これでどうやら調子がよくなつたようだ。しかしまだまだピンと来な

いので、あとで先輩に見てもらつて忌憚のない意見を聴かしてもらつたら、一言にして云えば想が陳いのだそうだ。だから、女房を妻やワイフに変えたぐらいでは救えないのだと云うことであつた。しかし、はじめとしては兎に角纏まつているし、女房も妻もワイフも既婚した女の話には違ひないが、ニュアンスが違うので、自分たちの生活にふさわしくないと云つて取り変えたのはいい心がけである。いい句を作ろうと思えば、はじめからその位の心がけはあつて欲しいとのことであつた。

それから少しく慌てて出勤簿にハンコを押して、自分の席に腰をおろした。そこへ課長が出勤して来た。課長は遅刻したような顔もしていない。来るなり、給仕を呼んで、B君を呼んで来いと命じた。B君が来ると、君、アレは一体どうしたんだい。あれほど云つてあつたのに、困るじゃアないかと叱り飛ばしておいて、サッサと社長室の方へ消えて行つた。

課長がいらないのを幸いに、もう少し作つて見ようと思つた。遅刻した腹いせでもないが、遅刻の句を作ることにした。

- (1) 遅刻して少し慌てる出勤簿
- (2) 遅刻して逆さに押した出勤簿
- (3) 遅刻しても素知らぬ顔の課長なり

(4) 遅刻しても課長と平と斯う違い

自分では一寸面白く出来たと思つた。コレもあとで先輩に見てもらつたら、君ははじめてにしては巧いよと、褒めてくれた。

(1)の句は「少し慌てる」で平社員の小心翼翼とした態度が出ていて面白いとは思ふが、(2)の句の方がそれよりも少しいいと思う。「逆さに押した」で、慌ててるさまが説明しなくても判るだろう。それに「逆さに押した」だけでは、何を逆さに押したのか判らぬと君たちは思うだろうが、ハンコを逆さに押したと云うことはこの句の場合には充分判るのである。斯う云う表現で句を生かすのを川柳では省略と云つて尊重されるのだ。僅に十七音字では何も彼も思つたことをみな並べることは不可能なのだ。不可能だと云うだけでなく、思つたことを、何も彼も皆並べては句に味というものが無くなるのだ。みんな並べないで、並べた以上に読む人に想像力を働かせるようにしなければ、いい句だとは云えないのだ。そのためには、今のよう逆さに押しただけでハンコであることが判るような省略の仕方をする必要がある。しかし、下手に省略すると自分以外の人にはサッパリ意味のとれない句になつてしまうから、そこがむずかしいのだ。しかし、君ははじめてとしてはその点巧く省略しているよ、折角勉強すれば、そのうちにいい作家になれるよと水をむけられた。

(3)の句は自分の遅刻を詠んだ句でなく、課長の遅刻を観たままに詠んだ句であるが、これだけでは句に味がない。こんなのを、川柳では報告川柳だとか、そうすか川柳だとか称して、すぐ没にしてみよう。その句を読んで、そうすかと云うとおしまいで、魅力を少しも感じないからである。しかし、(4)の句は(3)の句よりはよく出来ていると思う。「課長と平と斯う違い」と云つたところで、どう違うのだと云えぬこともないが「遅刻しても」と云う上六音字があるので充分想像がつくのである。平(ひら)だけでは平社員であることが判らぬ時もあるが、この句の場合には平だけで充分に判るのである。つまり川柳ではいたるところで省略が行われるのである。

それでは

叱るだけ叱つて課長消えて行く

は、どんなものであろうかと意見を訊いて見たら、割りに綺麗には詠んでいるが、凡想だな、誰でも思いつくような句は、少々表現がきれいに詠まれていても入選は覚束ないと思わねばならない。君はB君が叱られているのを見ると、課長が社長室の方へ消えて行つたのを見ていたので、同情やら面憎さや、今度は課長が社長に叱られている声や顔が想像出来るので、とても巧く詠めたと思うかも知れないが、第三者にはそんなものを一々感じるほどに表現されていない句なのだ。ただ課長が、ガンガ

ン叱つておいてサッサと何ッかへ行つてしまつただけしか感じられないのだ。だから誰でも作るようなこんな句は陳いとして捨てられるのだ。

今度は一つ社長のことを作つて見ようと思つた。社長のことなら、幾つか作れそうな気がする。それは何時でも、威張つていられる訳でもないのに威圧を感じているし、タッタ一日でも社長の椅子に掛けられたらと云う羨望の的でもあるしするから、キツトいい句が作れるだろうと思つたのである。

- (1) 社長室今日もゴルフに行つたらし
- (2) 社長室女客にはあいそよく
- (3) 電話だけ掛けに来たよな社長さん
- (4) 若社長野球となると出て来ない
- (5) 老社長株が下つた時だけ来

社長だつて遊んでばかりいる訳ではないが、(1)のような句が出来た。社長室をノックしたが返事になかつたのでこんな句が出来た訳である。これに対して先輩の意見はあんまり芳ばしくなかつた。

そうだね、まあ、川柳として一応は出来ているが、「行つたらし」が句意を弱くしているね。もつと強く云い切る方がいいだろう。まア、再考して見るんだなア。

(2)の句は(1)の句より、もつといけない。「女客にはあいそよく」は単に説明に終つてゐるからだ。句は説明をしただけではダメだ。説明でなく描写しなければ句は生きて来ないものだ。その点(3)の句になると少しは救われるようだ。平社員の眼にはそう映らうが、決して電話だけかけに來た社長ではないからである。しかし、すぐれた句だとは云えない。

何もかも専務に委せ清交社

万 楽

と云う句があるが、この句をよく味つて見る必要があると思う。清交社と云うのは会社の社長などが顔出しをする社交クラブの名である。社長と云う文字はないが社長を詠んだ句だ。

(4)の句も単に説明に終つた句だ。作者の意図するところが充分に出ていない句であろうと思う。これは野球の句ではないが、若社長を詠んだ句に次のようながある。

若社長又先代と比較され

治 雄

別に想の新らしいと云う句ではないが、ズバリと穿つた点がこの句のいのちだと思う。先代と比較するのはムリであるが、又しても比較して見るのが人情である。そこを捉らえたのである。

(5)の「老社長」の句は巧いよ。これはこれまでの句の中で一番すぐれている。一読して陳い句のよう

で、誰もこんな句は詠んでいない。陳いように見えるのは、句が整いすぎていると云つても云い位に整っているからである。老社長と云うものを、しつかりと擲んでいる。穿ち味の句もこれ位に出来れば卒業だと云つてもいいだろう。前にも云つたように写生々々と云つても、ただ観たままを写すのでは写真の方がいいだろう。川柳として報告川柳や、そうですか川柳を作るんだつたら、やめた方がいい。と云つて、あまりにも誇張した虚偽感の盛り上つた句も、ピンと来ないものである。何れにしても川柳には、穿ち味があるが、ユーモア味があるか、川柳らしい情味が伴わない限りは、幾ら写生句だと云つたところで価値が無いであろう。要は句主の川柳眼を研ぎますことと、表現技巧の練磨にあると云えるが、この言葉は川柳の全般についても云えることである。

次に写生句の参考資料を例示しておく。

— 写 生 句 —

我が影を轢いてゴウ／＼貨車去りぬ

野 介

首巻をとる真似だけの家主なり

栗

辛じて一人坐れる煙草店

佳 山

無縁仏に妓はちよっと手を合わせ

谷 水

掛取は肱まで入れてつりを呉れ

近眼子

兎が追えば鳩は歩いて逃げるなり

豆秋

さんらんとして花嫁は首を垂れ

三太郎

ちよぼちよぼちよぼちよぼと咲く女郎花

葎乃

たまさかに夫婦で行くのが葬儀なり

牛耕

長襦袢女は風邪をひかぬもの

艸藥

果物屋百匁売つても並べかえ

一瓢

双眼鏡の中とも知らぬふざけよう

井蛙

満ち足りた顔かな孫と戯れる

淡舟

呉服店ごまかす様に尺早し

摩天郎

通勤は須磨も明石も読みふけり

春巢

シグナルは青だそれ行け子沢山

一瓢

挨拶の物をもらつた声となり

栞

エスサマ、エスサマと書いてひとりぼちな少女

耕一路

私だつて働いてるわと坐りかえ

茶々

お早うと色街午後を起きてくる

おさらいの三味へワンピースで坐り

けなげなり猫猫なりの身だしなみ

十 悟
春 巢
一 瓢

穿ち味の句

川柳の味は主として穿ちにあるので、どんな句でも、大なり小なり穿ち味を持たない句は稀れである。と云つたところで、初学者にとつて「穿ち」又は「穿ち味」の意味がハッキリ飲みこめていない限り、川柳のホントの味を知ることが不可能であろう。そこで「穿ち」という語彙の持つ意味を少しく解説することしよう。

従来、川柳と云うものは世態人情の機微を穿つものだと云われていた。ところが、この穿つと云う語彙から、川柳の三要素の一つに数えられていた「穿ち」と云う名詞が生じた。大体「穿ち」の本来の意味は穿鑿すること（ことばの泉）と云う名詞なのであるが、それとは別個の意味を持つ川柳語彙の穿ちと云う名詞が生じたのである。英語にインサイト (Insight) と云う語があるが、この語の持つ意味の方が、川柳の穿ちの意味に近いと云えよう。穿つと云う語を単に穿鑿すると解するところから、理窟ッばいとか非詩的であるとかの非難も出るのであるが、川柳の穿ちと云う語には穿鑿すると

か、はじくるとか云う意味はないのである。英語のインサイトと云う語は「内を見、奥を見、本質を見る」と云う意味であるから、「川柳は世態人情の機微の内を見、奥を見、本質を見る」と解することが出来るであろう。又このインサイトと云う語は「看破する、洞察する」と云う意味を持つてゐるので「川柳は世態人情の機微を看破するもの、洞察するもの」と解することも出来るのである。又川柳を評して寸鉄殺人的の詩であるとか、人の肺腑を衝く詩であるとか云われるのも、所謂穿ちの持つ迫真力を指しているものだと思ふことが出来るであろう。つまり穿ちはにぎりの山葵の役目を果しているのである。そしてこの山葵の味を多分に持つてゐる句を穿ち味の句と称するのである。

次に現代作家の穿ち味の句を列挙し、簡単な解説をなし、穿ち味の句とはどんなものかを知つていただくことにする。

姑の不幸は耳がまだ聞こえ

横車押す氣定刻通り来る

家族並みにされて女中の差出口

録音は家族のすすり泣きも入れ

女アナウンサー姑みたいないなことを云う

満 潮

不 二

睦 子

一 恒

幽 王

いい気味だとは妾宅が小火を出し

これしきの鳥居へ母は手をかざし

指させば拭いてから出す骨董屋

怪談は不入りの方が凄く見え

素人の刺身半分手で並べ

バフたたく時間も入れて八時間

病人に彼岸彼岸とたのしませ

半 絃

角 嵐

吐二也

花 村

千 舟

薫 翠

武 子

「姑の不幸は」の句を一読すると、ピンと胸にくるものがあるに違いない。そのピンとくるものが穿ちであり、その穿ちによつて句としての妙味が感じられるので、斯うした味を持つ句をすべて穿ち味の句と呼んでいる。

嫁と姑との新旧思想の衝突は今も昔も変わらない。そこに幾多の悲劇が生れることも、今も昔も変わらない。すべてを経験から割出す姑、すべてを今の思想に立脚する嫁、何かにつけてうまく折り合わない。いつそ耳が遠くて、何ごとも姑の耳に這入らねばそれまでであるが、「不幸は耳がまだ聞こえ」なのである。生きてゆくと云うことはむずかしいことである。姑ならずともピンとくるに違いない。

「横車」の句を読むと、いかにもその通りだと誰もが膝をたたくに違いない。そこが穿ち味である。定刻通りにやつて来る一ト癖あり気な顔が眼に浮んで来るではないか。

「家族並みに」の句は家庭川柳として面白い。よく働くのでその家にとつて無くてはならぬ存在として家族並みに扱うと、大抵の女中がいつのほどにか女中であることを忘れて差出口をするものである。そこに穿ち味がある。

「録音は」の句は放送局が遺家族訪問などに出かけた場面を詠んだのであろう。アナウンサーの質問、遺家族の応答以外に、その場の情景を力強く聴取者に聴かせるため、必ず家族のすすり泣きまで録音に入れる。そこに穿ち味があるのである。

「女アナウンサー」の句を読むと、そう云えば、いかにもそうだなアとうなずかれる。

急にお寒くなりましたから、寝冷えをなさいませぬようにとか、颱風のシーズンになりましたから、お休みになる前には必ず火の要心をお忘れにならないように、油断は大敵でございませうとか、女アナウンサーと云うものは、常に云わでものをくどくどと並べ立てるものである。ハハア薬屋の宣伝放送だな、と思つてみると、ベトーベンの交響曲の時間だつたりするので呆ッ氣にとられるのである。そこを掴んだのがこの句で、「姑みたいなことを云う」には単に穿ち味だけでなく、皮肉味もある。「いい気味だ」の句は、今日はデパート、明日は温泉と贅沢三昧に暮らしていても、近所づきあいは

至つてわるいので周囲からは常に反感をもたれている妾宅が小火を出したのを詠んだ句であるが、その反感、その憎しみが、期せずして「いい気味だ」となつたので、そこに穿ち味があるのである。

「これしきの」の句は、世の母と云うものが、朝から晩まで家と云うものに縛ばられていていつのほどにか時代からとりのこされ、世間と云うものを少しも知らない。たまたま旅に連れられて、ホンの一寸した鳥居にも驚いて、手をかざして見ると云うところに共通性がある。そうした共通性こそ、この句の穿ち味なのである。

「指させば」の句は街の写生句であるが、骨董屋と云うものを普遍的に観て、その中から特異性を擷み出したのである。即ち「拭いてから出す」がこの句に穿ち味を生じたのである。

「怪談は」の句は演劇を詠んだ句である。一体怪談と云うものは不気味なものである。そして不入りと云うものも広い場内がシーンとして不気味なものである。ところが、その芝居が、不入りだつたので、不気味にシンニューをかけて怪談劇が一層物凄く見えたと云うのである。そこに穿ち味がある。

「素人の」の句は素人料理の生んだ特異な共通性に穿ち味を感じたのである。料理人なら刺身は庖丁一つの腕であるが、素人はそれが出来ない。刺身の半分は料理人がするように庖丁に載せて皿に盛つたが、巧くかつこうがつかないので、あとの半分は手で並べたと云うのである。素人に共通した、そうした弱点を見逃さなかつたところに穿ちの面白さがある。

「パフたたく」の句は、女事務員の退出時の風景を詠んだものである。八時間制勤務であるのに、退出時間の二十分前になるとそろ／＼机の上を片づけはじめる。そしてトイレットへ行く。机に戻るとハンドバックから小さな鏡を出してパフをはたく。そこへ退出のベルが鳴り響く。サーッと潮が引くように退出してビルを階段を転がるように降りて行く。八時間制をやかましく云うくせに、勤務時間が終つてからパフをはたかない矛盾を衝いたところに、この句の穿ちがある。

「病人に」の句は、どうせもう助らないと覚悟をしている病人に「そんな気の弱いことでどうするんです。もう少し辛抱すればお彼岸ですからね。暖かくなればきつとよくなりますよ」と、慰めているのである。看護するものにとつて、それ以上の慰めの言葉もないのである。彼岸彼岸の語がこの句のいのちである。

次に穿ち味の参考句を例示しておく。

——穿ち味の句——

背任へずるずる嵌めた美しさ

一 瓢

警察の手帖俳句も書いてあり

牛 耕

飲まされて味方売つて帰つて来

没 食 子

おめくゝと来るを資本家知つてゐる

榮転に酒屋名残りを惜むなり

十二月遺憾ながらと返事が来

目にも物を見せんとすれど金がいり

妻の智慧さのうあたりの家庭欄

さのさ節一つ唄えぬ立志伝

スリッパで来て借りて置く氷代

凹んでる硯が今日も儲けてた

婿にする野心誕生日に招き

貧しさは時に罪なき子を叱り

こそばゆいラジオへ姑寝てしまい

横車 8 対 1 をくつがえし

可笑味の句

愚 陀

京 二

花 村

路 生

昭 象

一 瓢

大 門

民 郎

一 善

鉢 朗

美 秋

日 満

句を一読した時、思わず知らず微笑を洩らしたり、声を立てて笑つたり、苦笑を催したりする句の

ことを可笑味（おかしみ）の句と称している。可笑味は川柳の三要素の一つに数えられたほど、従来の川柳には多分に滑稽味を含んでいたが、近来では余程その量が減つてゐる。滑稽というものが生活を朗らかにする意味から云えば、可笑味はもつともつと尊重されていいのではないかと思うが、それが以前よりも減少する傾向にあると云うことは川柳の作家にとつて大いに考えなければならぬ問題ではなからうか。

お互の日常生活には息苦しいことが多い。詰り心にゆとりがなくなり勝ちである。従つて笑いたくも笑えないと云うのが現実である。可笑味の句が減少した主因ではないかと思うが、川柳を作ると云う事が既に生活のゆとりだとすれば、生活を朗らかにする可笑味の句をもつと重視して、この方面の作品に力を入れる必要があると思う。しかし、世相を如実に反映する川柳であるから、笑えない世相に可笑味の句を作れと云うことはムリだという人達があるかも知れないが、私はそうは思わない。同じ事象に對してことごとくに暗い観方をしようとする作家と少しでも明るい観方をしようとする作家との句を対照して見ると、前者には笑いがなく、後者には笑いのあることを知ることが出来るからである。水堂の句に、

父ちゃんが叱られたのをふれあるき

と云うのがある。この句を一読した時、子どもの無邪気さの陰には、父の暗い生活がある筈であるが、この句からそうした暗さは感じられないではないか。むしろ、子どもにとつては、よいパパであり、その妻にとつては柔順な夫であることを思わされるのである。この父ちゃんを意気地なしとして見るよりも、子にも妻にも寛容な父であり、夫であるとしたら、父ちゃん自身にとつては幸福な人生だと云えるかも知れない。子どものふれあるくのを叱る前に、オレは意気地がないな、ウッフと笑っているということは一つの悟りでもある。川柳は人間を作る。この父ちゃん、この句の中の笑いに生きお世話とすれば、可笑味の句の持つ力は非常に大きいと云わなければならない。川柳は人間を作るというのはこの意味で正しい。

可笑味というものは、それ自体が可笑しいのではなく、形の上の類似から可笑味を感じることもあるれば、言葉の上から来る可笑味もあるし、挙動から生ずる可笑味もあるのである。

次に現代作家の可笑味の句を挙げ、その一句一句から作者はどんな点に可笑味を感じているかを検討して見よう。

夏期講座みな居眠りに来てるよう

没食子

不渡りを透かしてみても始まらず

水客

雷の予報を秘書はしてくれず

税吏来て猫にさかなを食われたり

牛肉屋のおつさん理事の名刺くれ

蠅とまつたと言えずお菓子を頂いた

速よいか消えてしもうと火事見舞

腹の立つことまで書けぬ告知板

ほめて居てちつとも喰べて呉れぬなり

千 容

摩天郎

梨

梨 里

豆 秋

柳 秀

雅 幽

まだまだ幾らでもあるがこれ位にしておく。

「夏期講座」の句を読んだ時には誰でも思わず微笑を漏らすに違いない。コクリコクリといい心持ちで居眠っている姿を思い浮べるからである。誰も彼も一トかど勉強する積りで夏期講座に来ているのである。それが申し合せたように居眠っているのである。勉強とは凡そ反対の行動に思わず可笑味を感じたのである。

「不渡りを」の句は、不渡りになつた手形を今更透かして見たところが、どうにもならないことは百も承知しているながらそれを透かして見ているのである。しかもその人自身はそれをクソ真面目に透か

して眺めているのである。その人自身にとつては可笑しくも何んともないだけに、それだけに冷静な第三者にとつては可笑しさがコミあげて来るのである。

「雷の」の句は雷の予報と云う言葉から来る可笑味である。雷というのはガラガラとよく小言を落す社長の代名詞であつて、今日は御機嫌が悪いから氣をつけ給えと、秘書が予報をしてくれればいいのに、秘書はなかなかそれをしてくれない。ガラガラと雷が落ちるとニヤニヤ笑つていと云うのである。人物や情景がよく出ていてなかなか面白い句である。

「税吏来て」の句は、税吏と云うものが如何にうるさい存在であるかがうかがえて、思わず苦笑させられる句である。税吏との応接ぐらい氣の弱い人間の心を脅かすものはない。イヤ少々氣の強い男でも、早速飛んで出て、ペコペコとお辞儀の一つも余計にしたくなるのである。猫がさかなを食う位の隙は幾らでもあると云えよう。自分にも覚えのある人達にとつては自分のぶざまな姿を見せつけられたような氣がして痛くもあり、可笑しくもなる句である。

「牛肉屋の」の句は、おつさんと呼ばれる階級の人間なのに、牛肉同業組合理事と云つたような四角張つた名刺を呉れたので可笑味を感じたのである。これは思いも寄らぬ二つのものの連想から来る可笑味なのである。

「蠅とまつたと」の句は、まァ召しあがつて下さい。主人の長崎土産ですからと云われても、さつき

蠅がとまつたのを知っているので少々ためらっていると、甘いものはお嫌らいですかと追いかけて来る。イイエ好きなんですけど、ではどうぞ、遠慮なんかなさらないでと云われると、絶対絶命である。とうとう蠅のとまつたお菓子をいただいたと云うのである。これも微笑を禁ずることの出来ない句である。

「速よいかな」の句は、消えたらよろこばねばならぬ火事を早く行かねば消えてしまふと云うところに、可笑味があるのである。それが火事見舞だけに、そうした矛盾した考え方が、当然なことのようにクソ真面目に云っているのがおかしいのである。はいいかなは大阪の方言で、早く行かねばの意である。この句にこの方言は軽いユーモア味さえ感じさせられる。

「腹の立つことまで」の句は待ち呆けを食つた人の行動から生じる可笑味である。いくら立腹していても、告知板へそれを書くわけにいかないのです、先に行くK位が落ちだからである。イライラした顔が見えるようである。

「はめて居て」の句は、コレは台湾のからすみだね、今時なかなか手に入らないものだが、お宅などは御交際が広いから、こんな結構なものが、それにこの大きさのものは減多にありませんからねと頻りに褒めるが、とんと喰べようとはしないのである。こんな客に限つて、一歩外へ出ると、あいつのうちへ行つたら、からすみを自慢そうに出したが、今時からすみなんか珍重する気が知れないと云う

のである。それなのに、褒められていい気になつてゐる人の好きに可笑味が感じられるのである。

要するに、可笑味の句はそのものに対する連想がかけ離れてゐるほど可笑味のデグリーが大きいようである。しかし、真の可笑味はムリに笑わせる滑稽ではなく、不用意のうちに笑を催すものでなければならぬ。時には涙ぐましさを伴う可笑味のあることは古句の

鶏があくびをしたと豊云い

がよい例である。

皮肉味の句

皮肉味の句は、対象について、正面から素直に観ようとししないで、ウラから見て揶揄したり諷刺したりする辛辣さがある。従つて穿ち味を多分に含んでゐるので穿ち味の中に入れてもいいのであるが、少しく特異性があるので別に扱うこととした。

次に皮肉味の句を例示し、その一句一句の皮肉を探つて見よう。

胃が悪くないかとラジオに尋ねられ

花村

親に似た所を親に叱られる

まだ酒の欲しい所へ寿司を出し

ふんぜんと席を蹴つたがだれも止めない

結婚の保険満期になつたけど

金貸の殺されもせず十二月

ようきいときやと妹ついでに叱られる

生命みじかし千円位で殺された

泥臭い河で恋の灯ボートの灯

御苦労さん御苦労さんと使われて

命まで賭けた女でこれかいな

神様でないからと云う言いのがれ

弔文に主義変節の事はなし

まだ幾らでもあるがこれ位にしておく。

「胃が悪くないかと」の句はスキッチをひねる途端に、胃が悪くないか、肩が凝りはしないか、頭が

曉 童

富 至

幽 王

千 容

満 潮

栞

妄 夢

梨 里

夏 六

梅 里

没 食子

聴 松

痛みはしないか、仕事に疲れはしないかという声がいろいろと流れて来るのを胃が悪くないかで代表させたのである。美しい女の声で尋ねられるのは満更でもないが、いくら僕が胃が悪くてもそれがラジオではねえとニヤリとしたのである。皮肉な観方である。

「親に似た所を」の句は親が酒を飲むから飲む、親があぐらを掻くから掻くのに、酒ばかり飲んでいたらロクな者にはならないぞ、あぐらを掻くのは行儀が悪いと叱られる。そうした矛盾を皮肉つたのである。

「まだ酒の欲しい」の句は、Bさんは酒癖が悪いから早くお寿司におしよとサッサと寿司を出したのを促した句で、作者の皮肉な観方によつて生れた句である。

「ふんぜん」との句は、憤然として立つと誰かが、まァまァと止めて呉れると思つたのであろうが、予想に反して誰も留めない。そこに皮肉味を感じたのである。誰も留めないで、いささか拍子ぬけがしてひよろひよると出て行く姿が眼に浮ぶ句である。

「結婚の」の句は、幾つになつたら結婚をする、結婚するには費用が大変だ。それにそなえて結婚適齢期が満期になるように、結婚保険をつけた。ところで保険の方は満期になつたけど相手が見つからない。費用だけで結婚が出来るものでないことをハッキリと知らされたのである。満期になつたけど、のけどの表現に皮肉味を感じさせられる。

「金貸の」の句は誰もが十二月には金のために苦しむ。そして金貸の矢のような催促にいのちを縮められる。いつそ金貸を殺ろしてしまつたら、金貸に攻められる苦しみが助かるだろうと云う共通的心理が動く。だのに、あんな冷血動物が殺されもせずにいると云うところに皮肉を感じたのである。

「ようきいとさやと」の句は姉嬢が男に欺されて家出をしたが男に捨てられて戻つて来て叱られているのか、事件の内容は判らないが、叱られているのである。その傍らにいた妹嬢に小言の飛ばちちりが行つたのを、よくある例だけに皮肉に感じたのである。「ついでに」とは巧みな表現である。

「生命みじかし」の句は、いのち短かし恋せよ乙女と云う唄の引用句であらう。それほど尊い生命だのに、僅か千円位の金を盗られまいとしてのちを落したというところに皮肉を感じたのである。

「泥臭い河で」の句は華やかな恋の灯、ボートの灯で、泥臭い河の泥臭ささも感じないし、眼にも映らないところに皮肉味を感じたのである。赤い灯青い灯の道頓川を思わされる句である。

「御苦労さん」の句は使用者の口先のうまさとは知つていても、それについて行かねばならぬ労働者の立場に皮肉味を感じたのである。使われている者の淋しい心境もよく出ている。

「命まで」の句は、あんなに大騒ぎしたのであるから、よほどの美人だろうと思つたら、なんだこんな女か莫迦々々と云つたところに皮肉がにじみ出ている。「これかいな」の下五の表現で、軽くい

なしたところが面白い。

「神様でないから」の句は訊きただされてセツパ詰まつたので、突拍子もない神様を引き合に出したのを皮肉に感じたのである。

「弔文に」の句は明日はあちらの岸で咲くという、変節漢の代議士などが死亡した時、その葬儀に列した人たちの弔文には主義変節のことには少しも触れていなかったというのである。実に皮肉でしかも手痛い観察である。

眞実味の句

先輩からホントの句を詠めと云われたのでホントの句を詠んだところが没になつたと云う作家がある。作家の云うホントとは事実のことであり、先輩の云うホントとは眞実の意味である。それが事実であろうとも、事実をそのまま詠みさえすれば句になると云う訳ではない。人情のこまやかさに眞善美の眞を生かせと云うのである。くだけていえば人間味を出せと云うのである。事実の上に組み建てられた人情味の句を作れと云う意味に外ならないのである。

例えば古句に

よく寝れば寝るとてのぞく枕蚊帳

と云うのがある。親として子を愛さないものはないがこの句などを讀むと、親の慈愛の深さが、身にしみて感じられるであろう。親が我が子を愛するのは心太押しであるから、別に感謝する必要がないなどと空嘯いてはいられない句ではないか。こんな句を真実味の句と云うのである。矢張り古句だが

親の闇ただ友達が友達が

と云うのもある。子どもが少し大きくなつても親の心は変わらないことをこの句が証明している。

現代作家の句にもこれに負けないのが幾らでもある。

うちの子に限つてという顔になり

飯 山

うちの子に限つて、決して盗みなどはいたしませんと云い切つて呉れるのは親しかいないのである。どんな証処を突きつけられても、それは何かの真違ひでしようと直ちに応酬するのが親である。「うちの子に限つて」という強い言葉は真実味の表われでなくてなんであろうか。川柳は従来滑稽なものだと云われていたが、前句にしても、この句にしても少しの滑稽味も含まれていない。むしろ、

そこには強靱な穿ち味の存在することを知るであらう。

肩車半分だけの目で歩き

一 声

と云うのもある。ついそこへ出かけるにも肩車をする。子どもは用捨なく父の額を両の手で持つ。その片方の手で片方の眼をふさいでも平気である。父はそれすらに喜びを感じて、片方の眼をふさがれたままで歩いて行くのである。愛情の奔流を感じる句である。お父さんは甘いねえと背後から浴びせる妻の声にさえ歎びを感じるのである。

段々と子どもは大きくなる。いつまでも子どもだと思つていると、いつのほどにか恋するようになる。

逢うて来たのに母寒かろう寒かろう

多喜女

と云うのがある。一読して胸に迫るものがあるではないか。古川柳に、「母親は勿体ないがだましよい」と云うのがあるが、「逢うて来たのに」は別に母をだます気ではないが、それとあからさまに云えないのである。ただ黙つて母の後ろ姿に手を合わせたことであらう。

次に、

碧い瞳の子でも孫なり負うて出る

没食子

と云う句もある。他人からパンパンと呼ばれて、変な眼で見られようとも自分にとつては可愛い娘には違いない。その娘の生んだ子である。瞳が碧かろうが、毛が赤かろうが、負うて出るのに誰に憚る必要があろうと云うのである。孫に対する愛情をしみじみと感じさせられる句ではないか。

真実味の句は例示したような親子の間だけの問題だけではない。

酒にのまれるなど嘘と思えり

刀 三

や

何も願わじただ生きていたいかな

刀 三

などの句を味読すると作家刀三の透徹した真実味がひしひしと迫つて来るのを覚える。肺を病んで天折しただけに、その情熱のはげばを常に川柳にもとめていたのである。

嬉しきは手紙の中にまた手紙

雅 幽

などの句にも、真実味の溢れていることを知られるであろう。川柳は一面に於ては人生に対し、社会に対し冷徹に批判のメスを当てるが、一面には又斯うした温いところの持ち主なのである。

軽味の句

穿ち味がないことはないが濃度が強烈でない句、何んでもない表現で、しかも淡々たる味を持つてゐる句を軽味の句と称している。軽味の軽と云う字は軽率とか、軽薄とか、軽佻とかの熟語となつて、いかにも安っぽい皮相な感じを表わしているが、川柳の軽味という語には、そんな意味は全然ふくまれていない。よく世間で、あの人の筆はかれていますというが、そのかかっているに近い意味なのである。つまり枯淡という語が一番適切なのではないかと思う。例えば美食に飽いた人のお茶漬の味だと云えよう。従つて軽味の句は頗る軽快であり、洒脱であり、すらすらとよどみなく詠まれていて、しかも汲めどもつきぬ枯淡な持味を出している点が、その特徴なのである。天衣無縫と云うか、技巧の少しも眼立たない句である。従つて相当にこの道に年季を入れてはじめて出来る句である。

次に軽味の句を少しく例示しよう。

子沢山使いにやつたのを忘れ

水 客

半巾を石に忘れたお年寄

久留美

もう手術室は埴子の音ばかり

没食子

いい月夜向うも二階あけている

竹 莊

電線から落ちる雫もあとやさき

葎 乃

豆腐屋は虹の出ているのも知らず

同

軽味の句は一読した時に、ただすらすらと読みつばなした句のように見えるが、決して決してそうではない。実によく洗練されていて滋味掬すべしと云う味がある。斯うした味のある作品が生まれるまでの作者の労苦は並たいていではない。多年の労作によつて、はじめて達成し得られた枯淡味なのである。

「子沢山」の句にしても、いろんな道具建てをして面白おかしく詠ませようと云う句ではない。穿ち味はあるが、それもあくどいところがない。淡々として子沢山な人の生活を詠んでいるのが特色である。

「半巾を」の句は、しばしの憩いを石の上に求めたのであろう。そのために石の上に半巾を敷いたのであるが、立ち上つた時にはもう半巾のことなどはアタマになかつたので、そこへ忘れたのである。

いかにも年寄らしさが頗る自然に詠まれているではないか。

「もう手術室は」の句はいよいよ手術にかかるまでの刀圭家の心のざわめきも、患者の薄氷を踏むようなおののきも感じられないで、そこには手術に用いる埴子の音ばかりが聴えているというのである。しかし、その音は強く印象的であつて微妙なものが感じられる。

「いい月夜」の句はいかにも平明であり静寂である。秋の夜の澄みきつた美しさが素直に感じられるのである。単なる叙景詩でないことは「向うも」の四音字に含みがあるからである。

「電線から」の句は作者の静かな生活がうかがえると同時に、いかに自然を凝視しているかが判るであらう。斯うした哲理を帯びた句も又軽味の句として興趣の深いものがある。

「豆腐屋は」の句は美しい絵のような句である。豆腐屋は詩人でもなんでもないので、虹が出ていようが出ていまいがどうでもいいのであつて、豆腐屋を藉りて、作者の豊かな詩情を描いているところにこの句のいのちがある。

もう亡くなつてから余程になるが、曾て、かをとると云う作家があつた。郷土色をハッキリと掴んだ、脂ッ濃い句で知られていたが、その晩年には

待ち合せ帽子の型を折り直し

一反は要るしとモンペ縫いながら

春雨に青さの続く竹梯子

と云うような淡々とした軽味の句を詠んでいる。学んで達すると云う句境ではなく、作者の心境の變化と技術の洗練さがそうした転味の句を生むのである。

感覚味の句

古句に

やわやわと重みのかかる芥川

と云うのがある。芥川というのは摂津の三島郡にある川の名であるが、伊勢物語の芥川というのは一説には内裏のうちに溝をはつて、汚ないものを流したそれだということである。しかし川柳では津の国の芥川として詠んだものであろう。在原業平が二条の後のまだ若い頃に盗み出し夜陰に乗じて都落をした時、愛する女を背負うて川を渡るさまを詠んだのである。重みは云うまでもなく女の重みである。この句は「やわやわと」という上五によつて、女の肌の柔やかさや、温か味や、衣摺れの音ま

だが、官能的にひしひしと感じられる。斯う云う句を感覚味の句と称している。

感覚味の句はそう沢山詠まれてはいないが、すぐれた手法の一つだとは云えよう。詩情の豊さを特徴とするだけに穿ち味は非常に稀薄である。従つて濃度のきつい穿ちの句が所謂川柳だと思つてゐる人達には全面的に共鳴し得られないらしいが、一部の川柳人からは感覚味の句として非常に高く評價されている。現代作家の句を次に例示しよう。

灯が消えて女女として匂い

朱 人

篝火の葡萄色なる闇もよし

町 二

ドロドロと貧民窟へ陽が落ちる

豆 秋

我母の一生風の音がする

菟 豆

提灯は消した匂いでたたまれる

猫 三

マダムの腕が煙の如くによりそうて

愚 陀

「灯が消えて」の句は、燈火の下では女は形の上の美しさがあつたが、灯が消えた途端に顔や姿の美しさがスーッと消えてなくなり、急に女としての匂が身近かに迫つて来たのである。そして恋ごころのような妖しい空気さえ感じられたというのである。

「燐曳の」の句は黄昏れて間もない頃であろう、葡萄色の闇と燐曳というもののとの調和が実にびつたりと合つていて美しい情景が描かれている。若い男女の恋のいぶきが感じられる。

「ドロドロと」の句はスラム街の写生句であるが、ドロドロと云う上五が落日の姿を巧みに表現して、如何にも感覺的である。

「我母の一生」の句は、世の荒波と闘つて来た母を偲ぶのに、吹き荒ぶ風の音のそのように感じたのである。母に同情した切ない心がよく出ている。風の音に比したところに感覺味を感じさせるのである。

「提灯の」の句は、提灯の灯を消したひょうしにフツと匂いが鼻に来て白い煙が立つ、それと同時にスーッとたたまれる。その感じを巧みに捉えた句である。

「マダムの腕が」の句はマダムの腕がスーッと自分のからだに煙りのように、寄り添うて来るのを感じる。ハッと気がつくとマダムの腕はそこにはない。マダムに対する恋情がそう感じさせるのである。詩の解説ぐらゐむずかしいものはないと思う。云い足りても云い余つてもいけない。何れにしても原句をそのうからである。散文化出来ぬところに詩があると云えよう。殊に感覺味の句がそれである。

比喩法の句

比喩法の句には直喩、隠喩、換喩、提喩といろいろあるが、「ように」とか「如し」とか「氣味があり」とか云う語を用いて、ある事物をあらわすのに、他の類似した事物で形容して一句をなすのを直喩法の句と云うのである。しかし、その比較されるものは常に種類の違つたものでなければならぬのである。たとえば落花が雪のようにと云えば、落花と雪とは種類が全く違つているので直喩になるが、その比較するものは、斬新でなければならぬし、比較する二物はかけはなれたものでなければならぬ。比較する種類の二物が極く類似していれば平凡な直喩となつてしまう。あまり奇抜であつても駄句になるおそれがある。次に例句を示すこととしよう。

巻物の様に秋刀魚を猫くわえ

花 村

拗ねた子の化石の様に寝てしまい

苑 女

かんぴようの様に火の見へホース干し

嘉 一

日本地図胡瓜の如く横たわり

喜 由

以上は何れも直喩の句である。最初の三句は「様に」であり、四句目は「如く」である。

「巻物の様に」の句は巻物と秋刀魚の形の類似から、猫が秋刀魚をくわえた姿と仁木弾正が巻物をく

わえた姿とを比較して可笑味を感じたのである。

「拗ねた子の」の句は拗ねた子が黙りこくつて寝た姿と化石との比較である。化石もまた黙りこくつて寝ているように感じたのである。

「かんぴようの様に」は干瓢と火の見に干したホースとの類似からの連想が生んだ句である。古句に
神前の鈴ふんどしのとけたよう

と云うのがあるが、この句と同巧だと云えよう。長くだらりと垂れていると、色までが一寸似ているので、なるほど面白いとうなずかせられるのである。

「日本地図」の句は地図を見ると日本の姿が恰度胡瓜のように横つていると、日本の本島と、胡瓜との類似した点を連想して興味を感じたのである。

次に隠喩の句であるが、直喩で比較を表わす語の「ように」や「如し」などを省略して、「ように」や「如し」の代りに「なり」とか「であり」とか云う語や、それと同じ意味となる語や、それらの語さえ省略された形式で構成された句で、隠喩の句は直喩の句よりも概して力強い表現となるものである。

古句に

うけ出して見れば昼間の螢なり

と云うのがそれである。傾城はなるほど美しいが、うけ出して見ると昼間の螢である。昼には美しくもなんともないし、その力を發揮しないからである。斯ういう比喻の句を隠喩の句と云うのである。

換喩の句と云うのは、ある事物の代りに、その事物と實際上関係のある名称を使用した句のことである。例えば大学生を角帽というのも換喩なら、大臣の地位を大臣の椅子と云う名称を用いるのも換喩である。川柳にはよく「伊達巻が」とか「伊達巻は」という表現の仕方をするが、その場合は伊達巻をした女がの代用であつて、つまり換喩法の表現を用いた句なのである。でなければ、伊達巻が踊つたり、伊達巻がタバコを喫つたりするような表現は全く意味をなさないことになる。提喩と云うのは物の一部分の名と全体の名、種の名と属の名、抽象の名と具体の名を取り換えて効果的にすることである。つまり禿頭という一部分を捕えて、頭の禿げた人のことを云ふ場合が、物の一部分の名と全体の名と取換えた一例である。これを川柳の構成上に応用したのが即ち提喩法の句なのである。

比喻法の句には以上四つの手法があるが、何れにしてもそれ等の比喻が平凡であつたり陳腐である場合には全くゴムを噛むような句となるのである。

誇張法の句

誇張法の句例によく用いる古句に

千客万来みな来ると困まるなり

と云うのがある。この句は小料理屋などに「千客万来」と云う額がかかっているのを見て皮肉つた句であろう。誇張法で巧みに滑稽感を出した句である。つまり、ある事物を描写する場合、実物よりも、より以上に過大に表現して句意を強化したり、滑稽味なり深刻味などを出す手法を云うのである。白髪三千丈と云えば誰でも真逆そのままにうけとる人はいない。その語から受けるのは非常に長いと云う印象だけである。しかし白髪三尺と云えば、そのままうけとる人がいるかも知れない。そんな時に白髪が三尺なかつたとしたら虚偽の表現と云うことになる。その点誇張法は活用を誤ると危険である。しかし巧く使いこなすとウンと効果的である。

前述の「千客万来」の句では真逆千人も万人も客が来ることはないと云うことがハッキリ認識されるし、押すな押すな盛況であると言ふ印象は充分にうけとれるので誇張法だと云うことになるのである。

頂上で見下す村のひと掴み

翠 峯

臨終へ破竹のように駆けつける

竹 木

落日へ大きく釣の糸を投げ

路 郎

だまされて火山のような怒りよう

雷 相

ポーンスの残骸となる状袋

有 為 郎

壁中貼つて市会に落選す

青 児

「頂上で」の句は人間の誰もが持つてゐる優越感をあらわした句である。たしかに山の頂上から見下すと村が一ト掴みに出来そうに思えるが、實際は出来る筈もないので、この句の下五のひと掴みはこの句を効果的にするための誇張なのである。誇張法は常に斯う云う役割を果しているのである。

「臨終へ」の句は臨終へ駆けつけるのに破竹と云つたような大げさな形容をしているところに誇張法の句としての力がある訳である。

「落日へ」の句は叙景の句であるが、太陽に釣り糸を投げると云つた大げさな表現で海の雄大さを描出したのであると共に黄昏れてゆく海岸の感じを詠んだものである。

「だまされて」の句はだまされた人の怒り方を火山のようなと形容をしたところに少々怒り方な

いことが知られるであろう。そこに誇張法の妙味があるのである。

「ボinas」の句はボinasを取り出したあとの状態を残骸という大げさな表現をしたところに誇張法の句としての効果をあげているのである。ボinasは早速取り出されて使われたがその状態をその残骸のような感じがして、あつさり捨てかねたというサラリーマンの心境がよく出ていると思う。

「壁中貼つて」の句は壁中貼つてという語が誇張の表現だと云えよう。必勝とか奮闘とか、演説会場の日程や場所などが、ベタベタ貼つてあるには違いないが全く空間がない訳ではないからである。そんなにベタベタ貼つてあつたが遂に当選しなかつたと云うところに壁中貼つてという誇張の文字が利いているのである。

要するに川柳ではいくら誇張するといつても白髪三千丈式や怒髪天を衝くと云つたような表現はあまり効果がないのではないかと思う。その点「千客万来」の句などは余程巧くこなしていると思う。なぜ誇張法の句が佳吟を得ることが至難であるかと云えば、あまりに大げさな誇張をすることによって真実味が薄れるからである。

擬人法の句

川柳構成の一手法として、人間以外の生物や無生物を人に擬し句の力を強化したり、味を一層効果

的にすることが行われている。この手法で作句したものを川柳では擬人法の句と称している。例えば、乱耽の句に

怖い役割を匙引うける

と云うのがある。匙は無生物であるがこの句では云うまでもなく匙が人に擬されているのである。怖い役割を引うけたというのは勿論毒薬を盛ることを引受けたのである。この句は内容そのものから云えば、そんなに新しい句ではないが、作句の手法が擬人法を用いて句の力を強化した面白さが出た一例である。しかし擬人法の句は技巧がすぎると嫌味な句になるのでその点では注意を要する。

次に現代作家の擬人法による作品を例挙し、それぞれの句に就いて解説を試みよう。

楽天家のクラゲは磯に置去られ

一瓢

亀の背で暫し霰がおどるなり

町二

蟻今日は方角変えて稼ぎに出

露斗

時計にも少し賞与をやろうかな

静雲

おしなべて酒もみだらな人を好く

猫三

「楽天家の」の句は十・八型の句である。波打際にうちあげられた水母が平然とそこに横たわっているのを見て作者はそれを置去られていると観じたからである。しかも平然として更に動ずる色もなく、きらきらと光つているので楽天家と観たのである。水母を楽天家と観たのは作者の主観であるが面白い観方である。

「亀の背で」の句は叙景句であるが、亀の背へ殻が弾ね返えるさまがいかに面白く、殻は無生物ではあるがこれを人に擬しておどろと観て句の力を強化したのである。

「蟻今日は」の句は蟻が昨日と違った方角へゾロゾロ歩いているのを見て、よく稼ぐ蟻だな、今日の方角を変えて稼ぎに出たのだなと、人に擬して稼ぐと云う言葉を用いたのである。蟻に対する作者の親愛感の出た句である。

「時計にも」の句は無生物の時計を人に擬した句である。毎日々々、いや一年中、よくカチカチと働いてくれるので、会社へも遅れず行けるのだ。オオそうだ、お前にも賞与をやろうかな。ワシが賞与を貰えたのも、半分はお前の働きたよと時計に対する親愛感から時計を人に擬して呼びかけた句である。作者の幸福な生活が時計を透してにじみ出ている。

「おしなべて」の句は酒を人に擬したのである。酒を飲むといふ平素のつましきを見失つて、みだらな人間になり勝ちであるが、どちらかと云えばお前達(酒)もみだらな人が好きなようだといふのである。これは作者の主観には違ひないが面白い観方である。この句など擬人法によつてたしかに効果をあげていると云えよう。

「何もせず」の句は無生物のレールを人に擬した句である。一日走り廻っている人が、フト、レールを眺めて、「なんと云う素晴らしい生活もあつたものだ、俺なんざあ毎日毎日汗だくで走り廻つていても食うてチョンだ」と、羨望とも嘆息ともつかぬ声をあげたのである。ネライが面白い。

擬音法の句

物体の響く音や動物の鳴く声を模した語彙で句を構成した場合に擬音法の句と称するのである。擬音法は英語のオノマトペアのことである。擬声語法とも写声語法とも云つてゐる。擬音語の多くは副詞であるが、形容詞や名詞である場合もある。

秋俵プツンと噛んで値がきまり

町 二

と云うのがある。この句のプツンが即ち擬音で、斯ういう擬音を用いて構成した句を擬音法の句とい

うのである。プツンは云うまでもなく米を噛む音である。大根をきぎむ庖丁のすん／＼も擬音なら、馬が走る時のポカポカと云う音も擬音である。斯うした擬音を用いたために一段と内容を飛躍させることが出来るのであるが、無闇に擬音を使つたからと云つて必ずしもすぐれた句になる訳ではない。それが適切でない場合には十七音字中に徒らに無駄な文字を挿入したに過ぎないことになり、却つて句の価値を減殺する道具になる場合もあるのである。

右にあげた句に用いられた擬音のプツンなどは米の売買の情景を髣髴とさせている点から云つて効果的であると云える。

大たい擬音というものは写生味や穿ち味を強化することもあるが、皮肉味や感じを強化することもある。何れにしても擬音そのものの意味と、その用い方によつてそれぞれ異なつた性能を発揮するのである。しかし擬音というものは誰にでも一様に聞えるものでない場合があるのでその点を考慮に入れる必要がある。例えば犬の鳴き声の「ワンワン」は日本人なら誰にでも通じるが、英語では犬の鳴き声は「ボーウォー」であるから、ワンワン、という擬音の代りにボーウォーとしたのでは通じないかも知れない。たとえ通じたとしても、ワンワンほどの響きや効果を發揮しないかも知れない。日本内地でさえ蛙の鳴き声を所によつて違つて表現しているから、擬音を用いる場合にはそうした点にまで注意を払う必要がある。萩原朔太郎はその詩の中で、時計のゼンマイの戻る音を「じば・あん・

じゃん！じば・あん・じゃん！」という擬音であらわしているが、これなどは萩原朔太郎の創作の擬音であつて、誰にでも一様にそう感じられる訳ではない。

次に現代作家の擬音語の句を例示し少しく解説を試みよう。

チ、チ、チ、チ、チ、チ、殺す場面となる虫か 葎 乃

男みなモシヤ／＼と悼みけり 沐 天

魚屋のぎつし／＼と路次へ折れ 豆 蔓

ゴンとでもポンとでも鳴れ春の鐘 重陽子

「チ、チ、チ、チ、チ」は虫の鳴く音の擬音であることは説明するまでもなからう。歌舞伎の好きな人たちには、この虫の音に、ああ、殺しの場だなと、ひそかに心を躍らすものがあるのである。その点この句のチ、チ、チ、チ、チが利いていると思う。

「男みな」の句は「モシヤ／＼」の擬音の広がりて皮肉な觀察や冷笑的な眺め方が表現されている。女のように、紋切り方で淀みなく悔みを述べることが出来ないで、口から出るか出来ないような声で、モシヤモシヤと悼辭を述べるところに、男の間拔けた一面を見ることも出来ると思う。句は至極端的に表現されているが、複雑な人生を躍動させている。擬音法もここまで巧みにこなせば申分

がない。

「魚屋の」の句は写生句である。いかにも魚屋らしい足どり、ぎつしぎつしの擬音でうなずかせるものがある。

「ゴンとでも」の句は春のぼやとした感じを巧く出している。ゴンにしてもポンにしても、少しも哀調が出ていないところに、イヤ哀調を感じないところに春らしさがある。

要するに、擬音は適切に用いさえすれば、他の言葉で到底表わすことの出来ない力や性能を発揮するものである。

前書の句

前書のある句に就いて説く前に、前書と云うものについて少しく述べておく必要があるのではないかと思う。それは私たちが単に人生観や社会観を句に詠む場合にはその句の前に、前書を用いないが、妻が亡くなつたとか、友人を駅に送つたとか、開店をしたとか、天皇をお迎えしたとか、作者の作句当時の環境を特に知ってもらいたい時に、それ等の句の前に、その意味のことを附ける語を指して前書と呼んでいるのである。従つて前書の力を藉りて句の持味を補足しようと云う考え方であつてはならないのである。句はどこまでも句として独立して価値あるものでなければならぬのである。前書

がなければ句意が判明し難い句をよく見かけるが、前書にもたれかかつて、句の燃焼をおろそかにしたのでは作者のひとりよがりの句に過ぎないものとなる。作者としてどんな句にでも、前書をつけることは自由であるが、前書がなくても立派に句の態をしていなければならないのである。靈子の句に

次男逝く

一と七日二た七日とて秋の花

というのがある。この場合、第三者には「次男逝く」という前書があるうが、なかりうが、句意はハッキリと感ぜられるのである。作者は次男が亡くなった時の悲しみを詠んだ句であるから「次男逝く」の前書をつけたのであるが、第三者にとつては「次男逝く」であつても「次女逝く」であつても差支えないのである。ただ愛児を亡くされた時の作であるということが判りさえすれば充分なのである。たとえば

野猪の如くにと日記に書きしかな

緑之助

と云う句がある。この句は前書がなくても充分面白味が感じられる句であるが、作者は「新年を迎え

んとす」と前書をつけている。若し私なら「元旦」と前書したいところである。前書がなくても句意が判るが、前書と句との抱き合せで、ほのかにも前書の力を藉りようとするのであるとすれば、年末の感想であるとするよりも、元旦の感想とした方が面白いのではないかと思うのである。しかし、それを一つの技巧として句を生かそうとすることは、能因法師のてつを踏むことになるであらう。前書をつけるなら矢張りありのままでなければ全く意味のないものになる。静太に

雨だれはわたしに死のといいました

と云う句がある。この句には「病床吟」と云う前書がつけられてある。前書としては何処までもこの程度であつて欲しいと思う。永い闘病生活をしていた作者が病床の苦吟には真に真剣なものがあつた。この句を読むと消え入るような淋しさを感じていたのであらうことが想像されるのである。後に自ら手で死を急いだことがうなずけるのである。小松園が

遅れ馳せながらもやつと鯉幟

と云う句を詠んでいる。前書には「長男出生」とある。これなども、前書はなくても男の子をはじめて儲けた父の欣び方が、よく出ているが、この程度の前書なら前書としてうなずくことが出来る。今

まで女の子ばかりだったことも知ること出来はおえましくなる。

宮 詣

長男も盥ふんばる程になり

これも小松園の句である。この句も父の欣びが句外にあふれ出ているではないか。前書の用い方も上乘だと思う。

高山城二の丸跡から遠望

来つるかな穂高も檜もすぐ東

青 美

旅したものの心持ちをよくあらわした句である。ああ遙々と、よくもこんなところまで来たものだ。ホントに来てよかつたと云うところ持ちが、前書がなくとも直感し得られる句である。ここに、作者のいる場所を前書としたことも、適切な用い方であると思う。

慶弔句のこと

慶弔句と云うものは私達の生活に大きな役割を持つている。それは他人の欣びを自分のことのように

に喜び、他人の愁いを自分のことのように愁いて句作し、これをその人に贈つて真実心の交流に資する場合と、自家の慶弔に対してはそれ等の慶弔句が自祝と自慰の役目を果すからである。

しかしながら、柳詠などに発表された慶弔句を一瞥するに概して川柳味が稀薄であり、感激性に乏しい句が多いようである。その原因として幾つかを数えることが出来る。仮りに戦死が伝えられていた友人が突如として復員した場合、その驚きと欣びが、こんがらかつて、苦心すればするほど表現上に破綻を来たし、第三者から観れば全くひとりよがりの句としかうけとれぬ句が出来上つたとする。それは詠もうとする事柄があまりにも生々し過ぎて、充分にこなし得なかつたことを証拠立てているのである。又その作家と復員者との親疎関係に起因する場合もある。例えば友人の友人が復員した場合、その感激性は前者に比して稍冷静となり、反つて弾力性のある秀句となることもある。しかしながら親疎関係が薄れてゆくに従つて、感激性の失われた普遍性の句となり易いことにも留意しなければならぬ。と同時に親疎関係が浅いのには其間の区別を忘れたならば阿諛の句になつたり、虚礼の句になつたりすることもあると云うことを知らねばならない。

次に慶弔句の四つの形態を例示し、参考の資としよう。

新婚のまんま二十と有五年

一 浪

それは作者が友人の銀婚式を祝して詠んだ句である。友人の家庭の円満さを二十五年後の今もなお新婚そのままだと見たところにヤマがあり、祝句の体をなしていると云えるのである。

下積は今日も無事故の日をすごし

緑 雨

この句には「勤続三十二年」という前書があり、作者の自祝の句である。よくも三十二年も勤めて来たものだ、それにしても今日も無事故ですごせたことは有難いことであるという作者自身が平凡な幸福を噛みしめているようなところに此の句の良さがある。

砂手本さぞ励むらん励むらん

雅 幽

この句は私の長男ロンドンが、九ッで亡くなつた時に、今は亡き作者から贈られた句であるが、廿余年後の今日になつても感激を新たにさせられる。追悼句として上乘の作だと思う。

同じく雅幽の句で、

零骨を悼む

さらば君又何処かでと言いだいが

と云うのがある。これなどは親しい柳友を喪つた時の心境を極く平易に自由に詠んでいる点で弔句の態をなしていると思う。

紺紺今はアートのために裁つ

葭 乃

この句には「長男ロンドンを喪いて」と云う前書がある。諦めようとしても、諦めきれぬ自慰の句である。アートは次男の名である。句意は説明するまでもないであろう。以上四句のうち、第一、第三の句は他人の慶弔に寄せた句であり、第二、第四の句は自家の慶弔に対して自祝と自慰を表明した句である。大体慶弔句は前述の四形式の範囲を出ないのであるが、交際関係の親疎其他によつて濃淡深淺の味を出さねばならない。慶弔句には又禁忌すべき語彙のあることも心得ていなければ予期しない非礼とならぬとも限らない。殊に他を譬喩するのに、つまらない草木や昆蟲などは絶対に遠慮すべきである。まして皮肉を飛ばしたり、諷刺や揶揄を感じさせるような辞韻は避けなければならない。譬喩の例句としては曾て拙吟に、

首相逝く

待つたなしの歩にさされたる犬養毅

と云うのがある。これは首相を将棋の駒に擬したのであるが、この場合の首相は先ず飛車と云つたところである。歩によつて飛車をとられた口惜しさをしみじみと感じさせられたのである。しかし、この句にしても、首相と私が親しい間柄であればこの句もこんな表現とはならなかつたであらう。今一つは社会党の書記長片山哲氏が首相に推された時、次の祝吟を打電したことがある。

サア動きますよと片山運転手

颯爽として日本丸の運転台に突立つた片山哲氏を想像することは実に愉快であつた。しかし首相を運転手に擬するとは非礼も甚しいではないかと真向から詰めよられれば謝するに辭がない訳であるが、相手が労働者の味方を標榜する社会党であるだけにこの譬喩は生きていと云えるのである。友人が電車の運転手になつた時に、こんな句を贈つたところで祝吟にはならない。この句などは国家を動かす運転手に擬せられたのであるからまんざら悪い気もしなかつたであらうと思う。ここに川柳の面白味があるのである。谷孫六が亡くなつた時に、

きん坊も三途の川でからつけつ

と云う句を詠んだ人がある。イヤ詠んだだけではない。孫六の主宰していた「財の教」と云う雑誌に

追悼川柳として掲載されているのである。追悼どころか、これでは故人を三途の川まで引張り出して侮辱しているようなものである。随分沢山載っていたが、追悼川柳の体をなしていた句と云えば、

逝く秋を押切帳の綴が切れ

荷 十

位なものであつた。この句にしても迫力は稀薄であるが、追悼吟としてソツのない句だと云えよう。尤も故人との関係が深くなかつたので、コレ以上の句が詠まれなかつたのかもしれない。

冬空へ鳥一疋高く飛び

と云う句もあつたが、故人を鳥などにたとえることは避けたいものである。

ゆく秋の落葉に寒く時雨する

なども、これが追悼句だとはうけとりかねるのである。殊にゆく秋だの落葉だのという文字の羅列で構成したレデーメード式追悼句にはウンザリさされる。

巨星西に落ち秋更に深し

巨星地に落ちて大地は冬となり

巨星落つ玄海灘の波静か

斯うして並べて見ても、人の死に対して巨星地に落ちと云う表現が如何に月並であるかは想像に難くないであらう。

追悼句というものは兎に角むずかしい。それこそまことの心がにじみ出てさえいれば、句の巧拙などは末の問題であるかも知れない。

七七型の句に就いて

川柳の詩型は大致かみに云つて、五音、七音、五音の十七音字であることは前にも述べた通りである。しかし、これでもまだ音数が多すぎる場合があるので、時には七音、七音即ち七七型によつて一句に纏める場合がある。これを短句と呼んだり十四字詩と称したりしている。明治四十二年に物故した小島六厘坊は川柳と詩形が違ふ以上、これを川柳と称せず、十四字詩として全然別箇の詩とした方が穩当であると述べているが、私は寧ろ従来通り、川柳の一形式として川柳中に包含するのが穩当ではないかと思うのである。それは川柳の生い立ちが前句附（まえくづけ）の附句の獨立したものであり、

それ等の附句の型が時に振替つて七七で附けられている点から考えても、七七型も又川柳詩として扱ふべきものだと思考するのである。そしてそれ等の例証として「武玉川」に於ける多くの短句を川柳として取扱つていると云うだけで充分である。しかし、十四字詩が川柳的内容から離れて別箇の詩型として出_ツ発するとすれば、それは問題が別である。

私達は十七音字の川柳が、詩としてはこれほど短い詩型がないのに、それでもまだ音数が多すぎると思う時がある。それをムリに十七音字に纏めようとする_と勢い無駄な語彙を挿入することになる。例え一音字でも無駄な語彙を使用すれば、必ず句にたるみを生ずるものである。こんな時に私たちは七七型の句によつて、それ等の欠点を補つたものである。だから七七型は川柳の基本型ではなく、非常時型であると云いたいのである。

逃げれば逃がす寺の盗人

去られながらも片付けて出る

貰い乳とも知らず子はかむ

他人のような僧の兄弟

おも家で食うと食える麦飯

以上は古句の七七型の例である。ぬきさしならぬ表現のうまみを味うべきである。七七型としたために、内容に緊迫さを感じさせられるのである。しかし、下手に七七型の表現をとれば句が理窟ッぱくなるものである。無闇に七七型で作句をしない原因が、そこにあるのである。少しく今人の作を例示することしよう。

博愛をやめて兄の跡継ぐ

六厘坊

誰が売るのか古着屋に袈裟

美知夫

犬がおびえた以上におびえ

山川児

心覚えも筆で書く母

葉光

ねえさん冠りをとれば元旦

水車

下戸を飲ましてワイワイと春

伍健

ききてがあつて愚痴も嬉しき

都留逸

子と呼ぶ声に外聞もなし

飯山

又も立派にたつた銀行

露斗

句意は解説するまでもなからうと思うので省くことにした。一句一句の持ち味をよく味つて見れば、

れ等の句を特に十七音字に引き伸す必要のない事が判るであらう。

恋の句に就いて

恋を詠んだ句は大雑把に分けると二つになる。一つは恋そのものへ批判のメスをあてたもの、他の一つは恋する人たちのいぶきを、この短詩の力を藉りてつたえているものである。試みに古川柳の中から恋を詠んだ句を拾つて見ると、その殆んどが、恋というものを冷めたい眼で眺め、恋そのものを客観しているに過ぎない。情熱を燃やした句、恋の奴隸になつた心境を詠んだ句に接しないことである。たまたまそれに類した句があつても、それは情痴の世界を曝露した所謂バレー句に近いものであつて純情な恋どころとは云えない程度のものである。人情の発露である恋どころが、人間詩と云われる川柳に於て、どうして大胆に自由に詠まれていないのかと不思議に思われるかも知れないが、それは川柳の生い立ちが、前句の附句として詠まれたのが素因をなしているのではなからうかと思う。次に古川柳の恋を詠んだ句を例示することにしよう。

人間に尻目といえる飛道具

手入れたよりも野菊が御意に入り

十三と十六只の年でなし

下女が恋日に三度ずつ実を見せ

ほれ薬十日過ぎてもさはなし

出代の涙にしてはこぼし過ぎ

惚れた奴見ぐるしいほど使われる

そつとあく戸の内外の面白さ

そんなこと存じませんと鶴を折り

その手代その下女屋はもの云わず

この外幾らでもあるが、何れも以上の句に類したものに過ぎない。その一句一句を味読されたらうなずけるように、まことに冷めたい穿ち本位の句である。句意の解説は一々しないが「人間に」の句はウィンを面白く詠んだのに過ぎない、「手入れした」の句は余所の花は赤いという俗諺を句として表現したものである。出代というのは昔の奉公人は春秋の二季に主家を辞することのならわしとなっていたのである。これ等の句の中でも「そつとあく」や「そんなこと」などは巧みに描写していると云えるが、これは表現の力が、そのすべであると云いたい。

以上は古川柳の恋の句について述べたのであるが、今人の句には矢張り古川柳式な観方で詠んだ句以外に、恋する人の真情を自由に奔放に吐露している句に接するのである。この点、川柳の一進境を示すものと云えよう。

大正初期に私が刊行していた柳誌「雪」から、日車の句を覗いて見よう。

思わじと椿の花を火に焙べて

物足らぬままに鏡の前に立ち

カナリヤを覗いて今日も遇いに行き

いつ来てもおんなじ着物きてる恋

同じ事氣をかねて女寄り添わず

来ぬ筈の人をプラットホームに求め

二三日新聞も見ず遇うていた

などがある。尤もこれによつて大正初期に於ける私たち一派の句風がうかがえる訳であるが、その当時にはそんな句は川柳ではないと非難を浴びせられ全然異端視されたものであつたが、それが後にはそれ等の人達によつて新傾向の名で呼ばれるようになった。そんなことは兎も角として、右の句を味

つて見れば、古川柳と全然行き方を異にして、恋するものの真情を余すところなくぶちまけていることに気づくであろう。しかも「思わじと」の句には詩情の豊さを見ることが出来るし、「カナリヤを」の句には若さがにじみ出ているではないか。「二三日」の句にいたつては恋するもののにのみゆるされる境地を巧みに詠んでいると思う。「来ぬ筈の」の句の如きは恋の句でないと云えば云えないこともないが、ジッと噛みしめて味えば矢張り恋する人の人待ち顔の哀れさが仄かに感じられるのである。これ等の句を総合して味読すると日車の中年の恋ごろを身近かに感じずにはいられないのである。私の句では、

行末はどうあろうとも火の如し

や、

名を棄てて十七八の恋もせん

恋の良あの眼だろうか眼だろうか

おろかにも顔見に行けば雪になる

人妻のあまりに長き袂なる

などがある。「行末は」の句は若い時の句である。「名をすてて」の句は中年頃の句である。ソロソロ冷静な自己批判が首を擡げている。恋も斯うなつてはおしまいである。も少し、他の人達の句も列べて参考の資としよう。

初恋の河をはさんで淋しがり

悠々

身一つを任せば男白々し

春三

これも自己批判の句である。

逢うてやつて下さい坊や歩きます

石竹

切実なものを感じさせられる。

嬌曳の葡萄色なる闇もよし

町二

詩趣の幽艶さが迫つて来る。

恋人を逃すまいとて嘘をつく

一文字

恋するものの愚さがよく描かれている。

恋なのかしら見送りもしてみたく

柳秀

作者は医博である。常に謹厳であつた学者の胸底にも斯うした恋ごころが秘められていたものと思

われる。

ひばり鳴いたとてまぎれましよかね赤椿

莢 豆

表現は短歌的ではあるが恋するものの悶々の情が、よく描かれている。

恋の疲れズボンを敷いて寝る

刀 三

卒直に、投げ出したように詠まれてはいるが、一人者のやる瀬なさが出ている。

恋しさは風にも聞いて見とうなり

白 蝶

ひとりいて、なやみになやむ男ごころを遺憾なく表白している句だと思う。

以上列挙した以外に、今人の句には多くのすぐれた作品があるが、これで大体の句ぶりは判るであらう。

終りに、今人の作で、古句式表現によつて詠まれた句の幾つかを例示しておこう。

人前は想思と見えぬお辞儀をし

柳 秀

頼りないわ頼りないわと惚れている

三 笑

清教徒たりしも恋の十五六

九 坡

他人の恋おでこの奥から静に見

方 正

斯うして列べて見ると、巧いには巧いが、心境を詠んだ句ほどに迫るものがないと云えば云えぬこともない。

時事吟に就いて

時事吟に就いて

新聞記事になるような社会のあらゆる事象を詠んだ句を時事吟と称している。時事吟は主材が主材であるから穿ち、皮肉、諷刺、滑稽の味を多量に含んでいる。その味が強烈なほど、面白く読まれていくようであるが、しかし、詩味に乏しいという難があり、時の流れによつて、句の生命が稀薄になり、いつのほどにか句意すら不明になり勝ちなので、詠史川柳などと同じように第二義的な作品として扱われている。古川柳などに難句の多いことも、矢張り当時の時事を詠んだ句の多いことに起因するのである。今日の川柳でも、多分に時事性を持つてゐることは指摘し得られるし、それが寧ろ川柳の特徴の一つだとも云えるであろう。他の短詩型文学でも、全然時事性を持たぬ訳ではないがそれ等はその時代の味が出てゐる程度であつて、川柳時事吟のように、真ッ向から批判したり諷刺したりするようなことはない。

新聞などで時事吟を募つたりするのは所謂寸鉄殺人的な時事性のある句が新聞の読者から喜ばれさえすればいいのであつて、それ等の句の生命が時の流れと共に稀薄になろうが、詩味に乏しかろうが、それは問題ではないのである。しかし、自己の作品の永遠性や芸術性に思いをいたす作家として、時事吟を排するということはあまりにも当然なことであらう。自分なども、新聞社の依頼によつて、時事吟を作つたこともあるし、又選句もするが、それは大衆文学が文学的価値が稀薄であつても大衆の要求に應じて作品を世に送つているのと同じ程度のものではないかと思う。要するに時事吟は即興吟としてのみ存在がゆるさされているのが現状であるが、それ等の作品の中にも稀れに生命のあるもの、詩味の豊かなものが生れないとは限らない。

時事吟に興味を持ち、時事吟を作ることとは自由であるが、前述の諸点を知悉しておく必要がある。次に句例によつて更に解説を続けよう。

防衛問題

夏の夜を蚊帳は要らぬと云いきれず

MSA 援助

ウヤムヤのうちに二号に扱われ

独立というも表札だけのこと

運転手殺し続出

霊あらば化けて出てやれ運転手

帰国者二夫の悩み

二歩ですと将棋のように片づかず

青空女給を取締る

ビール一本三千円にまたたく灯

参賀の惨事

二重橋これ今生のいとまごい

吉田内閣また改造

すげ替えて見てもガン首すぐ詰まり

吉田内閣総辞職

首相まで城あけ渡す十二月

斯うして拙吟の幾つかを並べて見たが、膝をたたくような句ではない。これでも新聞に発表した当

時はかなりにうけた句である。読者から直接ハガキで共鳴やら讃辞やらをうけたし、運転手殺しの句などは原稿を取りに来た記者の乗っている自動車の運転手がファンの一人になった位であるが、今日読まれてその当時の私の公憤がどれだけ知つて貰えるかは疑問である。なるほど運転手殺しは今でも新聞紙上を賑わすので、この句が穿ち句としての存在はあるかも知れぬが、それだけのものである。昭和廿八年、廿九年の二ケ年に新聞に発表した句の中から抜いたのであるから僅に一、二年以前の句であるが、しかも句意が渺からずボケて感じられるところに時事吟の生命の稀薄性を知ることが出来る。よう。

防衛問題の「夏の夜も」の句などは、かなり苦心の作であり、自信作でもあつた。川柳家からは激賞された句であるが、時事吟としては句品が高すぎるし、地味な表現でもあつたので、世間からは運転手殺しほどに拍手は送られなかつたようである。

時事吟の多くは、その生命が刹那的であり、花火線香的で、捕捉した題材が白熱火している時に尤もその句が価値のある時であつて、如何に大問題であつても、一度その内容とする事象が世間の耳目から遠ざかつた時には、句としての存在はあつても、その生命は全く稀薄になつてしまうものである。しかしながら、時事吟という意識を離れて作句した句で、多分に時事性を含んだ句が生れることがある。

例えばグレン・ショウの、

パパママという子の親のアップパ

と云うのがある。ロクに英語も話せないのに安サラーマンの家庭で、子どもにパパだの、ママだのと云わせた時代がある。その頃に、そのママは簡単着のアップパを着ていた。今ではアップパと云つても若い人達は知らないかも知れない。この句は当時の世相を巧みに捉えた穿ち句であるが、今日から見れば當時を詠んだ時事吟だと云えるであろう。しかも作者自身は時事吟として作句した訳ではない。こうした句は同じ時事吟にしても時代性を詠んでいるだけにその時代を知ることによつて時間的生命は單なる時事吟に比して幾らか永いと云えるであろう。

時事吟の例句に拙吟を用いたのは、生命の稀薄になり勝ちな時事吟のことではあり他の人達の句を拝借する非礼を避けたのに外ならない。

川柳と俳句の相違点と類似点

川柳と俳句とどう違うかと云うことをよく訊かれる。それは形式が同じ十七音字であるから門外にいる人達には判別が出来難いからであろう。イヤ門内にいてもハッキリ判つていない人達もいるので

あるから門外の人達として判らないのもムリはない。

形式から云えば川柳も俳句も同じく十七音字中心の短詩であるが、用語が俳句の方は韻文であり、川柳の方は主として平言俗語であるため一読した時に、形式まで違っているのではなからうかと思うほどに違った感じがする。俳句が紋服なら、川柳は浴衣か丹前ぐらいくだけた肌ざわりである。しかし、どちらがいいとか悪いとか云っているのではない。又云えもしないのである。俳句には俳句のいいところがあり、川柳には川柳のいいところがあるからである。俳句も拙いのはダメだし、川柳も拙いのは矢張りダメである。ただ一方には少しく堅苦しいところがあり、一方には極くだけたところがあると云う風にうけとれるのである。それは句を構成する文字や語の相違から、表現上異つた音律を生じるからである。それに俳句の方では切字と云う約束があるし、その外にいろんな束縛がある。「元旦」だとか「冬の月」だとか云う季感を表わすための季題と云うものがある。

切字がどんな役割を果しているとか、季感を出すのに季題がどんなに便利なものであるかと云うようなことは俳書について研究されれば判ることであるからここでは省略する。兎に角俳句では、

荒海や佐渡に横とう天の川

と云つたように、「天の川」と云う季題をとり入れて季感を表わすことになつてゐるが、川柳の方で

は切字がどうか、季感を表わさねばならないとか云うような約束は一切ないのである。季感のある句もある。俳句の季題をそのまま用いることもあるが、それは俳句の季題と用法が同じだとは云えない。しかし使つても一向差支ないし、下手に使えば川柳とも俳句とも云えない鶴式な句が出来るだけである。つまり川柳は俳句にくらべて表現上かなり自由ではあるが、無制限に自由ではない。ここでことわつておきたいのは、一概に俳句と云つても、さきほど例に挙げたような定型律の俳句でなく、自由律の俳句を作っている人もいれば又無季の俳句を作っている人たちもいるのである。そのよしあしは別として、自由律俳句や無季の俳句を作っている人たちは数に於て定型派とは比較にならないので、ここで川柳との相違や類似を述べようとしている俳句は所謂定型派の俳句のことであると云うことと、川柳に於ても勿論定型派の川柳との対比である。非常に厳密な云い方をすれば、それ等の俳句と川柳に於てすら、前述の事柄に於て多少の例外のあることは認めなければならない。それは地図によつて都市が出来るのでなく、都市が出来て地図が出来るので、同じ都市と云つても都市の中に農家があると云う例外的な都市があるように、川柳と俳句の相違点や類似点をあげても、それにも多少の例外のあることは知つておくべきである。

次に川柳と俳句とは共に一行詩であるが、俳句は「明月や」と「池を遶りてよもすがら」のように二つの観念に分けることが出来るが、川柳は「母親はもつたいないがだましよい」のように詠まれて

二つの観念に別けることが出来ないから、俳句は二呼吸詩であり、川柳は一呼吸詩であると云うように分類している人もあるが、これとて例外もあるので、そういう違いもあると云うに過ぎない。

川柳と俳句の姿が、同じ十七音字中心であることの疑問を解くためには勢いその生いたちについて簡単に述べる必要があるであろう。

川柳の方は、継歌から連歌、連歌から俳諧、俳諧から前句附、前句附から川柳が生れたとされているのである。つまり前句附の附句を独立させ、一句建として句意の解せられるものを、分離させたのにはじまり、遂に一句建としてつくるようになったのである。例えば、

斬りたくもあり斬りたくもなし

と云う前句に、

盗人を捕えて見れば我が子なり

と附句をする前句附の、その附句を切り離して見ても、放蕩息子が我が家へ盗みに押入つて捕えられたが、捕えた親としては意外な結果に斬ることも出来ないと言う父性愛がこの附句だけで巧みに描出されているので、遂に前句を抜きにして作り出したのが川柳なのである。

では俳句はどうかと云えば、俳諧の発句、つまり首句を独立させて句意の解せられるものを発句と称したのであるが、子規一派が旧派の月並発句と区別する便宜上、俳句と称するようになったのである。尤も俳句と云う文字は子規派の創作ではなく古くからある用語である。

川柳と云い俳句と呼んでいるが、ズッと遡れば同じ家から出ているのである。しかし同じ家から出ていると云つて、柳俳無差別論を称える人もあるが、そういう人達はものの発達とか進化とかいうことを無視している訳であるから論ずるに足らない。現在、俳句はどこまでも俳句であるし、川柳は何処までも川柳である。川柳には川柳のよさがあり、俳句には俳句のよさがある。川柳は俳諧の滑稽味を伝統的に生かし、俳句は芭蕉の正風によつて「わび」とか「さび」とかを生かす短詩となつて、それぞれの道を歩み続けているのである。本筋から見れば途中の道草的な変遷や枝葉的な傾向までここで述べる必要はあるまい。甚だ簡単ではあるが、川柳と俳句とは右に述べたような柳歴と俳歴をもっているから、同一の内容に歩み寄りぬ限り柳俳無差別論はなりたないであらう。しかし相接した二者の判別はなかなか容易でないように見えるが、それを判別するための大きなカギの存在することは云い得られるのである。

それは俳句は叙情詩であるが、川柳は単なる叙情詩ではなく批判詩である。時に多少の例外はあるとしても、この物尺によれば俳句と川柳との区別はそうむずかしいものではない。

俳句と川柳の内容を区別するのに、川柳は主として人事を、俳句は主として自然を詠むものだと言われていたが、川柳も自然を詠むし、俳句も人事を詠んでいる。しかし川柳で自然を詠んだ句にはどつかに人間臭さがあり、俳句の人事には何んとなく人間味の稀薄さを感じさせられる。川柳で自然を詠んだ句では、

磯の松皆んな酔つたと云う姿

東 魚

海岸の松は逃げ出す姿なり

しげる

と云うように、自然の写生ではあるが擬人法によつて人間臭を歴然と出しているのである。しかもそれは単なる自然の詠出ではなく、そこには批判があると云うことである。その点が俳句に比して詩情に乏しいとか、理窟ッばいとか称せられる所以である。

しかし、川柳が批判詩であると云う点に対して俳人、柳人共に特別の理解を持たない限り、今日一部の俳句と川柳が非常に接近しているという事実をどう区別することも出来ないであらう。

句会の在り方

(一) 句会

作句の練習と作家の親睦を目的として句会が催される。作家数の多寡によつていろんな句会となる。

五、六人から十二、三人位が集つて句作するのを小集と称している。これは人数も少ないし、経費の關係からも、会場は大抵、幹事や会員の宅などを利用して開催している。小集は作家が作品に就いて意見を闘わしたり、親睦を図るのに適している。

それ等の会が盛んになつて、人数が増えたと、会場も神社の社務所や寺院の広間などを借りて毎月一回例会を催すようになる。これ等の句会は簡人的にハガキで通知することになつてゐるが、句報や新聞の催し物欄などでも一般に知らされる。

句会当日になると、主催者側の会の幹事数名等が一、二時間前から会場へ集つて、会場の準備にかかる。先ず受付を設ける。これは出席者名簿へ住所氏名（大てい姓と雅号）を記入させるのと会費を徴収するためである。会からその月発行の句報や柳誌が刊行されている場合には、矢張り受付でそれを頒布する。受付以外には句の披講や講演の出来るように、会場の正面に演壇を設ける。寺院のように坐れる座席だと、それへ座布団を敷いたり、灰皿を並べたりする。それから、兼題や席題や柳話や句評などの貼り紙をする。兼題と云うのは句会案内を出した時に発表されている題であり、席題と云うのは当日出席した時に出されている課題である。柳話は大てい主催者側の先輩がやるが、他から大

家を招くこともある。それから、各題の句数や句の締切時間なども貼り出しておく。斯うした事務的なことはすべて幹事が世話する。勿論会場の入口に、筆太に、何々川柳会会場の貼り札もする。特に提灯なども吊つて会場が道路からよく見えるようにすることもある。入口から会場まで距離のある時には矢印で方向を示すなど一般の会と変らない。

席題の締切時間が来ると、句会幹事が立つて、「席題を締切ります」と云う。その声につれて、出題の数だけの句会幹事が一人一題ずつ集めて廻わる。中には句会幹事が集めず、正面に備付けた各題の箱へ作者自身が入れに行く方法を採っているところもある。そして幹事が集めた句箋（一枚に一句ずつ記入）は同一作者が重なっているのをよくつき交ぜて、選者の手に渡すのである。兼題、席題の選者が選句している間に、時間の空白が出来るので、この時間を利用して柳話なり句評なりをするのである。選句が出来たら、貼り札の席題選者の下位から順次選句を発表することになっている。これを披講と云っている。席題の披講が済むと、同じ方法で兼題の披講を行うのである。披講が全部終わった幹事が閉会を宣するのである。賞品は各題の披講が終る毎に簡単に幹事の手から渡す場合と、全部披講が終つてから皆の観ている前で先輩から一人一人に渡される場合がある。

斯うして句会が毎月繰返えされるのである。一句も抜けないと、それきり出席しない作家もあるが、初めから抜けることを期待することは無理である。はじめは抜けなくても根気よく出席すれば必

ず抜けるものである。句箋は裏面に雅号を記入しておくが、雅号を見て選句する訳でないから二十年も三十年も作句している作家の作品が多数抜けるのは当然なのである。同一の課題で作るのであるから、それ等先輩の句に熱心に耳を傾ける必要がある。それらの句の中には必ず自分と同じ着想の句が一句や二句は出て来るものである。それ等の句と自分の句とを比較検討して見たならば、表現技巧の上に巧拙の差を発見するに違いない。句会では手を取つて教えを受ける訳にはいかぬが、斯うしてみずから会得するのである。しかし、同席した作家に親しくなれば、没になつた句の批評を聴く機会が作れるのである。その点から云つて句会へ出席することは怠つてはならない。

大たい句会は以上の方法で行われるのであるが、時々何々川柳大会と称して特種の会を催することがある。何々社の創立何周年記念川柳大会とか、何々氏の還暦記念川柳大会とか云うのがそれである。その外観光川柳大会や市制何十周年記念や町村合併祝賀記念川柳大会や市民文化祭川柳大会と云つた多少政治に結びついたような大会も催されるが、観光関係や役人の出席があつて、それ等を代表した挨拶があるのと、賞品の寄贈が、その方面から出される位のもので、会そのものの開催方法は大会の形式によるのである。大会の形式と云うのは多数の柳人が集るので、司会者が出来、開会の辞を述べたり、挨拶があつたり、閉会の辞を述べたり、柳話が講演となつたり、記念撮影があつたり、大げさに賞品授与を行つたり、閉会後有志懇親宴が催されたりするのである。懇親宴はそのまま其の会場で

催されることもあるが、料理の關係上多くは第二会場に移すことになつてゐる。

この外に、観劇句会や吟行や職域の会などがある。句会の方法は大同小異である。観劇句会は親しく語り合う時間に恵まれないので極く親しい柳友が小人数で時折催す位のものである。吟行は主として春秋のような氣候のよい時に催されるが、行つた先の雑観を作るのが普通の句会と違つてゐる位のものである。職域の句会は選者として川柳の先輩を招き、その指導の下に開催することになつてゐるが、これはその職域に於ける文化部の一科目で教養と懇親を目的とするものである。

句会の会費は一定していない。小集などは会費そのものは無料で句会の経費は幹事が一人又は数人で引きうけるのが多い。有料会場で開催するようになると幾らか会費をとることになる。それは句会の会場費、句会の案内状（多くはハガキ）、その印刷費、賞品費其他の雑費を要するからである。しかしなるべく多数出席者のあるよう、会費は出来るだけ低額にするので、会としては多くは赤字である。それでも非常に楽しいのである。

(二) 句報

句報と云うのは句会で抜けた句を、句会後に幹事が整理して印刷に附して句会の出席者や同好者に頒布するものである。多くはガリ版であるが活字印刷のものもある。これ等の句報には句会の作品の発表の外に次の開催日や兼題や締切日や会員の消息特に慶弔などが報じられている。紙面が許せば

先輩や会員の雑誌や随想などが掲載される。句報の部数が少し出るようになると、柳誌の形態になり易いが、柳誌として刊行するようになると大てい永続性がない。第一は経費で行き詰まる。経費はどうか一人で赤字を負担するとしても、原稿が集らないので三号雑誌で終るのである。作家の眼が次第に高くなるので良い原稿（投句も）の集らない柳誌は主宰者の自負するほどには展びないものである。主宰者が常に経営に没頭するために、よい指導者が無くなり、作家の不満を買うのも不振の主因だと云えよう。会が句報を持つと云うことはいいことには違いないが、絶えず句のレベルの上昇に意をそそぐ必要がある。

選に就いて

選ということは句会でも行われるが、新聞柳壇や雑誌の柳壇でも行われる。専門柳誌でも特定の選者で選が行われることは云うまでもない。句集などは自分の信頼する先輩に選を請うか、或は自選で刊行している。

選には自選、簡人選、共選、互選の別がある。自選とは自己の作品の良否を自分で選むことである。しかし選のうちでは自選が一番至難である。簡人選と云うのは特定の簡人に選を請うことである。特定の簡人と云つても柳歴の浅い人でないことは云うまでもない。選は誰でも出来るが、作品に

對する卓見を持たない選者の選は無意義である。共選は二人以上の特定の人達によつて同一の句を選ぶことである。互選とは句の価値批判を特定の人に一任せず出句者相互で選することである。

選と云うことは案外簡單に行われているようであるが、多数の句の中から優秀な作品を選び出すこと、即ち句の正確な価値批判をすることであるから、なかなか容易なことではないのである。選者は多年の経験と非凡な選者眼の持主でなければ完璧に近い選は到底なし得ないものである。明晰な選句眼を持たない選者の選句は名句を闇に葬つてしまうので、斯界の發展向上をはばむに過ぎないことになる。自分の苦心の作の生死が、そうした選者によつて決定せられることを思わない作家は自分の句を尊重しない作家であつて、抜いて呉れたからいい選者であろう位に考えているようではその作家に前途のないことは云うまでもなからう。

(二) 自選

川柳を作りはじめた人でない限りは自分の作品の長所と短所については、自分が一番よく知っている筈であるから、出来上つた句を一句一句又は一ト纏めにして、自分の批評眼に照らし取捨選択を行う。これを私選は自選と呼んでいる。

自選は前述のような特長があると同時に、一方では次のような欠点が伴うものである。

誰しも人間には、自惚と云うものがあるから、作つて間のない句に対しては第三者的立場で取捨選

択を行うことは頗ぶる至難の業である。それ等の作品を一々読みあげて見ても、これはダメだと思う句は至極僅少であつて、まあ、これならば飛び切りいい句だとは云えないかも知れないが、兎に角発表することにしよう、と、棄て惜しみをすることである。

そこで、他人の句を選る場合には、相当厳選し得られる人でも自分の句に対してはかなり寛選になる惧れがある。もしそうした場合に自分の句を用捨なく棄てることが出来るようになれば自選と云うことはいろいろな選のうちで一番理想的なものであらう。しかし、それは決して容易なことではない。大ていの場合自選をすると右に述べたような弊に陥入り易いものである。中には自分の簡性のよく出た作品を棄ててしまつて、平々凡々の作を選む作家さえある。比較的誤りの少ない自選の方法はどうしたらいいかと云えば、作句した時、ただちに自選を行わず、一日か二日ぐらい経過してから自選をするのである。この方法によると、作句した時ほどに、アバタもエクボには見えないもので、類句がありはしないかと云う点にまでも注意が払え、人によれば第三者的立場から選をすることが出来るものである。それは作句した時の苦心が幾分薄らいでいるために比較的正確な批判によつて容易に句を棄て去ることが出来るからである。

自選と云うことはザツと右に述べたようなものであるから極く初歩の人には不可能であるが、多少句に対して眼が出来たら誰でもやれるものである。又自選は必ずしなければならぬものである。折角

作つた句を自選でピシピシ棄ててしもうのであるから無闇な句は作らなくなる。誰でもムダ骨を折ることは好ましいことでないから、作句する時の態度が自選によつてスッカリ変つて来る。一句一句を自選しながら句を作る。そして出来上つた句から更に自選をする。その結果は自選と云うことを少しも考えずに作つた当時の作りつばなしの句とは一段とレベルの高い作品が出来上ることは云うまでもないであらう。

よく句会の席上で見かけることであるが、多数にさえ作つて置けば、どれかが抜けるに違いないと云う考えから、無闇に濫作をして、選者泣かせの句を多数に作る作家があるが、それ等の作品には川柳の常套語を使つて、片つ端から川柳の格好をした句を沢山作つてゐるのに過ぎなくて、特色のある句、考えさせられる句、敬服に値する句と云うものは一句もないのである。これでは作句の職人であつて作家とは云えない。たとえ数の上に於て多数入選したところで、その作家として簡性のよく出た優秀な一句には及ばないと云うことに考えを及ばさなければならぬ。ところが多くの人達はそう考へず、唯席上でたとえ一句でも多数に入選させようと云う薄つぺらな名譽慾から、甚しい人達になると選者当込みの句さえも作つて得意になつてゐるようだが、これぐらい大きな誤りはないと思う。

自分の特徴を棄てて、選者当込みの句を作る人達は選者の代作をしているのと何等変らないのである。しかも選者より拙い句を作つたとしたならば、何んのための作句であるかが判らなくなつてしも

う。

兎に角、句会の席上で選者当込みの句を作つたり、どれか抜いて呉れるであろうと云う籤でも引くような氣持で、濫作をそのまま出句することは慎しまなければならぬ。先ず自分の作つた句に対して自選をして、自信のある句だけを出句するようにしたい。

それから席上では、多数の人が集まつているため、時間の都合や、選の都合で句数を制限する場合が多い。その場合、与えられた時間内に制限された句数が出来ても、時間に余裕さえあれば矢張り作句を続けて欲しい。三句と制限してあるので、三句作つたから最早自分の責任を果したような氣で、不必要なことを喋べつたり、ボンヤリしていたりする人たちを見うけるが、作句は決して事務ではないから、三句と制限されたからと云つて、必ずしも三句さえ作れば、その句が、よくても悪くてもいいと云うものではない。しかし句数が制限されてあるにもかかわらず、制限された句数以上に句が作れたからと云つて、その全部を出句することは句会道徳に反するのである。句数に制限を附すると云うことは司会者の方に必ず都合があつてのことであるから、その点に考えを及ばさねばならない。それを甲が無視すれば、乙も又無視して遂には句数制限と云うことが無意味となり、司会者に対して出句者の思いもよらぬ迷惑をかけることがあるのである。

この場合にも又自選ということの必要が起る。制限時間内に制限以上の句数を作つた場合には予め

自選して制限句数にする必要がある。作つて間のない自分の句に対してそうすることは、かなり苦心を要するものであるが、それは何人も経験するところであつて、その苦心あつてこそ、始めて真に自分の句を見つめ得るようになるのである。斯うしたことを繰り返しているうちに、自己の特徴をますますハッキリと知ることが出来るから、自選と云うことは決しておろそかに出来ない。自選が充分に出来るようになれば、他人からの句の選を頼まれた場合には余程冷静な態度で選が出来るようになるものである。

句会の席上で、自分の出句した句を忘れてしまつて、自分の句であつたのか、他人の句であるのか判然しないため、筆蹟を見せて貰いに立ち上つて披露席まで行く人を稀に見うけるが、これなどは兎に角作りつばなしのいい標本であつて、作つてしまつた尻から自分の句を忘れてしまつてゐるのである。斯うした人達はもう少し自分の句を凝視する必要があるとはいはないか。

同じ句を数回繰り返して自選すると、最後に一句も採れなくなり皆棄ててしまう場合があるが、網には必ず魚がかかっているとは限らないのであるから、数回自選して採る句がなくなつた場合には潔くみんな棄ててしまうだけの勇氣を持たねばならない。そうした苦心を繰り返しているうちには川柳と云うものが、ハッキリとのみ込めるようになり、遂には自分の句をしつかりと掴むことが出来るのである。

折角作つたのであるからという同情は自分の句に対しては特に不必要である。

(二) 簡人選

ある特定の人に、その句の価値批判をゆだねることを私達は簡人選と呼んでいる。簡人選は多く、そのグループの先輩がすることのならわしになつてゐるが、選する人の人格や社会に対する知識の深淺、川柳に関する研究範囲の広狭等によつて、選まれる句風が余程違つて来る。

従つて簡人選の場合にはこの選者が、どんな選者であるかを一ト通り知つておかねばならない。折角特異な句を作つても、それ等の選者と傾向を異にする場合には全く闇から闇へ葬られてしまう危険が伴うからである。

しかし、自選の力を持たぬ作家は簡人選に一任して、自分の句の良否を篩にかけてもらふ必要がある。そしてこの篩が自分の句の方向を決定するのであるから、良い選者を持つと云うことが作家にとつては第一条件である。

要するに簡人選は選者の如何によるものであるから、自選と比較してその優劣を決める訳にはいかない。

(三) 共選

共選とは句会や誌上で二人以上の特定の人達が同一の句の選をすることである。この場合には選者

の選み方がどんなに違っているかが一目瞭然とするわけで、単に出句者が教えられただけではない、選者自らも教えられることが多いものである。

この共選の方法には、共選者が選んだ句を合併して発表する方法と、単に同一の句を選ぶと云うだけで、箇人選と同一の形式とする共選との二つの方法があるが、私は後者の方法が出句者も選者も共に参考になる点が多くていいと思う。前の方法だと単に二人以上の眼を通過するために特異な句を見落すことが少ないと云うだけであつて、選者の側から云えば自分の共鳴しない句まで選まれて発表される云う欠点があるのである。選の価値に至つては箇人選の場合と同じように、選者の人格、選者の社会に対する知識の深淺、川柳に対する研究範囲の広狭などによつて決定することは云うまでもなからう。

(四) 互選

互選とは、句の価値批判を特定の人に一任せず、出句者相互が選をするのである。その方法としては、

(A) 席上互選

(B) 清記互選

(C) 誌上互選

の三種別に別つことが出来よう。

(A) の席上互選と云うのは誰か幹事の一人が集句を披講席から一句一句読みあげ、共鳴者が、その句に対して「頂戴ッ」と発声する。そして共鳴者の頂戴数だけ、その句箋の上部に○印か✓印を書きその印が五つあれば五点句、三つあれば三点句と云うことにして高点を競い、高点の順位によつて新聞や雑誌に発表する標準とする方法である。勿論この方法にはいろんな欠点に伴うので、現今ではあまり行われない。稀に用いても、みなが集まるまでに早く来た人達のために一題互選の課題が出る位なものである。

(B) の清記互選と云うのも、句会の席上での互選法の一つである。これは多数の出句を幹事の一入又は数人が、幾枚かの用紙に無記名で清記し、その各句の上に番号を附し、出席者全員に廻覧せしめ、各人は各自の選紙に自分が佳作と信ずる句を記入して、幹事に渡すのである。幹事は選句された用紙を全部受取ると、選句を発表して採点する方法であつて、選句するのに長時間を要するのと、甚しい手数がかかるので川柳の会では稀にしか行われない。小集などなら兎も角多数の出席者のある句会などには適しない。

選に就いて

(C) 誌上互選と云うのは、雑誌などで出題し、集つた句を全部誌上で発表し、各句の上部に番号を附しておき、各出句者に互選せしめるものである。これは遠隔の人達が誌上で句会をしているのと

同じ形式であるから、一寸面白い方法であるが、それ等の集句の中には随分いかがわしい駄句も多数にあるので、誌面に限りのある雑誌などでは殆んど行わない。ただ一部の人が孔版で誌上互選をしているに過ぎない。

席上互選の欠点は選句の標準が乱れ易いことである。殊に頂戴選の如きは調子によつて釣り込まれて、それほどでない句が高点句となることがあるじ、深く考えて見ないとその句の味が充分に判らないような句は往々にして落選すると云うようなこともあるので互選は民主主義的だというような言葉はこの世界では当て嵌まらない。

暗合と類句

(二) 暗合

句会で披講の際に、一つの句に対して二人の句主が表われることがある。その時には句主の一人に句箋を示し、筆蹟によつて真の句主を決めることにしている。不幸にして選者の手に残らなかつた方の句主の句は没となる。同じ句でありながら、一方が抜けて、一方が落ちると云うのはいかにも片手落ちな感じがするが、こんな場合に没になつた方の句主はアッサリ引下るのを常とする。よく調べて見ると一字や二字違っていることもあり、一字違つても、充分没になるだけの優劣のつく句もあるの

であるから、句主が二人表われたからと云つても、あながち選者の手落ちとばかりも云えないのである。一字も違わない句に句主が二人以上表われることは句会の場合に限らない。新聞柳壇の選句や雑誌の応募句の選などをしていると、たびたびぶつかる問題である。そうした同一の句を指して、暗合句と称しているが、一般の新聞や雑誌の場合には暗合でなくて、他人の句を剽竊して投句して来る場合もある。しかし永年選をしていると暗合と剽竊との区別はたやすく見分けることが出来るものである。古本屋が、自分の本を売りに来たのか、万引した本を売りに来たのか、すぐ見分けがつくのと一寸似ている。専門の柳誌になると剽竊句などはないが時に暗合することはある。暗合は雑誌にくらべると題詠の方に多いようである。多いと云つても、無闇矢鱈に暗合するものではない。

大正六年四月一日の句会で「人」という題詠に三人の句主があらわれたそうである。どんな句かと云えば、

太陽は無駄に光れり無人島

と云うのである。大した句ではないが、想像力が生んだ句が期せずして合致したのである。句主は郁男、三太郎、紅太郎の三人で剣花坊派の錚々たる連中である。

又、

真スグにあるけば人に突き当り

と云う句は十千棒、劍珍坊の二人の句主があらわれている。一つの句会で、こんなにも暗合するとは珍らしいことである。これは「人」と云う題が出れば斯う云う句をと云う碁や将棋の定石のようなものが、いつとはなしに句主の頭に出来ているからであろう。それが証拠には、それ等の句主が何れも当時の猛者連であることである。あまりに安易に句を作ること、所謂定石的な句を作るから斯うした結果をまねいたのである。しかし原因はそればかりではない。川柳それ自体が、僅に十七音字の短詩型であることと、句主の頭のレベルが、近似していると云うことが大きな原因なのである。川柳の十七音字中心に当分動きがないものとすれば、句主は思想の隔絶によつて、表現技術の妙味によつて、そうした暗合から回避するより外に手はないであろう。

こしらえて後から食べて片附けて

演算子

こしらえてあとからたべてかたづけ

竹 莊

の二句が、漢字交りと仮名ばかりとの相違はあるが暗合しているそうである。これはまだ事実を発表誌によつてたしかめてはいないが、事実とすれば前者の句は昭和十五年の作であり、後者の句は昭和

二十二年の作であるから後者は潔く取消すべきである。暗合は句会での暗合のように、同時に同一の場所で作句されることもあるが、時と所を異にして作句されることもある。時には古句とも暗合することがある。しかし暗合に似て暗合でない場合のあることも知らなければならない。それは先輩や柳友の佳吟をあまりに熱心に読んだために、他日自己の作品の中に、そのままの句があらわれて来ることがある。これは作家としては余程注意しなければならないことである。そんなことがあると、その人の品性を疑われ痛くない腹を探ぐられるからである。何れにしても自分の句が暗合した場合には作句した実際の時日は別として後日に発表した句主は潔く自己の句帳から抹殺すると同時に、他に對しては適当な方法で取消しておくことである。

(二) 類句

暗合というのは内容も形式も全く同一のものとなつた場合のことであるが、類句というのは、内容の類似、形式の類似、内容形式共に類似した場合の謂いであるから形式が非常に近似していても、内容が全く別箇のものを表わしていて二句とも生かして差支のない場合もある。その意味から、選者によつては類句として取扱ひ、二句の中の少しでも佳吟だと思ふ方を一句生かす場合と二句とも捨ててしまう場合があるが、選者によつては類句として取扱わないで佳吟だと思えば二句とも生かす場合もある。従つてそんな句に接した時には選者は余程慎重な態度で、それ等の句を選しなければ、類句で

ないものを類句とし、類句を類句でないものとする誤りを侵すことになるのである。

句会での作品のように、同時に作られたものを選ぶ場合や、投句のように同時に作られたものでも、同時に選をする場合の類句の発見は、それほど困難ではない。しかし、それらの作品と、時を隔てて作られた作品とが類句であるかないかを発見することはなかなか難事である。選者として古句は云うまでもなく、近い過去の作品がある程度眼を通していなければならぬからである。殊に川柳に限らず、短歌や俳句のような他の短詩型に対しても、有名な作品は一応眼を通していないと飛んだ失敗をするものである。

作家としては類句を惧れていては全く手も足も出ない訳であるから、類句と知らずに、かなり多くの類句を作るものである。そしてそれ等の類句をいかにさばいて行くかが選者に与えられた仕事の一つなのである。選者としては、それ等の類句中から、佳吟一句だけを残す場合もあるうし、類句全部を捨ててしまう場合もある。類句と知つても、一句でも採る場合は、その作家が全く初心者であり、これを育てて行かなければならぬ場合に限られる。初心者が多く集つてゐる会で、レベルを落して選句をすれば、その多くの作品は過去の作品の類句であることはまぬがれ難いのである。しかし、いつまでもそうした選をしていれば作家はそれでいいのだと思つて、駄作を繰返し、類句を繰返えして遂には救ふことの出来ない結果を招くことになるから選者としての苦汁を嘗めなければならない。

では、どんな句が類句であるかを例示することにしよう。

こうなされませと死人の掌を合せ

荷 十

いいところへ参りなさいと手を組ませ

湧 三

用いた語彙はかなり違つているが、ねらいどころは殆んど同じだと云わねばならない。しかし、この程度の句を発見した時に、一々これを取消しては煩瑣に堪えぬものがある。そこは世の中はうまく出来ているもので、幾ら類句が詠出されても、その中での佳吟しか人の頭には残らぬものである。人口に膾炙している句でも、幾十幾百の類句が生れては死に、生れては死んで、その句が只一句だけ生き残つたのであるかも知れない。そうでないとは誰も保証することが出来ないのである。

花、花、花、人世の表

七ツ丸

死、死、死、世界は無い

剣花坊

この種の類型的な表現も一種の類句だと云えば云えないこともない。しかも格言類似の句であつて本来の川柳から遠く離れた句である。しかし、斯うした類句が生れる点から考えてもマンネリズムから遁れようとして新らしいマンネリズムに陥つていた剣花坊派の当時の句風が想像出来るであらう。「花、花、花」の句と「死、死、死」の句の二句を比較して見るのに、同一の文字は一字もないが、

しかも類型的な句として両立させることを躊躇するのであるが、次の二句、

白粉の下は光陰矢の如し

史 城

風呂嫌いげに光陰は矢の如し

紋 太

の如きは同じく類型句であり、一句中の半ば以上が同意義、同語彙でありながら、句の内容を検討すると、前者は白粉を通じて人生の無常迅速を詠い、後者は単に一市井人の生活を詠つて、それぞれ異つたものを描出しているの、確然と両立させることが出来るので類句だとは云えない。

句会の句にしても、柳詠への投句にしても、出句数の約九〇パーセントは没と見ることが出来るが、それ等の九〇パーセントの没の中で、技巧の拙劣さや内容の陳腐さ等々で捨てられる句よりも類句としてキャンセルされる句の方が遙に高率を示す場合もあるのである。類句おそるべしと云いたい。要するに、作家の行くべき道は絶えず類句を踏み越えて、作家独自の世界へ進出するのでなければ一家をなすのに甚だ遠いと云わなければならない。

推敲の仕方

いい想が浮んで、たちどころに一句出来たと仮定する。それが名句だと申分がないのであるが、折

角句に纏めては見たが、表現技巧が拙いために、自分の想と表現とが巧く合致していない場合と、殆んどそれに似た表現にはなつていても、も一つびつたりしない場合がある。

常に多読多作をしている作家は句の構成が想即表現に近い状態でまとまるものであるが、そうでない人達、殊に初心者にとつては、想と表現との間に思いもよらぬ隔りが出来るものである。従つて、出来上つた句をよく検討して最後の仕上げをしなければならぬ。この仕上げを私達は推敲と呼んで居る。俳聖芭蕉は推敲のことを「言葉を正す」と云つて居る。句が平言俗語で構成されていても、それが最適の表現になつていたら、言葉を正したことになるのである。推敲と云う言葉は詩の上で昔から慣用されている言葉で、杜甫などと云う詩人はあまりに推敲に凝りすぎて、そのために瘦せていたと云うことである。川柳家でも、日車などは鏤骨彫心と云う推敲をしていた。彼の句が実に輕妙であり、幽艶であり、何んの苦もなく生れ出たように感じられるのも、彼の天稟の資質以外に推敲のたまものだと思う。「雪」時代の彼は句帖を携えて毎日のように私を訪れ、その推敲ぶりについて私の意見を徴したものである。そして更に推敲を重ねていた。彼にしてそれはどの推敲をしたのであるが、近ごろの作家はどつちかと云えば作りッぱなしの句が多く、所謂推敲をしていないようである。名句を得られない原因の一つに数えることが出来る。

推敲と云うことは句に限つた訳ではなく、文章でも推敲の必要は大いにあるのである。それは同じ

事を表現するのに幾通りも手法があるからである。例えば僕と彼の女との愛情の關係に就いてでも次の六通りに表現することが出来るのである。

(A) 僕が彼の女を愛した。

(B) 彼の女を僕が愛した。

(C) 僕が愛したよ、彼の女を。

(D) 彼の女を愛したよ、僕が。

(E) 愛したよ、僕が彼の女を。

(F) 愛したよ、彼の女を僕が。

以上の例から見ても最も力強く表現するには、どの手法が最も適しているかと云うことを決定するのが推敲なのである。

句に於ても、矢張り語や齣の配置轉換によつて推敲を行うのである。例えば句屑の中から、

薄情な人と出逢つた戎橋

と云う句を拾い上げ、もう一度読み返して見よう。この句は平叙法の句であつて、このままではピンと来ないので、戎橋の下五を上五にして、

戎橋薄情な人と出逢つたり

とすれば、表現の上に幾らか強さが加味されて、その場の情景が前句よりも躍動する。しかし、それは語齣の配置転換によつて、幾らか句の価値が上昇したと云うに過ぎない。では斯うした語齣の配置転換によつて句の価値が上昇したから入選したかと云えば矢張り没にされたのである。それは推敲をしなかつたからではなく、内容が既に云い陳るされていたからである。しかし、例え没になろうとも一応推敲して見るだけの努力はあつて欲しいのである。更に語彙の選択、語齣の短縮や延長によつて、意外な佳吟にならぬとは断言出来ないものであるから、この句意をどうしても生かしたい場合には更に更に推敲に嚮心する必要がある。

わが娘廿四になりハツとする

と云う句が仮りに出来たとする。これだけでは父としての悩みは判るにしても、表現技巧が幼稚なので、力強さが物足りない。ジツと味つて見ると、何んとかなく物足りなさを感じさせられ、文学的作品としての川柳にはなっていない。そこで、

思わざりき娘が廿四にもなり

路 郎

と倒置法の句とすれば前句よりもグッと句の価値が上昇する。つまり「ハツとする」が「思わざりき」となつたので一段と句意が強められた訳である。「わが娘」の「わが」を棄てても、わが娘であることには変りがない。そして「廿四になり」を「廿四にもなり」と「も」を入れただけでも、父の驚き、父の悩みを強めるのに役立って居る。字酌の選択はこの点から考えても推敲上に重要さを持つものである。

推敲は句の調子をよくするものであるが、調子が悪くなつたために、句の面白味が失われることもある。例えば静観堂の、

いつそちぎろうかシャツのぶらぶら釦

のような句は、七音、三音、七音という類例の妙な語酌の配置がかえつて、この句を生かしているのであつて、これを推敲の結果、五音、七音、五音の句に纏めあげたら、至極平凡な句になつてしまうだろうと考えられる。一概に推敲と云つても内容を無視して、調子や字酌の推敲にのみ腐心して、句そのものの内容を凡化させてしまつては句の生命を失つてしまう。

推敲に際して字酌の選択と云うことは難しい問題で、その句を生かすのに、最適のものを選まなければならぬ。句は荒けずりのままの表現の方がかえつて味があつて面白い場合もあれば、細心に、

繊細に、磨き上げた壁のような句とすることが、最高至純の名句となる場合もある。推敲を完璧なものにするためには、常に同意語や類似語について知っておく必要があるし、特に語彙の豊かさがなければならぬので、少しでも疑義があれば辞書をひいて語彙の的確であることをたしかめる必要がある。

句品に就いて

古句に、

持参金よくよく見れば鼻もあり

辨慶と小町は馬鹿だなア嬬

添乳して棚に鯛がござりやす

と云うような句がある。こんな句品の句があるので十把一ト括げに川柳は下品だなどと、まことにありがたくない批評をうけるのであるが、多くは下品な狂句の濡衣なのである。古句にしても、

松の内麻上下の袖だたみ

淋しいも秋おどろくも秋の空

神代より日月今に地におちず

のような上品な句もある。

昔は句品を高番、中番、末番と称していた。高番とは選句形式で巻頭からの数句で何か改まつたことを詠んだ上品な句で、末番は破礼句^{ハレレ}のことで、その他の世態人情を詠んだ句を中番と云つたのである。川柳は平言俗語で詠まれ、社会性を帯びていたので勢い上品でないように云われたのである。上品だと云うのが、和歌のような貴族趣味、古典趣味の謂いであれば、平言俗語で表現される川柳が下品視されたのもいわれのないことではない。しかし、貴族趣味、古典趣味、上品な句が必ずしも文芸的に優秀な句であるに限つたわけではなく、平言俗語で表現しても、芸術的な句の高い句が出来ないわけではない。現在、雅言とされ、上品視されている万葉の如きも、その当時の平言俗語であつたことを思えば、平言俗語で表現したから川柳が下品だと云うのは当たらない。要はそれ等の平言俗語がいかにか的確に駆使されて、その句を価値づけているか、いないかにある。

試みに今人の句から抄出しても、所謂上品な句はかなり沢山ある。

月見草地球は丸いものらしい

かほる

涙よなぜにまろきか

愚陀

月あれど山あれどいま君は亡し

善哉

かなしみ多く夫人は歌をよみならい

丹路

夕桜とんばがえりがしてみたし

路郎

内容的にも修辭的にもこれ等の句の何処に下品さが見出し得られよう。しかしながら、川柳のすべてが斯うした句品でないことも云えるのである。それは何んと云つても川柳の構成が平言俗語であるということに起因すると云えるであらう。

ある人の著書を覗くと句品と云うことをモラル的に解釈し、風儀の悪い句をつくらぬようにと述べていられるが、句品を論ずるのも芸術の立場からであつて、モラルの問題でないことを知らねばならい。

やわ／＼と重みのかかる芥川

は、業平が二条の後の若い頃に盗み出して落ちのびる際、芥川を闇にまぎれて徒歩^{かち}渡つた時のことを詠んだ句であつて、モラルの面から云えば、風儀のよくない句、即ち下品な句だと云わねばならないが、この句などは芸術上官能的な句として敬服に価する句なのである。川柳の多くは現代の平言俗語

で詠まれ時代性をハッキリ描出するのであるから、勢い貴族趣味、古典趣味の表現とならないのは寧ろ当然なのである。それだけに、一面句品の問題を超越して社会性のきびしい批評的な句によつて、川柳のよさを發揮していることをその特徴として見落してはならない。

中には雅言で詠うことによつて、句が上品になるものと考えている人たちもいるようであるが、それは徒らに古語のさびに眩惑されているに過ぎない場合が多い。

校門よ久し六月みなづきの空晴れぬ

× ×

が、それである。作者は上品な川柳を作っているつもりかも知れないが、私たちはこれを川柳としてうけいれることが出来ない。

これからの川柳に句品のレベルの高いことはのぞましいことであるが、句品が高いことによつてのみ句が秀れていると云う錯覚に陥入つてはならぬ。

風格に就いて

句のそれぞれに句品があるように、同一作者の句には一貫した作者の性格が流れていて、その作者に対して特に親しみを感ぜられるものである。そうした特定の作者に附随した性格を指さして私

は作者の風格と称している、と云つただけでは充分理解しにくいかもしれないが、つまり風格と云うものは作者の性格から発散する持ち味であるから、人間の体臭のようにこびりついて離れない、その人独特の匂いなのである。或はその人の顔のようなものだと云える。大人になつたり、また環境が違つたために、顔貌がすっかり變つたように自分では思つていても、永い間遇わない人に途中で遇つた時に、相手方が声をかけることを思うと、どつかにその人らしさが残つているのと同じように、句にはその作家の風格が存在するものである。

次に解説の便宜上、豆秋のカラーのよく出た句を二十余句列挙して見よう。

降りる客いとのかゝとつづくなり

返事せぬ夫にオーバ着せかける

極道の傘もささずに帰つて来

手ぶらでは鹿も相手にしてくれず

針金ヘグサツと名刺さされたり

ただのよな鉢に毎朝水をやり

いわしいわしなすびなすびの日がつづき

阿呆なこと言うてしもうて淋しけれ

骨立てたまま二次会へついで行く

湿布したままで落選寝てしまい

秋風の中で乞食に拝まれる

火葬場は火をつけてから夕涼

直角に質屋の中へ折れ込んだ

愛犬ボス

けなげにも家主の犬を噛んで来た

元旦だ一二の三で跳び起きむ

むかしむかし稼げば楽になりしとか

出札の穴を覗いてこんにちは

すべつたら丁稚にすると励まされ

ちちははにめぐりあいたや靴みがく

あべの橋たれに買われるうさぎやら

十二月うちへ帰るが怖くなり

清和源氏で闇屋にもなれず

やがてこの自転車も盗られるならん

みの虫のなんぼ伺うても壁だつた

税務署のこんなところに咲く桜

踊つてゐる昨夜質うけした服で

以上の一句一句を味読すると、いかにものんびりとした句、ユーモラスな句、深酷な句、人情味の句、生活の写生句、強烈な諷刺句、皮肉な句、自嘲の句、人間愛の句、動物愛の句等々々、多種多様な角度から作句されていることに気づくであろう。そして、それぞれの句の可否とは別に、それ等の句を一貫して流れているもののあることを知るのである。この作家の場合には、それが人世を遠観した飄逸さである。自己の生活が物質に恵ぐまれないとしても、世間がどうであろうと一切頓着をしないで、のびのびと朗らかに暮らしていると云う態度が歴然と顕現されていることである。前掲の

ただのよな鉢へ毎朝水をやる

の句を読むと、平凡な日常生活をいかにも楽しんでいるさまが感じられるし、

いわしいわしなすびなすびの日がつづき

のような句を詠んでいても、その貧しい食糧に対して何んの苦痛も感じていないことを思われるしむかしむかし稼げば楽になりしとか

と叫んでも、貧しさをすこしもなげいてはいないし、

阿呆なこと言うてしもうて淋しけれ

とは詠んでも、それも云つてしまつたら仕方がないと云う態度しかうかがえないのである。全く淡々たるものである。貧しさを詠もうが、深酷な事件を詠もうが、この作者の句からは一沫のくらさをも感じる事が出来ない。

骨立てたまま二次会へつて行く

の句にしても、骨を立てたという不愉快な出来事でありながら、二次会へつて行くと云う、中五、下五の表現で、忽ちユーモラスな人物の飛躍となるのである。この句など作者自身の体験でないかも

知れぬが、豆秋を素で行つたと云う感じがする句である。

火葬場は火をつけてから夕涼

の句にしても、火葬場で屍体に火をつけると云うことそのものは随分深酷な句として詠まれるのであらうと云う予感を裏切り、下五に夕涼とつけ、まるでとぼけて見せる作者の態度は全く人世を達観した人でなければ能くなし得ない技巧だと云わねばならないであらう。従つて彼の社会に対する反抗にしても、反抗そのものを眺めていると云う風に見うけられるのである。

けなげにも家主の犬を噛んで来た

の句にしても、社会への反抗と云うよりは、寧ろ彼の動物愛の表白の方が強く出ていると思う。

あべの橋たれに買われるうさぎやら

の句によつても、彼の動物愛の深さを知ることが出来るであらう。ここに挙げた句の一つ一つを解説することは煩に堪えぬので、この位にとどめて置くが、豆秋の句を通読したならば、右に述べたような飄逸味がおのずと浮び上つて来ることが判るであらう。そして、そうした飄逸さが、この作者の

風格なのである。しかし、風格と云うものが単に飄逸さに限られた訳でない証左に、今ひとり丹路の句を左に列挙して、彼の風格が奈辺にあるかを検討して見よう。

怒りとはさびしきものをもつものよ

冬の風景を我れより先にゆく男

裾ひいて立てば芸者の壮麗な

春なれば春の姿の令夫人

お嬢さんあなた自身が神秘です

サラリーの日割勘定などすまじ

かなしみ多く夫人は歌をよみならい

挨拶のうるさき人が向うから

同じ嘘なら絢爛たる嘘をつけ

存在を無視して上座へ通る足

薄情な男いよいよ運に乗り

物干へ出て女中さん空を見た

妾の子また美しい生れつき

死んだふりして蜘蛛よ淋しがらすな
風よ吹け／＼風の中なるひとりばち
ひしと抱き寄せるもの子の他になし
私は商人まず／＼酌きましよう

けだものの争うごとき恋やせむ

花嫁は昔ながらに手をひかれ

いつ果つるともなく朝の靴をはき

一生をかけた会社の椅子にあり

のど自慢そんな世界もあるのなり

そも／＼の嘘の初めのゴム乳豆

この作者の句を通読してうける感じは人世に対する一沫の淋しさが一貫して流れていることである。そして何処までも嘘の嫌いな、真実探求の性格が反映している。これがこの作者の風格である。

この作者の句には前の作者のような飄逸さは微塵も見られない。ある種の諷刺は持つているが、皮

肉さは内包していない。

挨拶のうるさき人が向うから

の句にしても、作者は皮肉の観点から詠出しているのでないことが、何んとも感じられるのである。この作者は

怒りとはさびしきものをもつものよ

や、

そもくの嘘の始めのゴム乳豆

のように、人間心理の探求には、他の人々の追隨をゆるさない鋭い眼を持つていることを感じさせられるが、真実性をつきつめて行くところにひとりぼっちと云う感じが、どつかにつき纏うて居る。

斯うして豆萩、丹路の二作家の作品を対比して見ても、その作品から醸し出す風格が非常にかけ離れたものであることが知られるであろう。風格と云うものは、その人その人によつて斯んなにも違うものである。そこに作家としての生命があるとも云えるのである。常に標語に類するような句を作つ

て、それが所謂川柳だと思い違いしている作家によい風格が生れる筈がない。

多くの作家はその人によつて心境も違えば環境も違うので、一人一人が異つた風格を持つものであるが時には類似した風格の作家のいることもあるであらう。しかし嚴密な批判の下に置けば類似した風格の作家だと思つていても、その心境や教養や環境の相違から、どこかに異つたところを発見するものである。例えば豆秋に似た飄逸さはあつても、人間愛に欠けているとか、しんらつさの濃度が強いとか、句の表には飄逸さがあつても、その人の日常生活から来る暗さや蕪雜さが、天衣無縫の飄逸さとなることをさえぎつているとか云う違いがあるものである。要するに風格は人によつて少しずつ違つているものであり、そこに風格と云うものの面白さがあると云えよう。

川柳の味い方

腐るからこれも喰べとく肥りよう

梨 里

面白い句であるが、アハハと単に笑つてしまえない深い味を持つている句だと思う。でつぷりと肥つた主婦が台所の隅で、タラタラと汗を流しながら食事している姿が眼に浮かんで来る。この句などは冬に味読するよりも、夏に味つた方が、一層ピンと来るのではあるまいか。上五の「腐るから」が特にこの句に季感を賦与していると思う。腐るから喰べとく女性心理と、腐つたら捨てたらい、喰べたいだけ喰べたら残しとく男性心理をハッキリと、この句から感受させられるのも面白い。

辛じて住む東京をうらやまれ

白 星

新聞や雑誌やラジオや映画を通して見る東京生活は羨望的であり得るが、サテ實際生活はどうかと云うと、この句が描出しているように、辛じて住む東京人があまりにも多いのではあるまいか。この句主も曾ては、憧れの的であつた東京だつたのであろうが、遂にかくは喝破したのである。

中 陰

亡き母の煙管を持てば詰り居り

鉄 洲

母を喪つた人生の寂びしさは、急に家のうちが広くなる。亡き母がいつも坐つていた長火鉢の前に坐つて見る。そこには母が使い古したキセルが転つてゐる。フト手にとつて喫つて見たが、詰つてゐたと云うのである。ホロリとさせられる句である。「詰り居り」はぎこちない表現ではあるが、それがかえつて淋しい気持ちを導き出しているのである。中陰と云う前書がついてゐるが、これは作者の実感句なのである。

煽風機の代りを妻がまだつとめ

没 食 子

猿股一つで飲んでゐるのを、妻が横から煽ぎくお酌をしている図であらう。夏の情景として庶民階級の家庭では、今なお頗ぶるあたり前のこととされている。「まだつとめ」で男女同権の時代思想を無視したことを諷刺すると共に、それに甘んじてゐる女の平凡な幸福をひそかに謳歌しているのかも知れない。ソヤソヤ、煽がせて満足して居り、煽ぐことによつて愛の深さを味えるとしたら、ハタから兎や角云うには及ぶまい。大いに煽ぐべしである。

名曲か知らねど夜業腹が立ち

無 鬼

夜業の灯はほの暗い。隣りの喫茶店から、シューベルト作曲交響曲第八番ロ短調、「末完成交響楽」が窓のガラスをふるわせる。ああと彼は夜業の手を休めた。寒さとひもじさが彼を襲った。名曲か知らないが、腹のたしには少しもならなかつた。彼の心はイライラするばかりであつた。そして思わず手にしていたペンチを壁をめがけて投げつけたのであつた。斯うした瞬間的な心理の動きを巧みにとらえたのがこの句である。

檀家から帰る尼僧は梅を持ち

稔 一

檀家、尼僧、梅と云う素材で組み立てられた一句が、尼僧の環境を一枚の絵にしている。そこには、らしさと云うものが流れていて、少しも不自然さがない。梅でなくても、山吹でもいいではないかと云う意見が出ないとも限らないが、梅でも山吹でもいいとすれば所謂動く句となる訳だが、この句の場合、梅がピッタリしていることを、よく味わつて見る必要がある。

草月流缺だけでは手におえず

久 子

大ていのことには驚かない女性も、草月流にはタジタジとしたことであろう。「芸術新潮」で草月流の芸術論を読まれたことがあるが、凡人には一寸消化しきれないものがある。「鉄だけでは手におえず」には流石に草月流の宗匠もギャフンとまいらざるを得ないであろう。皮肉な句である。

だが 君 蜘蛛の努力も学ぶべし

粗 影

「だが、君」と談しかけた形式をとっているが、必ずしも相手がある訳ではない。むしろ自分に云い聞かせると見た方が面白い句である。川柳と格言とは違うが、この句などは格言的な川柳だと云えよう。二音、三音、七音、五音の形式が句意を強めていることも見落してはならない。

金のない明治生れは放つとかれ

不 水

既に過去の夢を反芻している明治生れである。資力のない限りは電話一本、机一つの会社でさえ、彼に椅子を与えようとはしない。鏑の来た人間の姿をマザマザと見せてくれた句である。

春だそれッ記者は動物園へ飛び

野 甫

春だ春だ——。ことしは何んの年だ。そんなこと知るかい。動物園へ行きさえすればいいんだ。チャ

ンと準備して待つてくれるよ。「ヘエー、羊の年ッてあんのかい」と云う訳。万事はカメラが片づけてくれる。巧みな穿ちの句である。記者の張り切つた態度が、叙法の上にはとばしつてゐる。

ばい／＼のとても上手な二号の子

珊枝郎

二号の子と云うものは常にオモチャ視され易い。旦那の来ない時の母の手に、或は近所の人の手に――。とても人なつこいのも、母の血が流れているからであらう。ばい／＼ばい／＼と云いながら帰りゆく旦那、母の手へ抱かれて、ばい／＼をさされている、そうした情景が眼に迫るようだ。表現上の技巧にソツがないし、穿ちの点から云つても繊細で適確である。

置き去りの米にポリスの非力なり

麦太楼

列車が停車すると同時に、かつぎ屋に対して一せい襲撃が行われる。かつぎ屋は闇米を置き去りにしたままバタバタと消えて行く。ポリスがアミ棚やシートの下から米袋を引きずり出して車外へ放り出すのに案外非力だつたので、女のかつぎ屋との対照に興味を感じたのである。写生句として面白い。

男臭い部屋ねと窓を開けられる

ひか平

書棚、机、灰皿、万年床。枕許には文春が投げ出されてある。

刀三の句に「恋の疲れズボンを敷いて寝る」と云うのがあるが、「男臭い部屋ね」の句は女の方がいささかまいつているのであろう。人物が躍動している。

酔っぱらつて殴つて欲しい時もあり

牛 耕

「つまらないわね」

「何が」

「何がって、斯うして、あなたと、いつまでも平々凡々と暮らしているのがさ」

「で、どうしろと云うんだ」

「あたし、全くやりきれないの、せめて、あんたが、酔っぱらつて殴つてでもくれればいいんだけど……」

中年を過ぎた女性の心理を巧みにつかんだ句である。

大往生とは弟子達の作り事

弓 削 平

「流石に老僧はエライもんですよ。眠むるが如くに大往生を遂げられました」

これは弟子達が、檀家の人達への報告であつたが、その実、それは弟子達の作り事であつて、老僧の死は俗人と何等変りがなかつたのである。皮肉な句。

大工には素直に動く鋸であり

侃流洞

大工さんがノコを使うと、板ぎれが紙ぎれでも切つてるようにスッスツと切れて行く。素人の手にはギシギシ、ガチャガチャでなかなか素直には切れて呉れない。そこをとらえたのがこの句である。要は大工とノコに限らない、人間も亦使い手にあることを諷刺したのである。ついそこに転がつている材料をうまくつかんだ句。

角帯のことも株式会社なり

巷雨

株式会社の殖えたことは戦後の一つの特徴である。税金の関係から小っぱな株式会社がウント殖えた。角帯をしめているので個人商店だとばかり思っていたのに、ここまでが株式会社かと驚いたのである。「角帯」が川柳の眼だ。

銀行の門燈 やもりが来る暑さ

紫香

銀行、門燈、やもり、なんだか、ジリジリ暑さが感じられる句である。叙景句にしては人間臭さを強烈に発散している処が俳句と違う。

底にたまつた牛乳ちちを勿体なしと見る

水 客

牛乳を飲んだあとのコーヒ茶碗の底に、牛乳がホンの少しばかりたまっている。なんだか、勿体ないような気がして、又茶碗を手にする。それは胃袋へ送り込むにはあまりに少量であるが、たしかにそんな気がする。穿ちと云つてもホントにデリケートな穿ちである。

ざあまずで受けられ舌がもつれかけ

茶 々

心やすい言葉で談しかけたのに、ざあまず言葉で受けられたので、こちらも急にあらたまつてざあまず言葉に転換した。ところが舌がもつれて、うまく談せなかつたと云うのである。喜劇の一場面を見せられているようで面白い。

一周忌遠慮さしたい女が来

文 蝶

亡友の一周忌に、友が生前に愛していた女がやつて来た。焼香する人たちにまじつて女も焼香して

いる。しかし、私たち友人から言えば、今日の列席は遠慮さしたかつた。噂ぐらいは知っていたであろう未亡人の心を乱したくなかつたからである。この句はそうした複雑な心境を詠みつくしている。

悪銭が身につき板につく名士

沐 天

名士と云うのは、代議士でもあろうか。汚職の常習で、いつのほどにか神経が太くなっているの
で、贈賄も収賄も平気でやつてのけるに違いない。

「先生、あの件、なんとかならんでしようか」

「ボクにまかしとけ、なんとかしてやるよ」

「お礼はコレ位出せるんですが……」

と、ユビを一本立てる。

「一千万か。それだけ出せばなんとかなるさ」

「ではお願いします」

「OK」

と、アッサリ引きうけるところも、板についたもの。「身につき板につく」の表現の仕方も巧い。

新課長机の位置を変えただけ

竹 青

新しい課長が来た。出来る人か出来ない人か判らないが、先ず自分の机の位置を変えた。それから部下の二、三人に命じて自分の手勝手のいいように机の位置を変えさせた。そして仕事のことには何も触れなかつた、と云うのである。これだけではなんの変哲もないようであるが、こんな課長がザラに存在することは確かだ。穿ちと云うものは人の氣づかないところにころがつているものである。この句などはその一つだと云える。作家がいかに静かにものを観ているかが判るであろう。

ハテ誰の忘れものかと煽いでみ

梵 鐘

会がハネた。みんな帰つて行つた。あとかたづけをしていると、扇が置き忘れてある。

「ハテ、誰が忘れたのであろう」

と取り上げる。サツと開いて見ると、栖鳳の画である。栖鳳は栖鳳でも、云うまでもなく印刷ものである。それで一寸煽いで見ると云うのが、この句のいのちである。実にうまく捉えている。軽味の句である。

税務署と言えばシャツクリ止まつたり

栞

税務署が来たと聞かされただけでシャツクリが止まつたと云うのである。常に税務署におびやかされてゐる連中にとつてはマジナイよりもよく利いたかも知れない。笑えない滑稽である。

吉田さん三振しても引つ込まず

豆 秋

吉田茂が首相をしていた頃に詠まれた句である。ワンマンだと云つて、いくら国民から悪評されても、幾ら失政を続けようが、ガンとして首相の座を降りぞこうとはしなかつたので「三振しても引込まず」と痛烈に揶揄したのである。野球語の三振が、その失政振りを巧みに表現しているところが、この句のいのちである。

間違いなやと宿題母にさし

花 村

母と子の対談――

「コレ、やつといて」と宿題を母の方へ押しやる。

「あんたが学校へ行つてゐるんじゃないの」

「そりゃあ、そうだけど」

「そうだけど、どうしたの、自分でやらなくつてはいけないわ――」

「頼むから、やつてよ」

「しようがないのねえ。では、コレきりですよ」

と母が根負けをして宿題をすることになった。

「間違いなや、間違うと困るから」と云い云い自分は漫画の本をのぞいているのである。「間違いなや」がよくきいている。「間違いなや」は関西の方言で「間違つてはいけないよ」の意。穿ちの句である。

肺活量負けずぎらいが二度も吹き

さぎす

病院の廊下や、遊戯場などによく肺活量を調べる機具が置かれてあるが、それを試みている男を詠んだ写生句である。性来負けずぎらいな男が試みたが、他の男ほど上昇しないので、こんな筈はないと、二度も吹いたと云うのである。ホンの一寸した穿ちには違いがないが面白いと思う。

宿題の此の辺迄は母も出来

牛 歩

子を持つ親にとつて、宿題と云うものは実に厄介である。殊にこの問題にぶつかるのは母である。「宿題は自分でおやんなさい。出来なければ出来なくてもいいのよ。」

と云つてもいられないからである。ところがスラスラと宿題をしてやれる母親はそう沢山はいない。

そこをつかんだものがこの句で、何んの奇もない表現ではあるが、一つの発見には違いない。調子もスラスラと運んでいる。

二階から冬をみているふところ手

夏 六

淋しい句だが、感じのよく出た句だ。「冬を見ている」の表現もすぐれている。「二階から」の上五もよく利いている。「ふところ手」の下五も、冬の淋しい情景を適切にあらわしている。

タチツテト入歯はずせばダヂヅデト

恵 二朗

奇智が生んだ句である。一読馬鹿馬鹿しいような句であるが、微笑を禁じ得ない句でもある。入歯を外した老人の皺だらけの顔を思いうかべて見ると、この句の味が一層はつきりして来る。作者が歯科医なので実感句なのであろう。

新築へもう天皇の額かけず

文 郷

その昔はよく天皇の額が座敷にかかっていた。それも新聞社などが配つてくれた印刷ものである。それをうやうやしく黒の額ブチなどに入れて掲げてあつた。殊に田舎の古い家などには型の如く、そ

うした額がかかつていた。それが敗戦後、自由思想がホウハイとしておこつて、天皇も亦人間天皇になられた。国民の中には民主主義のはき違いもあつたが天皇に対する感情にも大きな変化が来たことは云うまでもなかつた。

家の制度も新憲法によつて廃止された。家にコビリついたものはすべて捨ててかえりみられなくなつた。天皇の額もその一つだと云えば云えよう。この句はそうした思想の変遷を新築によつて、物語つてゐるところに異色のある句である。

不纏綴の方へ初めは親しくし

方 大

そこに二人の女がいる。それは女事務員であつてもいいし、工員であつてもいい。更に云えばその他の女であつてもいいが、この作者は二人の女に接した男の心理を実に巧みにつかんでいる。誰でも美しくない女より、美しい女に心がひかれるものであるが、露骨に美しい女に親しく口をきくことは、何んとなく面はゆいものである。それに反して、不纏綴の女に対してはザックバランに口がきけるので初めはその方に親しくしたと云うのであるが、句の裏にはいつのほどにか美しい女と親しくなつたことがうかがえ、それが恋にまで発展しないとしても、男心の動き方をうまく描出してゐると思ふ。

虚子の名もしらない胸の議員章

正 郎

肩書と云う肩書を掻き集め、どんな会合にもノサ張り出て一席ぶつのが、胸に議員章の才偉ら方である。そのクセ虚子の名も知らない非文化人であると云うのが、この句のネライであつて、これも穿ちの句だと云える。

作者は「虚子の名も知らない」と云つてゐるが、これは必しも虚子でなくてもよいのであるが、俳句の代名詞として虚子の名を用いたにすぎない。つまり俳句が何んであるかも知らないと云う代りに虚子をもち出したのでここに句としての表現技巧がある。もう一歩すすめて云えば、俳句が何んであるかを知らないは文学が何んであるかを知らないと置き換えるべきであるが、それを俗にくだけで俳句にし、虚子にしたのである。この句は世の政治屋さんにとつては痛い句である。

先妻の子に学問が出来すぎる

玲 人

後妻と先妻の子ども——問題は単純ではない。大きな悲劇が生れぬまでも、多少の波瀾はまぬがれないのが常である。

この作者は先妻の子が、学問が出来すぎると云う一事をとらえている。そのウラには自分の腹を痛

めた子の凡庸さを思わされる。タツタそれだけのことであるが、それは氷山の一角を見せたのであつて、それからそれへと想像させる構想は凡手ではない。ある深さを持った味のある句である。

葬儀の短かさ犬もついて行き

粗 影

「葬儀の短かさ」と端的に投げ出した表現で、その葬儀がいかに寂しいものであるかが窺い知れるであろう。そして、その短い葬列のあとを一疋の犬がよろめくように蹤いてゆくさまが、どんなにか、さびしく物悲しい情景であるか、これまた想像に難くないであろう。亡き人の過去が、この葬儀にふさわしい、おしひしがれた人生であつたことは云うまでもなからう。

働いて取れと資本家折れ合わず

文 蝶

金詰りは深酷になつた。銀行はあつちを向いている。労組にとつて唯一の武器であつたストも、もう資本家を脅やかす道具としては力が無くなつた。労資の対立は何時まで続くか。この問題のカギは「働いて取れ」と云う資本家が握つていると見ねばなるまい。

子猫ぞろ／＼みな宿命の顔かたち

生々庵

姿態の美、不美による宿命と云うものは、人間に限られた訳ではない。一つ腹からうまれた子猫たちにもそれがある。そろそろと歩いているうちに、それぞれの姿態による宿命で、もらわれる先が違つて来る。うちでは猫に鼠を捕らさない。猫相が悪くなるからと云う作家の宅へ貰われてゆくかと思ふと、玉や玉やと人間以上の扱いをしてくれる二号さんの膝へ落ちつくのもいるのである。

お祈をする黒髪の長さかな

春 巢

黒髪の美を、こんなにも美しく印象的に詠んだ句は一寸見当たらない。お祈りをする姿態の清楚な感じが、巧みに表出されているのもうれしい。下五の「長さかな」の「かな」の措字も無駄でなく、短歌調の句としてすぐれている。

更年期内科外科歯科忙しい

満 年

家が古くなると、壁に穴があく、屋根が漏る。戸や障子がガタビシする。人間も更年期になると、あちこちに故障が出来る。莫迦々々しいが仕方がない。癌やないかしらんと内科をのぞく日もある。手術をせなあかんそうやと外科へ走る。ポッポッ入歯をしないと物の味がないと、あわれはかない忙しさである。斯うなつては色気もクソもない。

音のよいおなら乳呑む児も笑い

薺 花

母親の膝へ、振分に足を投げ出し、片方の乳房を弄びながら、片方の乳房をゴクンゴクン吸い続けている時に、プーンと一発放したのである。それはいかにも朗らかな快よい音なので、子ども自身も思わず笑声を発したのである。

おならを詠んだ句では古句に「お前等は何を笑うと隠居の屁」と云うのがあるが、おならのような下がかつた句で、これ位イヤ味のない詠み方をした句はみつからないが、この句は、それにも劣らぬ明朗さがあるので、ほおえましくなる。しかし、川柳を誤解されるおそれがある。おならの句などに、今後神経を費さないことがのぞましい。

天誅か税吏が酔つて川に落ち

酔 月

税吏ぐらい憎まれたり、嫌がられたりする職業は勘ない。バイブルをのぞくと、取税人と罪人とが同列に扱われている。春秋の筆法で論ずると、税金の取立がきびしいので、首を吊つたのは税吏が殺したとも云えよう。この句では税吏が酒に酔うて誤つて川へ落ちたのも、天誅かも知れない——イヤ確にそうだろうと肯定している。飲んだ酒も自分の財布をはたいて飲んだものでないことを容認して

いる。そんな税吏ばかりでもあるまいが、この句は所謂税吏に一矢を酬いて、その反省をうながしているのである。

終電を氣にして料理残して来

草 右

郊外に住んでいると何かに不便である。一寸街へ出ても終電が氣になる。プラットで終電のテールランプを見送る氣持ぐらい、いやなものはない。どんな御馳走が出ても終電間近くになると、又しても腕時計を見るのである。あと十分しかないとなると、折角の料理も、もう落ちついて喰べてはいられなくなり、半分残したままで引揚げてしまう。そうした心理状態を巧みにキャッチしていると思う。辛じて終電へ飛び乗り、ヤレヤレと腰を下ろした姿が、髣髴として眼に浮ぶところにこの句のいのちがある。

腹が見えるよ柘榴かげんしな

朗 笑

空は海のように碧い。そこへ大きな柘榴の樹が聳えている。そしてざくろは思いきり大きな口をポカリとあけている。赤い実が今にもこぼれそうである。自然は美しい。この場合、作者がざくろへ呼びかけた心持ちには同感が持てる。川柳として珍らしい自然観照の句である。

出しやばりが爛のぬるさを云にくる

牛 歩

何処の酒席にでも、こんな男が一人ぐらゐは居るものである。實際は骨惜しみをせぬ親切な男なのであるが、いささか安っぽく取扱れる傾向があつて、一座からは出しやばりの名を頂戴しているのである。爛のぬるさを云に来る出しやばりは、いい意味の出しやばりであるから、少々出しやばられても不愉快ではない。この句には古川柳にでもありそうな味と調子を見せている。

大空の下チヨボくと人の住む

海 棠

果てしのない大空、その下にウヨウヨとうごめいている人間どもを、チヨボチヨボと観たところに作者の達観した人生観がうかがえて面白い。一読してユーモア味を感じるが、作者はすこしもおどけてはいない。人生に対して真摯であり、生真面目である。

屈辱を耐えるこめかみ脈を打ち

妄 夢

どんな屈辱を与えられたのかはこの句から判断することは至難である。余所目には論ずるに足らぬような軽微な侮蔑であつても、侮蔑された者にとつては強力な屈辱を感じないものでもない。従つて

そうした屈辱を耐えしのぶと云うことはなかなか難しいものである。この句の場合、かなり神経質な性格の持主であることが想像されるし、自己の弱さ、微力を肯定しているようでもあるところに複雑な味が出ている。

昼風呂へ切腹するよに坐り込み

無 聖

ガランとした昼の風呂。でっぷりと太った巨軀で、のんびりとゆつたりとかまえて込んだところは「自由学校」の五百助そっくりの男だと思えばいい。イヤ落ちついているのを「切腹でもするように」と形容したのである。比喻の面白さである。

正直に談し借金ことわれ

快 夢 起

こんな話がある。部下が遅刻して来たので、みんなの手前、バツを合わせてやらうと思つて「あたまでも痛かつたのかい」と訊き質すと「イヤ、違います。徹夜で麻雀をやつたんです」と告白する。上役はそれを云わしたくなかつたのである。借金の申出に対しても、あまり正直に話されては貸してやりたくても貸せぬ場合があるものである。穿ちの句。

亭主もう黙つて針を拾うなり

桑 南

「オイ、針が落ちてるよ」

「ハイ、すみません」と口では云うが、てんで問題にしていないうである。こんなところは男の神経と女の神経は違う。男は針がつきささつて外科へ走るところまでが、いろいろとあたまに来るが、女は突きささつてからでないと思ふが、いや。

ハゲぐらい嫁きます別荘自家用車

史 球

せち辛い今の世の中で、男がよくて金があつてと、のぞむことは木によつて魚を求むるの類だぐらいなことは娘の方が、よりよく知つてゐるのである。ハゲぐらい、イヤ片脚ぐらい無くても、物質さえあれば問題ではないと云うのである。戦後派の女性が如何に現実的であるかがうかがえる。そのくせ、夫と一緒に外出する時には、一番先きに夫の頭に帽子を載せてやることを忘れない女かも知れないと思ふと微笑を禁ずることが出来ない。

芝居ではあろうが家出はつとけず

芳 泉

夫婦喧嘩が嵩じて、妻がとうとう家出をしてしまった。ホン気で家出したのではなからうが、「死にます死にます」と云つていたのが、又しても氣になる。ここまで来ると、男は急に弱くなる。心あたりへ人をやつて探がさせる。そういった人生行路のいきさつを、巧みに描写してると云えよう。

すかしては注ぎすかしては注ぐ一人旅

孤 浪

一人旅の車中の無聊を慰めてくれるものには酒がある。車窓の風趣を味いながら、チビチビと飲んでいると、いつしか時間と云うものを超越してしもう。人生、この時ぐらい、酒がのめると云うことの幸福を痛感することはあるまい。すかしては注ぎ、すかしては注いでいる酒呑み心理がうまく詠まれている。さびしくもあり、楽しくもあるのが、一人旅の真の味かも知れない。

抓り合いして愛情を交換し

美 秋

嗜虐性と云うほどでもないが、若い夫婦の愛情は触覚によつて交流される場合の多いことは、あらそわれない。抓られたあとが紫色になつていると、そこへひそかに接吻を以て愛撫することさえ知られてはいない。そこを掴んだのがこの句である。「し」止めの句であるが、所謂「し」止めの陥入り易い稚拙さがない。

近道はよそうに父の老を知り

孤 浪

駅の改札を出て、国道を通ると数町もあるが、駅の構内から線路づたいに行けば半分の道のりもないところがある。この句の場合、危険の伴う近道を避けて、少々道のりは遠くても、たんたんたる国道を行こうと云う父の言葉に、フト父の老いを知つたと云うのである。黙つて父のあとに従つたことは云うまでもあるまい。淋びしい句ではあるが、味のある句だ。

ハウマツチ指四五本で答えたり

不 二

どんな店か判らないが、どうせ小店であることは間違いないだろう。ドヤドヤとG Iが這入つて来て、日本品の物珍らしさに、アレをとり、コレをとり、「ハウマツチハウマツチ」を連呼するが、米語会話の一二冊のぞいたぐらいでは、実戦には役立たない。しかし売ろうと云う商魂はおそろしいもの、咄嗟に指四五本で値段を答えたのである。態度が真剣なだけに一層情景はユーモラスである。

みの虫のなんば匄うても壁だつた

豆 秋

これは擬人法の句であつて、みの虫の単なる写生句ではない。作者は、みの虫をかりて自嘲してい

るのである。なんば働いても、働いても、一個の社員に過ぎないことを嘆じているのである。深い味のある句である。

道とえば嫁にもほしい教えよう

月 都

「ここんところを真ッ直ぐに行くと橋に出ます。橋の手前を左に曲つたところが三丁目になります。三丁目の何んと云う方をお訪ねになりますの、エ、それだつたら、曲つてから一ッ向うの筋の角から二軒目のお宅です。妾もそちらの方へまいりますから御案内いたしましょう」と今時の娘さんには珍らしい親切な応対ぶりに、スッカリ感心してしまい、あゝ、うちの息子にこんな嫁を貰つたらと老人は老人らしい感懐をうかべているところを詠んだものの、情景が躍如としている。

税務署が居るのに電話またかかり

無 骨

会社などを訪ねると「税務署が来ていますので一寸失礼いたします」と云う言葉をよく聞かされる。税務署に来られると、主要人物は何をおいても、面接して欲待これつとめるのである。この句の場合、下五の「またかかり」の措字が実に軽妙である。商売をしている以上、しきりに電話がかからねばウソであるが、税務署の役人が来ている時ばかりは電話も閑散であつて欲しいと云う商人心理が

「またかかり」の語から類推されるのである。

貧乏はいといませんと云うたけど

良 子

二つの魂が結合して一つの屋根の下に住むまでは、どんな貧乏だつていといませんと云いはしたけれど、さて文字通りの竹の柱に萱の屋根では前途が真ッくらで、いささか悲観せざるを得なくなり、月日が経過するにつれ、生活上の不安が拡がつてゆく心境を詠んだものである。「云うたけど」と云う下五の措字に、そうした煩悶を包蔵させているのではないか。いつそ別れた方がいいとは思つていないのである。

未亡人読めない本を売りもせず

草 々

古本屋の店先で、同一人が所持していたのであらうと思われる一ト括りの趣味雑誌や蔵書印を捺した書籍を見かけると、何んとなくさびしい気持ちにとらわれ、パラパラとページを繰つて見たくなるものである。心なき家人が二束三文で売却したことには想到するからである。しかし、この句はそれと反対に今は亡き夫が愛着措かなかつた書籍を、たとえ読めなくても、売りもしない未亡人の哀れな心情を詠んだもので、しみじみとしたものを感じさせられる。

いい仲と知らず間へ席をとり

竹 莊

ボンヤリしていると、よくこんな場面にブツつかるものである。そうと知らず女の顔の批評をやつてのける人さえある。そうと知つて、ワザと間へ割つて入る人もあらう。人の世の面白さが、そんなところにもあると云えば云えないこともない。しかし、そうと知つたら、なるべく間へは席をとらぬことである。

向う向く娘財布を明けており

柳 堂

小さな財布、僅か這入つてゐる財布、それを意識してか、向うを向いて財布をのぞいている娘の姿は、穿ちには違ひないが、どちらかと云えば戦前派だと云えよう。戦後派は百円札を幾枚も手づかみにしているのをよく見かけるが、娘心理ぐらゐに、戦前と戦後とが百八十度の転換したものはあまり多くはなからう。

観世音甘えてみたい御姿

穂波子

観世音は神と仏との中性だそうだが性的に云えば女性である。しかも三十二相そろつた美人である。

大和に旅すると、あちこちでよく国宝の観世音にブツつかるが、何れも線の柔かい美形で、恍惚とさせられる。この観世音を拉して来て、甘えて見たいとは作者の主観にしても巧く表現していることに誰もがうなずくであろう。

一同の寸志汚い紙幣ばかり

文庫

グレシヤムの法則がここでは一番ハッキリする。寸志とか祝儀とか包み金をする場合にはワザワザ両替してまで綺麗な紙幣を包むのがエチケツトであるが、一同である場合には必ずしもこのエチケツトは守られない、殊に僅かな金を寄せ集めるとなると、この句のように汚ない紙幣を平気で出すものである。鋭い穿ちの句だ。

女なる悲しみおんな酌をする

梨里

ズバリと鋭く女性批判を行っているのがこの句だ。作者は女性の宿命的なものを深く凝視して、オール女性のためになげいているのだ。自分が、その女の一人であることにも大きな悲しみを感じていることは云うまでもなからう。

我もその烏合の一人賛成す

翠 光

斯うも云いたいと思うが、あとで睨まれるのがいやさに、賛成をしておくという自分の心の醜さ、弱さに、自己嫌悪を感じて詠まれた句であろう。「我もその」の「その」がよく利いている。そして文字の上で「賛成す」と強く云い放つていて、しかも内心は賛成していないことをうまく表現していると思う。

最後まで予算がないで押すつもり

(POE)

弱い者の要求は、それが当然の要求であつてもなかなか応じて呉れないものである。少し突込むと予算がないで逃げる。予算がないのはわたしのせいではないような顔をする。ウデがないとは決して云わぬ。この句は最後まで予算がないの一本槍で押してゆく人達へ投げた大きな皮肉である。

泣いたのは他所の子針を持ち直し

湖 月

今片づけたと思うのに、もうそこら中取り散らしているのが子供の生活である。そして外で遊んで来いと追出されるのも定石である。この間にと母親は針を持つのであつたが、しばらくすると、こど

もの泣き声がする。またうちの子が泣かされたのかと聞き耳を立てる。そして泣いているのは他所の子だと判ると、又針を持ち直すと云う、母性愛を巧みに詠んだ句である。

日向水のような相手でくたびれる

茶 々

世の中にはイエース、ノーをハッキリしないのが処世術の秘訣だと心得ているような人間が、随分というものである。「あんた行く？」と聞いても、行くとも行かぬとも云わぬ。行くのがイヤなのかと思ふと、行つてもいいような顔をしている。行つた結果が面白くないと、だから私は最初から行くのは気がすまなかつたのだが、あんたが行けと云つたから行つたのだ、はじめから面白くないのは判つていたと斯うである。相手たるものくたびれないではいられない。

足の裏猫といつしよに叱られる

五 辭

タッタ今、雑布がけしたばかりなのに、もう廊下に猫の足形がある。そこにキヨトンとしている猫の首筋をつかんで、足形を眼に入れるようにして、「コレ、見てごらん、泥足で上つたらダメだつて云つてゐるのに」と叱つてゐると、その横に寝転んで猫の叱られているのを面白そうに眺めている子ども足の裏がドロドロに汚れている。「アラ、あんたの足の裏は猫とそっくりよ、だから畳が汚なくなる

んだわ……」

着たままでボタンつけるもベタハーフ

満 年

「アラ、ボタンがブラブラしてるわ」と、玄関で見付けたベタハーフ。「一寸待つてらッしやい」と糸と針とを持つて来て「早く見つけてよかつたは、このままだと落してしもうもの」着たままの夫へ、びつたりと寄り添うての作業がはじまる、愛情のこまやかさがにじみ出ている。

脊負い投げする様に母は子をおろし

草 右

写生句である。ホントに見たままの句であるが何んとなく捨て難い。手荒く投げおろすような所作の中にも、どつかに母性愛が感じられる。おろすと同時に、胸をはだけて乳房をふくますることが予想されるからであろう。

御免ねといつて仲よし先に嫁き

花 村

女の子に共通してムヤミに使用される言葉がある。語尾にくっつける「けど」なども、その一つである。「けど」いいのか悪いのか、「けど」行くのか行かぬのか「けど」どうしたのかと云いたくなる

ほど頗ぶるアイマイな言葉であるが、實際は否定に使っていないのであるから妙である。

この句の「御免ね」も年頃の女の子に共通して頻繁に使用される言葉である。一向御免ねでもなさそうな場合にすら使用している。この句などはそうした娘の言葉を巧みに駆使して娘心理を穿つている。

御祈禱をパーマの上にして貰い

ひかる

玉串がパツパツとパーマの上を右左する情景を想像しただけでも、おかしさがこみあげて来る。まじめくさつて頭を下けている女も一度口を開けば、自由がどうだの、男女同権がどうだのと云いかねないのである。ホンの一寸したところをスケッチしたのであるが捨て難い句である。

母と言う乏しき髪に油きれ

宵明

子を育てるのに懸命の母、家計のきりもりに身をけずつて来た母、世の苦勞を苦勞としないで闘つて来た母の姿は尊い。女の一生は斯んな状態に安んじて終るのである。フト自分と云うものを顧みた時には、もう髪も乏しくなっている。白髪も交っている。髪には油気さえない。しかし、この母はそこに何んの不満も持っていないのである。

接吻をしてと子供はもう五つ

ひさみ

環境はおそろしい。時代は思わざる方向へと進んでゆく。

この子の母の日常生活が偲ばれる。斯うした子供の声に、顔を赤らめもしない若い母がどの位いるのであろうか。勘くとも、作者は人の子の母の心として愕然としているのである。一つの発見には違いない。

帰化しても唄は二上り三下り

草一郎

作者はホノルル市在住。この句は作者自身が帰化しての実感か、どうか、それは判らないが、帰化法案がパスしたので、ドヤドヤと多数の人たちが帰化した事実がこの句を生んだのであろう。在外の日本人が急にアメリカ人になつたからと云つて、その日からすぐ生活のすべてが、あちら式になるものでもないし、又しなければならぬものでもない。たとえ洋館に住んでも疊の生活は忘じ難からうし、食卓上の刺身や天麩羅へ、その日限りに左様ならをするものでもなからう。矢張芸者遊びもするし、三味線の魅力に陶醉もするのである。しかし、私はアメリカ人だと思つと、くすぐつたい気持ちに襲われずにはいられないのである。この句はそうした心境を巧みにつかんでいると思う。「唄は二上

り三下り」で多くのものを想像させる手法は誰れしも学ぶべきであらう。

手作りの胡瓜はつむじ曲りなり

草 右

通勤のひまひまに作つた手作りの胡瓜。日のお野菜には事欠かぬと、自慢の品でもあるが、作品としては細長くて曲りくねつて三等品であることに間違ひはない。ああ労多くして効すくなしかと、あるじをして苦笑せしむるに充分なのである。ユーモラスな句である。

奢られる弱さ奴が好きといふ

しげを

「どや、なんでも君の好きなものを」

と、腰かけで、一パイやつているのである。

「遠慮せんかてエ、で」

「では、やつこをもらいまつさ」

と、値段書を横眼で睨んでの注文。やつこは値段書の最下部に属すること云うまでもない。調子に新味はないが、人間がよく出ていて面白い。

三等がよいとおふくろ困らせる

多久志

「何も二等へ乗らいでもよいがな。早く着くと云う訳ではなし、そんな勿体ないことせんかて、ワシは三等の方がなんば気楽かわかりアせん。第一お金のめうりと云うものがある」

と、云い張つておふくろは決して二等へ乗るとは云わない。これがおふくろ心理である。

この句の意味から云つて「おふくろ」の次ぎに「が」を入れるべきであるが、それでは調子が悪くなるので「が」を省略したのである。かりに「を」を省略したものと解すれば句意が變つて来る。まことに軽微な瑕瑾ではあるが、斯うした省略には注意を要する。

取るものは取つて信仰足りません

芳泉

半口語体の句である。表現上、「信仰足りません」の口語が句を軽く扱ひすぎたきらいはあるが、穿ちの句としては一応うなずかされる。

押入のついでに拭きたかつた肺

山雨楼

あわただしい生活をしていると、押入を片づけるひまなどはないものだ。たまたま胸を病んで会社

を休んだ。会社は休んでも安静ばかりしている訳ではない。そこで雑然とした押入を片づける気になる。ゴミゴミした埃りを清掃する。すがすがしい気持ちになると同時に自分の汚れた肺もついでに清掃出来ないものかと思つたと云うのである。病人の持つ感傷がソクソクと迫つて来るのを覚える。

三べんに区切つたあくび母も老け

幽 王

三べんに区切つたあくびとは何んと云う淋びしいあくびであろう。愚痴一つ云わぬ母ではあるが、この長い年月を生活と取組んで来た悪戦苦闘の皺が、ありありと刻まれているのである。子として云うべき言葉もない寂しい情景を巧みに詠んでいる。

水貰うだけに女の暇が要り

月 仙

寛から流れ落ちる僅かばかりの水に生命を託した経験のある人でなければ、ホントにこの句の味は判らないかも知れない。雨続きで寛の水の濁つて使い水にならないことから先ず口を切り、口先きだけのお礼ではすまされないの、コレは街の娘から送つてくれた何ですが、お裾分けしますと、お裾分けする品のことまで一トくさり喋べらねばならないし、時には洗ひ物のお手伝いぐらいしなければならぬからである。穿ちの句。

子沢山ニックネームで母も呼び

玉 兎

「オイ、チビ、僕のミットを早く取つて来なくッちやダメじやアないか」
と兄が云うと、おッ母さんまでが、ツイつり込まれて「チビちゃん、御飯ですよ」とか「チビちゃん、早くしないと学校遅れますよ」とか、ニックネームで呼ぶようになるものである。
軽いネライではあるが、家庭から拾つた面白い句である。

水族館食気放れて見て通り

一 瓢

一説はおえましくなる句である。水族館ではいろんな魚類の海中や海底での棲息状態を知ることが出来て興味の深いものである。小さな魚が群をなして泳いでいるのを見ると、美しい図案を想像させられ、水槽の前に暫く釘づけにされるものである。食膳でおなじみの鯛などを覗いても、喰べたらうまいだろうなどとは思わないで、その美に魅せられているのも、不思議と云えば不思議である。そこを掴んだのがこの句で、誰も云い得なかつたのを拾いあげたのである。

舌を出す癖は娘のときのまま

水 客

娘と云うものは、一寸したしくじりをやつても、「アラ、困つたわ、わたしどうしましょう」と云う。そしてチラリと舌を出す。何んかの信号のように、チラッと舌を出すのを見せられると、ちつとも困つてはいないように受けとれるのであるが、あれで真剣に困つているのであろうか。

この句はそうした娘が結婚後の若妻時代を詠んだものであるが、「アラ、あんた、もうお小遣いがないのよ」と云つては、ペロリと舌を出されては貧弱なサラリーマンにとつてはやりきれないであろう。

ヤットコシヨ云えば女中が笑いこけ

千 容

ヤットコシヨだけで、老人であること、その老人が、立ち上るのに、思わずヤットコシヨと、いかにも大げさな掛け声をしている姿が眼に浮んで来るではないか。そして、女中が笑いこけるのを見て、老人自身は一々ヤットコシヨと云わねば立ち上れない自分の老い込み方に苦笑を禁ずることが出来ないのである。滑稽な表現形式は採っているが、老人の悲痛な叫びを巧みに詠んだ句であると思う。

素うどんへくつたくない子が並び

いさむ

「おいちい？」

「ウン」

「こぼさないでネ」

「ウン」

「ヘイ、これは兄ちゃんの」

と云つた風の家庭風景である。素うどんを前にして、くつたくのない子どもたちが、食卓に押し並んでいるさまは、いかにも平和そのもので、どんなに忙しい思いをさせられても母にとつてコレ以上の幸福はないのである。

この句の面白さは天井でも、うな井でもなく、素うどんであることである。実感から得た句である。

名刺には社長あれ／＼掃除もし

摩天郎

敗戦後、安ッぽい会社が続出した。会社があれば社長のあるのが当然だが、給仕兼社長のような社長がいたところに見うけられた。この句もそうした社長を詠んだ句である。「あれあれ掃除もし」で、デモ社長をいかに描出している。

蓄めようとすれば花咲き鳥歌い

ただみ

金と云うものは、ちよつとや、そつとではたまらないものである。たまらないものをためようとすれば、花が咲こうが鳥が歌おうが見向いてはならないのである。と云うことは判つてはいるが——と云うところを巧くつかんでいる。この句「花咲き鳥歌い」のリズミカルな調子がいのちなのである。

故郷へも寄れと社長の暖かし

さぎす

「今夜の夜行で北国へ発ちます。お聞きしておくことがありましたら」と社長の前で若い社員は頭を下げた。

「そうかい。それは御苦労だね。あちらはもう雪だろう。まアしつかりやつて来て呉れ。オ、そうそう、君はたしか金沢の近くだったね。あちらへ出かけたら、一ト晩ぐらい母に顔を見せてやれよ」と云う社長の人間味を詠んだ句である。

悲しみを蛙ケロケロとしか鳴けず

野甫

蛙の鳴き声ばかりは聴く人によつて違う。夫婦喧嘩の絶え間のない夫婦にとつては夫婦喧嘩ばかり

しているように聴えようし、あまいささやきの二人にとつては、恋の伴奏とも聴えようし、音楽マニアにとつては一つの交響楽とも聴えよう。蛙自身にとつては食欲を訴えているのかも知れないが、この作者の耳にはケロケロと鳴いているのが哀調として聴けたのであろう。作者自身が、そういつた心の状態におかれていたのであろう。観察の鋭どさと、感覚の繊細さに於て秀れた作である。蛙の鳴き声も、ところによつて違ふので、いろいろの表現がおこなわれているが、この作者の耳にしたのは何処の地方の蛙であるのか知らないが「ケロケロ」と表現しているのを面白く思つた。

素人のなすびは十一月もなり

春 巢

秋も十一月ともなれば、そろそろ寒い風が吹く。日曜の昼を我が家の裏にある猫の額ほどの畑に立つているのは安サラーリマンの一人に違いない。小さななすびが、ポツンポツンとなつている。十一月になつても引き抜かないのである。そこが素人の味かも知れない。多少ユーモア味も感じられるし、軽い穿ち味もあつて、はおえましい情景の句である。

もう踏まぬ故郷ぞ柿へ肥えをやる

自由 朗

食い詰めて国を棄てる——だのに、まだ柿に肥えをやる。それは故郷への哀愁でなくて何んである

う。生活から生れて来る句には斯うしたしみじみとしたものを感じさせられる。ホントに匂いの高い句だと云えよう。その昔塩原太助が国を棄てる時、飼いなじんだ馬に涙の別れをするが、それよりも、もつと現実的な心の痛さを感じる句である。寺の屋根でもいけない。村端ずれの土橋でもいけない。それではロマンチック過ぎる。柿であつて、はじめてこの句は生きる。

その上によその子までが来て遊び

日満子

「その上に」で子沢山であることがうなずける。晝は摺り切れ障子は破ぶれ放題であろう。うちのこともただけでウンザリしているのである。その上によその子までが来て、西部劇を演じるのではたまつたものではない。この句、上五の「その上に」の描写を翫味すべきである。

二十五でもう税務吏は家を建て

香林

税務吏は大衆からいやがられる職業の一つ。昔から「役人の子はにぎにぎをよく覚え」の口で、役得からの汚職がつきもの、敗戦後の日本は税金攻勢の乱脈ぶりに、正直者は税金が払えないので首吊りまで出る騒ぎである。少しくリコウに立ち廻る連中は税吏に酒色を提供する。金品を贈る。戦後派の若い税吏に倫理観念などのあろう筈もなく、そうした誘惑をむしろ役得と心得、汚職事件でつかま

れば「何もオレだけやっているのではない。オレは運が悪かったのだ」ぐらいにしか考えていないようである。若い税吏へ一矢を酬いたこの句によつて、彼等悪税吏の生活をうかがいしることが出来るよう。

残業に酒が出るのとつねられる

四季無

若い夫婦には違いないが、もう新婚の匂いはない。よく飲んで来るし、遅く帰つて来る。今日は残業で遅くなつたと釈明するが、妻はもうそれを信じない。残業に酒が出るのと皮肉る。残業だつて酒が出るさと軽く一蹴すると、嘘をおつしやいと、つねられる。子どもが二三人も出来ると、もう斯んなことを云つてはいられなくなるのが夫婦生活かも知れない。

われ老いぬ子故の詐欺に二度も遇い

表情

年をとると自然に子にあまくなる。そこをつけ込まれていろんな問題を持ちこまれる。金ですむことならとウツカリ乗る。よくよく考えると詐欺にかかつた訳である。が、又してもかかつて、はじめて自分の老いを知つたと云うのである。うまく心境を詠んだところに作者の手腕を見る。

締めたらと見たら卵を生んでいた

尋 四

何遍トヤをのぞいて見ても卵一つうまない。餌だけはキツチリと喰べるので、胸クソが悪くなる。「エイッ、いつそのこと締めたら」と荒々しくトヤをあげたら、なんのこつた。「へい、只今うみました」といったような顔した鶏の尻のあたりに、卵が一ツころがつていたと云うのである。或る種の諷刺がひそんでいるイソップ川柳である。

オイ風邪をひくぜと男から折れる

伍 健

男と女の世界のいざこざぐらい微妙なものはない。弱いようで強いのが女の意地である。強いようでも男の意地はボキッと折れる。男が折れて出れば問題は一ト先ず解決である。

この句は柳樽的な内容を現代訳したような味が出ている。それは表現形式が散文的であるからであろう。

気前よく腹の痛まぬビール抜く

梅 里

客二人、ビールピンの林立。

「もうこれ以上ダメです」と固辞しても、「ダメなことがありますか。ビールの一本や二本、すぐに酔がさめますよ。残つたら残しておいて下さい」とムヤミに気前がいい。これも自分の腹が痛まないからだとは皮肉な観方である。しかしそこには動かすことの出来ない真理がある。

もう少し寝ててと食事準備中

日満子

明日は日曜だと、いささか気をゆるして寝たためでもあろうか。細君が床を離れるのも、いつもより遅かつたのである。

「今起きてても食事が出来てないのよ、もう少し寝てて」と云う甘い言葉が、台所から聞えて来る。そうなると男と云うものは、人生の幸福を一人で買い占めたように、もう一度ふとんへ深くもぐり込むものである。新世帯風景の写生句。

お父さんの様になるとはいじらしい

淡舟

こどもも小さいが、お父さんも、まだそんなに年をとつてはいないことが句を通して感じられる。しかし、このお父さんは会社員としたら平社員であることには間違いあるまい。たまたまの公休に、子どもを愛撫しての一小時の会話に、

「坊は大きくなつたら何になる？」

と聞くと、

「お父さんのようになるよ」

と、ちつともためらわない。子どもにとつてはお父さんが一番エライのである。のおそ父さんの前途が、あまりにも遥かであることに思い及ぶ筈もないのだ。お父さんたるものホロリとせざるを得なかつたのである。家庭川柳の妙味が巧みに詠まれている。

床の上で散るとは花も知らなんだ

宏 方

おそろしく冷ややかな句である。青空の下で美しく咲き誇っていた花が、美しいがために床に活けられ、遂には床の上で散つてしまつたが、花自身は床の上で散ろうなどとは夢にも知らなかつたと云うのである。擬人法の句であり、諷刺句でもあるところに、この句が異色ある句としての魅力を発揮している。

早よう去んで欲しい火鉢へ鏝をさし

照 子

家庭川柳としてなかなかすぐれた句である。単なる家庭の主婦であるのか、仕立物いたしますとい

う、ほそぼそと縫い物をして暮らしを立てている未亡人であるのか、そこところはハッキリしないが、それはどちらであつてもいいだろう。いずれにしても、大した用もないのに、いつまでも話し込まれて困っている情景を「火鉢へ鰻をさし」で巧みに表現していると思う。

約束を破らす様な雨が降り

季 賛

「いくら約束でも、こんな雨に出て行けるものですか。しばらく休んでいらつしやい。今に小やみになりますよ」

と云われると、それもそうだと思つて、一寸尻を落ちつけたところ、雨は小やみになるどころか、次第に強くなつて、風さえ加つて、まともに向いて歩けそうにもない。もう暫く待つてと思つてるうちに、とうとう出かける時間を失つてしまつたと云うところを巧くとらえている。この句、どんな約束であるのか、どんな人物であるかは判らないが、それは問題にしないでも面白い句である。

もの足りぬ夫事業の虫のよう

草一郎

ワタシから云えばワタシはアナタのものであり、アナタはワタシのものなのである。ところが、アナタから云えば、お前はワタシのものであるが、ワタシのすべてが必ずしもお前のものではないので

ある。そこに妻としての物足りなさがある。この句の夫も、そうした夫の一人なのである。ソレ重役会議だ、総会だ、出張だと云つて家を外にしているさまが、妻の眼には全く事業の虫としか見えないのである。コレがワタシの生活だと云うが、愛情に生き抜こうとする妻にとつて、これほど物足りない思いをすることはないのである。私はこの句を読んで映画の「学者の妻」を想い起した。それこそ男と女の宿命かも知れない。作者の観察眼は実にきびしい。

この句の読み方は「物足りぬ」で切つて、「夫事業の虫のよう」であつて「物足りぬ夫」「事業の虫のよう」ではないのである。

手紙では届く本社が見当らず

井 蛙

「この辺に何々社というのはありませんか」

「サア」

「霞町一番地ですが」

「霞町一番地はここですが、そんな会社は知らないネ」

「手紙は届くし、本社なんですネ」

「知らないネ」

と云うのである。都会ではこんな会話が度々繰り返えされている。何んの変哲もない句のようであるが、都会としての穿ちがある。

喋べり散して診断聴かず去に

方正

こんなのは、でつぶり太つたお女将さんタイプの患者に多いのではあるまいか。なんだかそんな気がする。

「先生、この間は……」

などといらぬことまで喋べり散らしているのをよく見かけるのである。作者は医者なので度々遭遇した実感なのであらう。この句をジツと凝視^{みつ}めていると、診断も聴かずに帰つてゆく人物が浮んで来て、自然にユーモア味を感じるのである。

It is だけで世界を廻つて来

法泉子

戦後アメションと云うのが流行る。猫も杓子も羽田から飛ぶ。帰つたらさかんに、アチラでは斯うだ、ああたと云う。アメリカヘシヨウベンしに行つたぐらいで、ムヤミにアチラを振り廻わされてはたまらない。そのくせ啞の旅行なのであるから実にふんばんものである。この句はそれを諷したので

ある。英語もロクに知らないのを「ゴ」で表現した手際は素晴らしい。

我が町の昼を知らない労働者

玲 人

朝早く出る。夜遅く戻つて来る。そうした生活の連続の労働者にとつて我が町の昼を知ろう筈がない。それだけに我が町に対する愛着は強い。しかし、仕事は一日として休めない。しめつぱい夜霧の町へいつもトボトボと戻つて来る生活が、いつまで続くのかと思うこともあるであろう。そうした労働者の悲哀にメスをあてたのがこの句である。作者の感覚は鋭い。

意見して帰れば妻に意見され

夜 潮

「甥のヤツ、どうも近頃生意氣になつて兄貴も弱つているので、今夜はこつびどく意見をしてやつたよ」

「どんなことですか」

「結婚なんて、親の意見に従う必要はない。近ごろの法律でそうなつているんだと云うんだ」

「その方が世話がやけなくていいじゃないの。それを叔父さん顔して意見するなんてバカねえ」

「オヤオヤ」

「それより、毎晩々々お酒を召し上つたり、パチンコに行つたりするのはお止しなさいよ。子どもの

ためによくないわ」

「オヤオヤ」

と云つた情景を巧くキャッチしている。

金策の急がば廻れ碁に坐り

齊 花

斯うした内容を詠んだ句は今までにないことはないし、「急がば廻れ」という諺の引用も格別新味がある。と云う訳でもないが「碁に坐り」と云う表現技巧で生かされた句だと云えよう。

「ヤ、一目の負けでした」

と、如何にも残念そうに負ける手際で、一勝三敗ぐらいで、ソロソロ本論の借用金問題に触れることであろう。急がば廻れは処世術の定石に違いない。作者の実感かどうかは判らないが巧い句である。

ばらばらの高級品で身を飾り

水 客

少うし金廻りがいいと、高級品を買いたがるが、それがバラバラな高級品で身を飾っているのを見ると教養のない奴はダメだと、一種の輕蔑の眼で見たくなるのが人情であろう。この種の人間は都会ではざらに見ることが出来る。こんな人かと思う人が金側の腕時計をしていたりするが、斯うした高

級品は見栄と金融を兼ねている場合が多いので、アクセサリーが自然バラバラな高級品となるのである。

泥棒の逃げた窓から首を出し

小松 園

「エ、ッ、ここから逃げたんですか」

「多分ここですよ。ここしか外に逃げた形跡はありませんからね」

賊が逃げたと思われる窓から首を出しての会談である。もうあとの祭ではあるが、泥棒が逃げたらしいその窓から、あたりをキョロキョロ見廻わしている情景がありありと描かれている。

人物はこの家の主人と警察の人であろう。これだけの表現で社会事象の一コマをうまくキャッチしている軽妙さをたたえたい。

支那服を着て出る妻はまだ若し

美 笑

別に中華にいた訳ではないが「あんたによく似合つてよ、素敵だわ」と云われたので、つい着る気になつたまでである。イヤリング、そこまではしないが若い人妻らしさが、この句にはよく出てい

ウチのやつどうかしたのかなアと思わぬでもないが、妻の持つエキゾチックな美も、まんざらでもないで、ムリに止してくれとも云わぬ夫の心境が、この句から感じとられるではないか。いかにも明るくて朗らかな句である。

まないたは白く乾いて妻の留守

呑 水

「オイ、お茶をおくれ」「オイ、シャツを着かえるよ」「オイ、銭湯へ行くからタオルを」と、何から何までワイフの手を煩わしているサラリーマンにとつて、妻の留守と云うことは実に物足らなさを感じさせるものだ。たそがれて行く台所にポカンと一人待つていると物悲しくさえるものだ。俎が白く乾いているのヘフト眼をやつた時の淋しい気持が、この句にはハッキリと出ている。

女房もう先に寝るのも憚らず

鉄 洲

「あなた今晚遅いのでしょ」

と、夫の出がけに一本クギをさしておく。そうすると、夫の帰宅の遅いことも定石通りである。それをいつまでも待つてゐるほどの若さもなければ色気もないのが、月並な夫婦生活なのである。この家の女房としての安定感が、サッサと寝てしまうのである。中年以後の女房の心理を巧みにつかんでいる。

エレベーター押し込められてお辞儀され

花村

デパートへ行く。六階の催し場へ行く人たち、七階の食堂へ行く人たちが、ゾロゾロとエレベーターに這入る。押し込められるだけ押し込めドアを閉ざす拍子に、外に立つエレベーターガールがお辞儀をする。テイネイにお辞儀をするくらいなら、こんなにムリに押し込めなければいいのと思うと、作者はおかしくなつたのである。ムジユンから来るおかし味を詠んだ写生句である。

見て見ないふりして同職見て通り

卯之助

別にライバルと云う訳でなくても、同業となると、流行つてゐるか、流行つてないかが気になるものであるし、どんな品をならべているかが気にかかるものである。

そうした心理をうまく促えたのがこの句である。人物が躍動している。

惚れた弱み彼女の連れのまで払い

素身郎

彼氏と彼女と、彼女のフレンドの三人。映画見物でもいいし、喫茶店でもいいし、デパートの化粧品でもいい。

「あんた、どれ」

「わたし、コレがいいわ」

「わたし、コレがいいわ」

「ジャア、一緒に払つてネ」

と、云う訳である。

彼氏が今日貰つたばかりの月給袋は何等の抵抗もなく、ムザンに破ぶられたのである。弱き者よ汝の名は……女ではなかつた。男の多くは斯うした弱点を常に持つてゐる。

五尺八寸二つに折つた御挨拶

白 水

近ごろの青年は瘦軀長身型で一樣に背が高くなつた。五尺八寸はザラにある。背丈までがアメリカ式になつて行くらしい。

それが電車の中などで、短軀デブ型の先輩に出会う。向うは「ヤア」とアッサリ云うが、こちらは五尺八寸を二つに折つてインギンな挨拶。いかにもユ―モラスな風景である。ソコを巧くキャッチしたのである。五尺八寸を二つに折つた挨拶と云う文字から、特にこの青年の家庭がうかがえる。

鏡合を並べてみんな不倖せ

白 星

一読して色街風景であることに間違ひはないが、華やかであるべき筈の鏡合がズラリと並んでいても、チツとも浮いた感じがしないで、むしろ一つ一つの鏡合の持ち主の悲劇が想像される暗い句である。

父親は只居るだけの看護なり

淡 舟

「一寸変ですわ」

と、子どもの手を握っている。

「……………」

「それに熱もだいぶありますわ」

「そうか」

「一寸見て、頂戴。お医者さんへ一ト走り行つて来るわ」

会社を休んだ父親は、子どもの枕許へ、どつかり坐り込んで、新聞を読んだり、タバコをスパスパ喫っている。それでも看護のつもりなのである。世の父親の半面をつかんでいる。

神経の太い妻なり戸も締めず

いわを

「大丈夫ですよ。何も盗られるものはないし」と、戸締めもしないで寝ると云う妻の神経の太さにあきた男の心境を巧くキャッチした句である。娘時代にはかわい女性に見えても、一たん人妻となると案外気強い女になる女性もいるものである。面白い句である。

洗濯機今年も話だけで暮れ

文 夫

洗濯機は主婦の夢である。デパートへ行く度にのぞいて見る洗濯機ではあるが、安サラーの生活ではなかなか手が出ない。ボリーナスがタンマリ貰えたら、買つてもいいと云う夫の許しはあつたが、そのボリーナスも、のつびきならぬものに皆んな出てしまつて、洗濯機どころではなかつたのである。家庭川柳として面白い句である。

停年も近くちぎつた煙草喫う

澄 泉

停年近い人の淋しい生活を詠んだ句である。前途の暗さが思いやられる。「ちぎつた煙草喫う」と云う巧みな表現がこの句の生命である。辞餉の使い方が、いかにその句を生かすかと云う好適例である。

苦心は決してムダではない。

税吏来て猫にさかなを食われたり

摩天郎

税吏が来る。食事中ですからと待たしておくことも出来ない。アタフタと飛んで出て迎える。少しでも御機嫌を損じまいとする心づかいが、この句からうかがえる。

ドモリながら、一応のうけこたえをする。税吏が帰つてゆく。ヤレヤレと思つて、台所へ引きかえしたら、猫がさかなを失敬していたと云うのである。そこには笑えない滑稽な場面が展開されている。面白い写生句である。

療養所汽車から見ればいいところ

法泉子

山の小高いところに、幾棟かの平家が建ち並んでいる。空は蒼々として一片の雲もない山裾にはささ流れがあつて、道行く人の姿が逆さに映つて、ユラユラと揺れている。これが汽車から眺めた療養所の姿である。

毎日の生活に追われている人が車窓から見れば、こんなところで、一日でも二日でも暮らして見たいと思うのも無理がないのであろう。軽い穿ちの句である。

恋人がいるのに嫁けへんか嫁けへんか

ひさみ

作家自身の実感をありのままに詠んだものであろう。この作家ぐらい女を裸にして見せてくれる作家は稀れである。表現も実に軽い。この句など無技巧の技巧の域に達したものだと言えよう。「恋人があるのに」でなく「……いるのに」と詠んだ突つ込み方など心にくいほどに表現上のコツをのみこんでいる。恋人がすぐ眼の前にいるのに、ゆけへんかゆけへんかと畳み餉で、再婚をすすめているユーモラスな情景が躍動している。この場合、女が薄笑いをもつて応えているさまが想像されるので、再婚をすすめているものと観たのである。

人間が真つ正直ですぐ怒り

水車

自分が正直だと、他人の一寸とした不正直でも仮借しないのが人間性だと云えよう。自分は正直だが、他人の不正直に対しては、すこぶる寛大であることは聖人でなければ出来ないからである。この句からはそうした人間性を掘み出して見せられた気がする。単純な表現であるが「すぐ怒り」の下五で句をなした訳である。

バンガローへ来ても女は洗濯し

竹 莊

山は招くだとか、島は詩の国夢の国だとか。アベックで来たバンガロー。一寸汗ばんだので女はハンカチの洗濯をはじめ。天気よさが洗濯をしなければいられなくなる女性心理を巧みにとらえている。この句の場合、「洗濯し」と「し」止めの敘法は少しく低調である。

すゝき原園児が通る声がする

方 大

市とは名ばかり、ところどころにすゝき原がある。そこを抜けて幼稚園へ通う園児の音がガヤガヤとするのである。どこの児だか判らないが、張り切った声、甘ったれた声が交響楽のように聞えて来るのである。作者はその声にいつしか親しみを感じようになつたのであろう。穿ちはないが、何んとなくすがすがしい句である。

急逝へ飲んだ思い出ばかりなり

春 巢

先輩がコロリと死んだ。昨日まで、いつものように……と思うとなんだか淋しい。まだホントに死なれたような気がしない。

次から次へ、アノ時コノ時の思い出が湧く。しかし、ドレもコレも一緒に飲んだ思い出ばかりであると云うのである。「飲んだ思い出ばかりなり」とアツサリ云い放してあるが、何んとなく、しみじみとしたものを感じさせられる。

職場大会鰯を食った息で来る

不 水

食うための戦いである職場大会、常にベースアップ、ベースアップを絶叫する職場大会にやつて来るのに、「鰯を食った息で来る」とは、なんと云う軽妙な表現であろう。それ等の言葉は同時に使用者側に対するレジスタンスさえ感じさせられるではないか。鰯は労働者にとつて鰯以上に重要な副食物である。この句の場合、鰯の栄養問題まで考える必要はない。ただ、労働者、鰯、その鰯を食った息それで十分この句は生きている。

マネキンと同じ柄だが見てくれず

井 蛙

「どう？」

と、彼の女は両の袖をたたむようにしてスックと立つた。

「どうッて……」

と相手はケゲンな顔をする。

「イヤッ。コレ、マネキンと同じ柄なのよ」

「アう、失礼しちゃッたわ」

「いいでしょう」

斯うなるとよくないとは云えないが、彼の女がマネキンの美を持合さないので遺憾とすると云わぬばかりにだまりこくったのである。人物が躍動している。

現実にかえつて女米をとき

水 客

家庭以前に描いていた理想は霧のように消え去つたにしても、家庭生活に対する夢のすべてがなく
なつた訳ではない。ミシンが欲しい、電気洗濯機が欲しい、ミキサーが欲しいと数えれば果てしがな
い。しかし、夫の収入はそうした欲望を満足させるにあまりに遠いのである。

「ああ、もうすぐ会社かひけるわ」

と、彼の女はあわてて米をとぎはじめたと云うのである。この句からは「現実にかえつて」の含蓄の
ある表現法を味読する必要がある。

喪服まで借りて来たのにもち直し

一三夫

近親の危篤の知らせに、年が年であるから多分ダメだろう、とても行くまではもたないかも知れない。そこまで考えると、もう葬式のことか頭に浮んで来る。身寄りとしては自分が一番近いので、さし詰め喪服の用意をして行こうと、喪服の心配までして夜行で来たのに、病人は持ち直していたと云うのである。二泊三泊しても一向亡くなりそうにもない。死ぬのを待っているわけにもいかないので引揚げて行く。こんな例は世間にいくらかもある。皮肉な句である。

峠茶屋一団去つたごみを掃き

緑 雨

今の今まで、団体で来てワアワア騒いでいた情景が「一団去つたごみを掃き」の語によつてホーフツとして眼に浮かぶではないか。写生句として成功している。

読みながら十代ジャズも聞いて居り

八ッ茶

何ごとをするにも、常に精神を分裂させているのがアップレのティーンエージャーの特徴であろう。そこをキャッチしたのがこの句であり、そこにこの句の空ちがある。ジャズのような騒がしい音の中で

読み、音の中で眠むることは変態かも知れないが、それが近ごろの十代の現実なのである。

力つきたように冬の日海へ落ち

一 夫

冬の日が急に海へ落ちる姿を「力つきたように」と形容しているが、たしかに、そうした感じがうけとれるところにこの句のよさがある。その点感覚の句は穿ちの句よりもむずかしいかも知れない。キメ手がきかぬと全然句にならぬからである

女手の家で汚い硯箱

京 一 楼

女手の家では滅多に筆を使わない。日常筆を持つような仕事をしないので、つい筆ぶしようになるものである。硯箱はあつても、筆らしい筆もない。墨はあつても、ドロドロの墨、それも斜めにちびた墨である。すべてがなんとなく汚らしい。この句のネライはそこをつかんだものである。地味な句であるが一つの発見には違いない。

前借で来た娘邪慳に父と会い

白 星

なんだか暗い小説を読まされているような句である。「前借で来た娘」とだけで苦しかった過去を

思わされるし、今もそこから抜け出ていないことは邪慳に父に会っている点からも想像されるからである。実父には違いないが、いまだに娘をあてに金の無心に来たことがうなずけるし、斯うした父と娘は昔も今も絶えないのである。内容がロマンチックなだけに古川柳の匂いが多分にする句である。

御苦労なこつちやとスキー見送られ

修

この寒いのと先ず思う。わざわざ雪の降るところへ出かけなくてもよからうにと思う。しかも、自分の背より高い荷厄介なスキーを担げて、混雑する夜汽車に乗らなくてもよかりそうなものだとも思う。「ヤレヤレ、御苦労なこつちや」と第三者の眼に見送られていると云うのがこの句である。スキーヤーに対する傍観者の心理をハッキリと描いているのが面白い。

お喋りが来た来た話題さつと変え

一 善

「あんた、知つてますか」
と、まず一問を投げるのが、お喋りの戦術かも知れない。

「何をです」

と、ウツカリ応答でもしようものならたまらない。誰やら君、近ごろはチツとも家へ帰らない。その

わけはかようしかじかと事も詳細に解説をほどこし、だから細君がどうやらだと、見て来たように喋りまくるのである。そんな男のやつて来る姿が眼に映つたので、今まで談していた話題をサッと変えてしまつたと云うのである。どこにでもよく見かける情景のスケッチであり、「来た来た」の語が人物を躍動させている。

足らぬとこだけ奥さんが口を入れ

香 林

それは内助の功であるかどうかは判らないが、いつも夫の無口がたたつて、云い足りないのを齒がゆくも感じ、つい横から口を入れるのである。しかし、夫はそれをさえぎろうともしない。自分の云い足りないことを知っているからである。奥さんに敷かれてると云う言葉も時には甘受しなければならぬが、それも仕方がないとすぐに諦めてしまうのである。世の中には斯うした夫婦生活を続けている者がすくなくない。そこをとらえたのがこの句である。

窓あけて家主眺めも買わせる気

お か き

瓦斯もある。水道もある。駅へも近いといふことづくめの宣伝に、つい郊外に住む気になつて家を見に行くと、家主が先に立つて二階にあがる。

サツと窓を開いて、

「どうです、この眺めは……あれが葛城、こちらが金剛」

と、指呼の山山をわがもののように紹介する。家主にして見れば斯うした眺めまで買わせる氣だろうと、思つたのである。軽い穿ちの句である

斜陽族さすが式辞の堂に入り

美 秋

斜陽族と云う呼称は戦後に生れたのであるが、曾ての社会的の地位が人柄のよさをどっかに残しているだけにあまり威張らない。無い袖はふれぬ事を余りにもよく知つてゐるからである。しかし、何かの時に、式辞でもやらせると万事行き届く、言葉に少しのソツもないので流石に斜陽族の名にはじないだけの式辞をやつてのけるのである。そこをつかんだのがこの句である。

鳥取砂丘

はるかなる砂丘は独り歩くべし

八 歩

叙景川柳である。しかし純然たる叙景句でもない。人生に対する神韻漂茫たる感じをどっかに漂わしているではないか。人生の永遠性などについて考えさせられる。斯うした心境に一步足を突つ込ん

だ作者の詩心は尊い。

水道の漏りもよう直さぬ亭主

春 果

いつも偉らそうなことを云っているが、

「水道が漏つてこまるのよ、あんた、なんとかならない」と女房から云われても「よし来た」とすぐさま応じられない亭主を詠んだ句であるが、この句には單に水道の漏れるのに限らない諷刺があつて亭主たるものの苦笑を禁じ得ない面白さがあると思う。一寸ヒューズが飛んでも、よう直さないで、ムスコの手を借りるのも斯うした亭主である。

ざあますに市場の口でとらえられ

千代美

軽い穿ちの句だが面白い。一寸したスケッチの句である。とらえられた女が市場籠をさげてイライラしているさまが髣髴として眼に浮んで来る。

ざあます婦人の方は、時間的に余裕があるので、婦人会のこと、役員選挙のこと、お茶の集りのこと、うちの犬がどうかしたと、牛乳の値下げ運動のその後のこと等々と話題は尽きない。迷惑そうにしている相手のことなどは眼中にないのである。女性の世界の句である。

席談つてやつたのに講談本を読み

香 林

サモ疲れた姿で老人が吊皮にブラ下つている。なんだか気の毒になる。疲れていることは自分も同んなじだが、それだけに同情の念が湧く。

「マア、おかけなさい」

と云つて席を譲ると、老人は無表情のまま腰をおろした。礼を云う言葉も出ないほど疲れているのだなァと思つてみると、老人は懷から一冊の講談本を出して読みはじめた。この老人は仕事とはもう縁のない人であることが判ると、安価な同情から席を譲つたことが何んだか馬鹿馬鹿しくなり、仕事でクタクタになつてゐる自分がいとおしくなつたと云うのであろう。皮肉な穿ちの句である。

使い込みをさせた女はけろりとし

緑 風 子

刑事の質問に対して

「最初、ハンドバッグをあげると云われたから、そうと云つてもらいました」

「それから……」

「それから、スーツを呉れたわ、それからいろんなものを……」

「いろんなものとは」

「一々覚えていないわ。呉れたからもちただけですもの」

「二人はいつもどこで会っていた？」

「どこでつて、大てい喫茶店ですの、温泉マークですつて、冗談でしょう。わたし別段愛してなんかいないんですもの」

刑事はア然としている。そしてこの女のために使い込みをした男へあわれみの眼をなげいているという情景を巧みに描いた句である。

若後家の喪服一番よく似合い

紫 香

女の喪服が、いつも見馴れている姿よりも一段と美しく見えることはおそらく誰の眼にもそうであるらしい。殊に若後家の喪服が、一番よく似合うように思えるのは、悲劇のヒロインに対する同情も加味されるからであろう。この句は「一番よく似合い」と断定しているが、この断定は句意を強化するに役立つように思う。

甘党は女の方の中に居り

美 笑

甘党と云われるほどの男は、知らず知らず辛党からのがれて女の仲間入りをしているものである。

どこやらのおせんざいがとか、どこやらのみつ豆がとか、女と話がキチンと合うからである。しかし、こんな男は案外女からはもてぬものである。いろいろだとか、恋だとか云うことになる却又別であるらしい。この句は写生句として成功している。

好きと好きならばと母が先ず折れる

草一郎

新しい憲法が出来たからと云つて、すぐに、家の組織が無くなつたり、男女の結婚がすべて二人の合意だけで成立するものではない。世の中はそう簡単にはいかない。矢張り親は親としての云い分がある。二人にしても経済的独立の出来ない以上、親を全然無視することも出来ない。が、しかし、まゝ好きなら添わしてやつてもいいでしょうと、先ず折れるのが父ではなくて母であることはこの句の示す通りである。穿ちの句である。

矢印の通りに曲るモーニング

三司

矢印とモーニング、文字の上ではそれだけである。一読すると何んの交哲もないようであるが、案外面白い句だ。

「何々家」への告別式にのぞむモーニングがゾロゾロ行くさまが、タッタこれだけの描出で眼に浮ぶ

ではないか。川柳の表現には特にガンチクが必要であるが、この句などすこぶる単純な素材で構成されていながら、なかなかガンチクがある。

二つ頼めば一つ忘れる附添婦

甲 馬

なかなか気の利いた附添婦もいるにはいるが、その多くが社会生活からハミ出されたような存在で、附添ズレをしていて、尻は重たく、慾には眼がなく、おしやべりとサボルのとで、日を消しているのが附添婦の常である。そして少しく面倒になるとサッサと引揚げて行くのである。たまたま氣のよいのがいても、そんなのは患者から用事を頼まれても、この句のように、二つ頼めば一つは忘れて来ると云うシロ物である。穿ちの句。

楽天家のクラゲは磯に置去られ

一 瓢

海中にゆらりゆらりと漂っているクラゲを楽天家と観たのは作者の主観である。磯辺を散歩しているとよく、白い砂の上にきらきら光るクラゲを見かけるものである。誰かのいたずらで、磯辺に投げ捨てられたのであろうが、そうしたクラゲを楽天家と観るのも、置き去られたと云う下五の表現も擬人法の面白さである。内容から云うとクラゲが磯にあると云うだけのもので何んの変哲もないが、擬人

法で表現されてあるがために、この句に一種のユーモアを感じさせるのである。

大学へやれば酒呑む様になり

ト 占

親父が学生のくせに、酒なんか呑む奴があるかと云うと、

「女の子だつてビールを浴びるほど呑むよ」

と黙つてはいない。

「僕なんか三本ぐらい呑むと真ッ赤になるんだ。はずかしい位だ」

ヤレヤレ、大学へ行つてもらつていられるだけでも、なみたいではないのに、その上に大酒呑みになられたんではたまつたものではない。親のふところも考えないで、酒を呑むのも社交上必要なんだそう。うだ。ついでに汚職のけいこなどとして、これもこれからの人間の生きる道だよと云い出すかも知れない。そんなことまで考えさせられる句である。

左手でよかつたねえと怪我見舞

侃流洞

「機械に挟まれたそうだな」

と云つてベッドの横に立つ。

「ええ」

と僅に上眼をつかつて見舞に答える。

「まだ痛むかい」

「ホータイを仕替える時はつらいです」

と、いかにも痛そうな顔をする。

「危なかつたなァ」

「ホントにいのち拾いをしました」

「しかし、左手でよかつたね。不幸中の幸だというやつだなァ」

こんな会話が、ちぎれちぎれに続いた。穿ちの句である。

旅樂し前も隣も女性です

方 大

多分、汽車の座席なのであろうが、この句の場合、特に汽車の座席でなくても一嚮差支えないのである。兎に角、前も隣も女性であることが愉しいのである。

コレは旅へ出たと云う解放感が急に異性の匂いを希求するのであつて、男でも、女でも同んなじなのではなからうか。と云つたところで変態性のような実行力を發揮する訳ではなく、夕闇に月見草の

はのかな匂いにあこがれを持つにも等しいくらいのものである。それでも充分楽しいところが旅は一種の魔物に違いない。旅ごころのこまかい分析がこの句のいのちである。

あきまへんなどと芦屋へ居を構え

水 堂

大阪あたりでは「どうだす」と云えば「イヤ、さっぱりあきまへん」と云うのが、一応の挨拶である。

「どうだす」は「どうです」で、「あきまへん」は「ダメダ」と云う意味の大阪の方言である。そしてこの「どうだす」は、よく売れますか、事業の方は盛んですか、景気はいかがですかと云う意味であつて、商魂が生んだ挨拶用語なのである。

この句は「あきまへん」などと云うても、云うている人自身もホントにあかんと思つていないし、聞いている人も、その人がホントにあかと云うているとも思つていないのである。と云う訳は「あきまへん」などと云うていても阪神の芦屋に堂々たる居を構えていることを知つてゐるからである。方言を巧みにこなした句である。

御録の妻の鼻息まできこえ

ひ か 平

御録がとりあげた問題が何んであるかは判らないが、何れは封建的な家の問題か、生活に直接響く物価の問題かであろう。

スイッチをひねると自分の妻が、イキをはずませて喋っているのが手にとるように聞こえる。それを「妻の鼻息まできこえ」と表現したのはあざやかである。

妻は平素のふまんをこの時とばかり、プチまけているし、夫はアイツらしいことを喋べつてやアが
ると思つてゐる。その二つの顔がハッキリと浮びあがつて来て、ユーモア百パーセントの句である。

お年玉貰えば子供去ぬといひ

愛 論

子どもぐらい正直なものはない。別に平素のごぶさたを詫びに來たのではない。お年玉が欲しいからついで來たのである。お年玉を貰つたら、もう外に用はないのである。

「去ぬ去ぬ」

と云つて母の袂を引つぱつてきかない。そこをつかんだのがこの句である。穿ちの句。

二号の眼に三号の自由奔放さ

谷 水

好きでなつた二号ではないが、いつのほどにか本妻へ多少の遠慮も出来、思う存分にやれないのが

二号の迫る道かも知れない。

殊に彼氏のワクの中で小さく生きるようになっては、生活もだんだん地味になつて行かざるを得ない。浮氣の対象として、そこに必然的三号の芽生える隙を与えたのである。三号が出来て今更のように驚くのは手遅れである。二号の眼に映つた三号の自由奔放さには、ついついを許さないものがあつた。そこには肉体を物質に交換する作業しなかつたからである。

飲むだけは飲みお土産はもぐさにし

博 人

旅へ出れば飲む。飲まねば旅した気がしない。大いに飲んで財布をはたくのが人情。さてお土産のだんどりになると、いささか気が重たくなる。第一かさ張るものは困る。金目の張るものは困る。アレにしようか、コレにしようかと迷う。最後につまみあげたのが、一袋のもぐさであつた。コレなら安くて軽いと云うのである。作者が愛媛県人であるから道後あたりで拾つた写生句であらう。

波の音海もなかなか音楽家

宏 方

ざぶん、ざぶん、ドドドドドッと打つては返えす浪の音を静に聴いていると、それは一つの音楽だとも云えよう。

「海もなかなか音楽家」と海を音楽家にしてしまったのも作者の詩心の味である。

半生はゴムで消したいことばかり

野 甫

悪戦苦闘の生活を経て来た人の反省の句である。

あの時は苦しまぎれに、あんなことをやつたが、ホントに詰らないことをやつたものだ。ああ、あの時も、あの時もと振り返つて見ると、ゴムで消したいようなことばかりをよくも続けて来たものであると云うのである。しかし、この反省があつて、はじめてこの人の後半生が明るい美しい人生となるのである。この句の中七の「ゴムで消したい」に軽いユーモアが感じられてはおもしろい句だ。

代表におされて妻に叱られる

竹 莊

「この代表は君でなくつて誰があるんだ。頼むから一つやつてくれよと頼まれて見れば、そう木で鼻をくくつたようにことわれんじやないか」

「うぬぼれが強いね。何もあんたが、そんな代表なんかを引きうけなくても、いくらでも人があるじやないの。Aさんでも、Bさんでも」

「それがさ。Aは今日あたまが痛いからかんべんしてくれと云うし、Bは細君が里へ帰つていろの

で、早く帰つて留守番をしなきゃならんので、是非一つ君が引きうけてくれと云つてサッサと引揚げてしまつたのだ」

「一つ間違つたらクビですよ。お人よしもいゝ加減にして頂戴ッ」と云うところか。身邊を詠んだ穿ちの句。

麦秋の往来釣師に邪魔がられ

越 鳥

麦秋の往来は細いアゼ道まで自転車が来る、リヤカーが来る。流れ川で静に糸を垂れている釣師は時々腰をあげねばならぬ。そこを捉らえた田園風景の一トコマである。街道から来る白い砂埃りや空の青さまでが見えるようだ。「麦秋の往来」は「むぎ秋のゆきき」と訓むのである。

哲多町生る

合併に山紫水明考えず

灯 竿

あちこちで町村合併が頻りに行われたことに対する批判である。村が合併された。ダムが建設された。自然が用捨なく破壊されて行く。山紫水明も何もあつたものではない。次ぎ次ぎにぶちこわされてゆく郷土を見るにつけ愛惜の情がこの句を生んだのであろう。作者の公憤が脈打っている。

手袋の脱ぎすてられしぶきみさよ

翻 骨

皮の手袋は手にはめていてさえ太々しくて何んだかぶきみなものである。それがそこらへ脱ぎすてられているのを見ると、こんなものを自分の身につけているものだとはとても思えないほどぶきみなものである。推理小説式な感覚が出ていて面白い句である。

皆寝かしても女には用があり

愛 論

「さアさ、早く寝ないと学校に遅れますよ」と子どもたちを皆寝かせた。あすの出勤があるので夫も寝かせた。

しかし女にはそれから一ト仕事家事的用があるというのである。たしかに世の女性が宿命的なものを背負っていることを憫んでいる。

機関車も一人で走つて見たかろう

豆 秋

いつも重い車輛を幾輛も繋いで喘ぎながら走っている機関車を見て思わず斯うした句となつたのである。しかし、この句は機関車に対する単なる同情を詠んだものではない。年中一家の重荷を背負

つて走っている自分も、そんな重荷から遁れて、自由な世界に生きたいという欲望が首をもたげていることを見通してはならない。

質屋を出れば今日は満月

野 甫

質屋——それは暗いものの象徴だとも云える。その質屋を夜風の街へ出た途端に眼に触れたのは皎皎と輝いた丸い丸い大きな月だった。オオ、そう云えば今日は満月だったな々と気づいたのである。何んと云うすがすがしい句であろう。この句が斯うした情景を力強く写し出したのは七音・七音即ち十四音字表現で緊迫感を出したからである。

ピース光新生目下バット党

千 容

煙草の名でデフレの世相をキャッチした上に、そうした世相にまきこまれた人達を「目下バット党」と詠んだところに興味が持てる。しかし、この句はバット党の深刻な世活苦を描出するまでに突っ込んではいない。それは作者自身の苦悩の叫びでなく、作者の技巧が生んだ作品であるからだ。

天人の様に愛人去つてゆき

秀 敏

あんなに愛してくれただのにと思うのは男のうぬ惚れである。男は兎角恋を美化したがるものである。女の虚栄を満たすだけのことがしてやれなければ女はサッサと去つて行くのだ。まして生活力の無い男には少しの未練も持たないものだ。しかし、そうした瀬戸際に立つても思い切れないのは男ごころだ。この句はその去り行く愛人をまだ羽衣の天人に擬するほどに美化しようとしている。

附添の診断正露丸をくれ

甲 馬

「寝冷えの下痢ですよ」

と附添婦がこともなげに云う。附添婦の診断である。

「布団を脱いだ覚えはないんだが」

と病人が上々眼づかいで抗弁する。

「幾ら布団を着てたつて寝冷えは寝冷えですよ。これを飲んどきなさい」

と正露丸を呉れたと云うのである。自信の強い附添婦の表情が思わされる句だ。

予算ここまでと工事ほつとかれ

澄 泉

お役所仕事には予算と云う怖ろしいものがある。予算さえあれば、別にいそぐ必要のない工事でも

やつてのけるが、予算がないとなると、いくら緊急な工事でも、ピタリと停止してしまふ。そして予算がなくなつたと云うことは誰の責任でもないような顔をして工事を中途半端で打ち捨てているのを諷した句である。予算でする工事の性質を巧くつかんでいる。

下戸の酌マということを考えず

矢寸志

酒の飲めない人がお酌をすると、どつかマが抜けて見えるものである。事務的に酌をされたのはいいい気持には酔えない。酌はタボだと云う言葉があるが、美しい女のお酌だといひすぐす気になるようだ。この句は一滴も飲めぬ人がマも考えず、続けさまにお酌をしているところを詠んだのである。すすめねばならぬから勧めていると云う下戸の顔が眼に迫つて来るではないか。面白い発見である。

外套が左前だけ女也

孤浪

句の表面にあらわれているのは女の外套が左前であると云うことだけであるが、この句を読んだ時に、この句の持つ内容は決してそれだけでない。男女が同権である。風貌も男か女か判らない。思想も中性であると云う戦後派の女性がアタマに浮んで来ると云う力を内包していることである。これだけの表現でW+Mの女性を遺憾なく描いていてではないか。

献盃の膝を正して順を待ち

井 蛙

政党なら陣笠、官庁なら小役人、会社なら平社員、どちらを向いてもアタマがあらぬ。酒席の末席を汚して、献盃の一つもするのがせいぜいである。それさえも先輩が目白押しに押し並んでいるとすれば膝を正して順を待たねばならない。この句はそうした情景を、巧みにキャッチして面白。民主主義がどうの斯うのと云つてる癖に、まだまだお偉ら方に対する献盃に膝を正して順を待たねばならないのである。四角張つた詠み方はしているが、何んともなくユーモアを感じさせられる。

しなびても土筆袴はつけていた

一 瓢

遅春の土堤は長閑である。そぞろ歩きに、フト眼に触れたのが一本の土筆、のびるだけのびて、最早しなびていた。しなびてはいるが、ちゃんと袴をつけていたので、人も亦斯くあることを思うて何んともなく物の哀れを感じたのである。軽妙な擬人法の句である。

掃除婦も官庁と云う掃きつぶり

愛 論

掃くと云うことは、清く美しくすることである。しかし官庁の掃除婦は清く美しくしようとは考え

ていない。上役に叱られぬ程度に掃きさえすればいいのである。そして時間が来たらさつきと引揚げればいいのである。と云つたところを捉えたのがこの句である。皮肉味も出ているし、調子もいい。

城崎にて

誰の着たどてらか余香拝すなり

白猫児

菅公が太宰府で恩賜の御衣を捧げ、毎日余香を拝したと云う故事から「余香拝すなり」と引用したのであるが、こちらは恩賜の御衣どころか、どこの誰が着たどてらか、変な匂いがしやアしないかとかざかいているのである。それを真面目くさつて「余香拝すなり」と詠んだところがミソである。温泉宿の情景だけに余計に面白い。

娘ばかりになればおい君なんだ君

牛 耕

アプレ娘の心臓の強さや態度の荒々しさから云えば言葉が男性化してゆくのに何んの不思議もないと思うが、まだまだすべての娘が、そうだとはいえないようである。その点から云えば、この句は誇張法の句としての味を多分に持つていと云えよう。一読はおえましくなる句である。

ぼうふらは皆蚊になれり失業苦

芳 仙

水溜りにいたぼうふらが皆蚊になつた。みな、それぞれに、その道を歩いている。しかし、私は――と失業者は思つたのである。失業のなやみはぼうふらが蚊になつて人の血を吸うていることに思い及ぶほど深刻なのである。「ぼうふらは皆蚊になれり」と強く投げ出した表現がこの句を生かしている。

その割に葬儀屋自宅から出さず

花 村

その割とは詠んでいるが、ホンにそう云えば、葬儀屋に鯨幕の張つてあるのを見たことがない。医者であろうと、坊主であろうと、葬儀屋であろうと、死は例外なく訪れるのであるが、葬儀屋と云うものは目立たない存在であるからであらう。

スキーでもするさと左遷うそぶいた

谷 水

「このことも、いよいよお別れだ。あんな山山中へ行くのに、御楽転もクソもあるか。いまいましてしょうがない」

「行くのがイヤだつたら、いつそ止した方がいいじゃないか」

「辞表をたたきつけければ、奴等の思うツボにはまるだけさ。オレは意地でも行つてやるのだ」

「それはわるい了簡だぜ」

「かも知れない。しかし、当分スキーでもするさ」

社員生活の哀詩が斯うして生れて行くのである。

はしやいだあとの淋しさ妓にも

葉

客が騒ぐから芸者も騒ぐ。客を遊ばせるのが商売だからと云つて、おかしくもないのに笑い、はしやぐ理由もないのはしやぐとは何んと云うなさない商売もあつたものであろう。一ト騒ぎしたあとの淋びしさはお客もたまらないらしいが、それは客だけの問題ではない。芸者に見ればもつともつと淋びしいのだと云うのであるが、これこそ芸者心理を巧みにつかんだ句と云えよう。

子の作文それからそれから綴られる

柳 慶

あどけない小学生らしい綴り方である。それからそれからの表現に味がある。横からパパがのぞき込むと

「見ちゃ、いや」

と、両手でふさいで隠す情景まで見え家庭川柳として嬉しい句である。

石橋を叩いて恋に見放され

梨 里

一時的な愛情ではないかしら、だまされているのではないかしら、あの人には既にいい人があるのではないかしらと考えると果てしがない。

恋は盲目でなければならぬ。猪突しなければならぬ。掴んだら放さぬことである。疑つてばかりいと、遂には恋から見放されると云うのである。たしかにその通りである。穿ちの句だ。

野球見るのに会社までだまし

日 満

野球を見るのに会社を休んで行くことは若い社員にあり勝ちなことである。

「やあ、君も来てるのか、今日は休みかい」

「なァに休みなもんか、叔父が死んだと云うことにして出て来たのさ」

「君は？」

「オレもチヨボチヨボだよ」

こんな会話が球場で交換されているとしたら会社の事業のふるわないのもムリはない。穿ちの句である。

流行医者エコノミストも読んでいる

春 雄

流行ると金が出る。出来ると更に殖やしたくなるのが人情。相場欄をのぞく。エコノミストを読む。それが医者であろうと学者であろうと、そうなり易いことを諷したのである。医者が経済や政治に首を突っ込んだところで、医者で掴んだ金を虚名と交換する位が落ちであろう。

もう一つ蚊取線香をたくへボ碁

方 大

「二勝二敗だ。決戦をやろうじやないか」

と、家族のアクビを無視して又パチリパチリとはじめた。流石にエライ蚊には閉口して、もう一つ蚊取線香をたいたと云うのである。

へボ碁の楽しみは門外の人には判らない。この道の熱戦と来たら、碁の一本や二本立てたところでビクともするものではない。

買収はされぬつもりで箸をとり

多久志

話があると云うので来たものの、凡そ話しの筋は判つている。判つてはいても、来ない訳にはいかぬ。来たら案の定御馳走が出た。

「どうぞ」

と盃をさされた。まアこれ位な馳走で、どう斯うと云われることはない。買収に応じさえしなければいいのだと心に決して箸を取つたと云うのである。

やがて妓が来る。酔いが廻わる。柔かい空気に包まれる。斯くして陥落が目前に迫るのである。買収はされぬつもり「つもり」の語がよく利いている。

みおつくし大人が聞けばまだ十時

鬼 酔

母性愛がみおつくしの鐘を生んだ。どんなに遊びはおけていても午後十時にみをつくしの鐘が鳴り響くと、子どもたちは母のふところに帰らねばならないのである。

ところが、それを大人が聞くと、いそいで帰宅するどころか、

「まだ十時だぜ」

と云つて、ネオンの街の方へ歩を運んだと云うのである。

「まだ十時」の「まだ」が非常によく利いている。皮肉な句である。

退職金の端数が飲め飲め飲めという

野 甫

停年で退職した人にとつて、多いとか少ないとか云うて見たところで、退職金ぐらい有難いものはないのである。退職が迫つた時、椅子にもたれて退職金の予想額を何遍ソロバンに入れて見たことであらう。

いよいよ受取つて見たら、まアまア予想に近かつた。端数がついている。せめてそれだけでも飲め飲めと何ッ処からか声がする。そうした誘惑に打ち勝つことが出来ないのが凡人の常である。退職金を握つたサラリーマン心理をしつかりと擱んでいる。

秋来ぬときだかに見えてまだ裸

静観堂

秋来ぬと眼にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬると云う有名な歌がある、その引用句である。ところがそれと反対に秋の来たことがハッキリと見えるけど、それでもまだ裸で暮らしていると云うのである。勿論残暑を詠んだ句である。しかも皮肉な句である。

これはまあと母を笑わす綴り方

伍 健

小学生の綴り方、あけすけに家のことを書いているものはない。豊田正子はいたるところにいる筈である。

「これはまあ」と母が笑う位であるから、父と母のことをかなり露骨に書いていたのであろう。或は家庭の貧乏ぶりをぶちまけているのかも知れない。そうした内容は三者の想像にまかしたのである。

アプレだと見たかビールにさそてくれ

梨 里

アプレ娘はジャンジャンビールを飲む、タバコも喫う。自分もそう見られたのか、ビールに誘うて呉れたと云うのである。コレは作者の実感かも知れない。

近ごろではそんなことを問題にする方が非常識だと云われそうである。

同窓会女優がいつち羨まれ

草 一 郎

同窓会での話題はお互いに年をとったということであり、家庭に縛られるということの嘆きである。その段女優は羨望のまゝで、

「あんだなんかいいわね。いつまでも綺麗だし、それに随分と自由な生活が出来るんだもの」と云われる。

しかし「余所の花は赤く見えるものよ。外部からは華やかな女優生活ですけど、女優には女優としてのなやみがあるものよ。それが判つて呉れないことが、どんなに淋しいか知れないわ」と云う。それが人生だよと、この作者が云つているのである。

入選のコントが仕事嫌いにし

文庫

コントに応募したら、真逆入選するとは思つていなかったのに入選した。続いて応募したら又入選した。とうとう彼を文学青年にしてしまった。本職はそちのけになり、ひまさえあればコントのテーマを考えるようになった。生活に行詰ることは眼に見えてゐるのに働こうとはしなくなつた。よくある例である。そこを捉えたのがこの句である。

基地話かるくいなしでパトロール

博

基地の拡張はいろんな意味で面白くない問題である。日本人として云いたいことは幾らでもあるが、基地の警察官と同じ職域にある者として、そんな話には触れたくないという警察官の心境が巧み

に描かれている。「かるくいなして」の中七がよく利いている。

搾取される事に膝まで泥々だ

乱 耽

どんな仕事か判らないが、兎に角膝までドロドロになるような仕事で親方に使われているのであろう。こんな人達は幾ら働いてもみんな搾取されるのだと観じたところで決して幸福にはなれないのである。ではどうしたらいいのかと考えても、考えはそこで突きあたつて動きのとれないのがこの階級であるとしたら、少しく目覺めたことが却つて不幸かも知れない。

痛いところだらけ五十のスキーヤー

貴志子

少しでも雪が降ろうものなら、猫も杓子もスキーをかたげて山へ山へといそぐ。この句のスキーヤーもその一人であろう。会社ではひとかどの口をきいているが、きて山に挑んではそう簡単にはいかない。幾度か雪に転落したことであろう。若者に伍して五十のスキーヤーがいかにみじめであるかを皮肉つたのである。山で哀れな姿と会社での自慢話の顔が見えるようである。

年寄のライスカレーを汚ながら

規 堂

老人というものは一般に年と共に物臭さになるものである。耳は遠くなるし、眼は近くなる。飯櫃の中に顔を突つ込んでゐる姿などは見られたものではない。この句を読むと年寄の風貌や動作のジジムササを表現して余すところがないような気がする。そんな老人のつくつたライスカレーなんか喰べる気がしないであろう。手きびしい句ではあるが巧く擱んでゐる。

仏陀より今なでている女の手

勝 二

老らくの恋を詠んだ句である。仏陀の救いは有難いには違いなからうが、それはまだ遠い遠い未来のことである。イヤ明日に迫つた問題であるかも知れないがそうは思いたくないのが人間である。そんな仏陀の救いよりも、今なでている女の手の方がどれくらいありがたいかも知れないのである。老人心理を巧みに捉らえた句である。

邪魔くさい返事をすればいい話

公 二

誰でもこの句に詠まれたような経験が一度や二度はあるだろうと思う。

「ちよつと、ここえ来なさい」と母から呼ばれてもなかなか立ちそうにない。

「ちよつと話があるからさ」

「なァに」

と、いかにも邪魔くさそうに返事をする。

「あんたの留学が、いよいよお父さんからおゆるしが出了ましたよ」

こんな例はいくらでもある。そこを促らえたのがこの句である。

鰯悲しや胎児諸共食われたり

一 瓢

弱肉強食を諷した句である。鰯が胎児と一しよに人間に食われてしまったのを見て、作者は闇い気持ちになつたのである。勿論、搾取されている自分の身に引きくらべて自分も又妻子もろとも、使用者に食われていることを自覺して悲しんだのである。痛烈な諷刺句である。

をんなみたいねと女らはさげすみぬ

花 情

優柔不断な男は女から好かれない。グニヤグニヤした青瓢箪みたいな男も女から問題にされない。をんなみたいねの上五は女が男に与えた爆弾みたいなものである。女らはそうした言葉で痛烈に男性をさげすむと同時に、自分たち女性の宿命的な弱い性格をもさげすんでいるのである。その反撥がアプレの女性となつたのであらう。皮肉な句である。

育の子と一つ違いで歩かされ

ライト

子沢山の貧乏生活を詠んだ句である。

「あんた兄さんでしょう。ムリを云うものじやありません」

と仁に一つ違いで歩かされていると云うのである。この子の生立ちはこんなところからはじまるのである。菊地寛の息子は学校に行くのにも自動車に乗せられるので、学校の二三町手前で、運転手にダダをこね車から飛び降りて歩いたとのことである。歩きたくても歩かしてもらえない子どもと、おんぶしてもらいたくても歩かされるこどものいることについて考えさされるではないか。

受付はいと明瞭に恩を売り

杏 三

この句を一読すると思わず微笑をもらさずにはいられない。

「社長さんにお目にかかりたいのですが」

と名刺を差出すと、上から下まで一応人物を点検する。

「只今、お出掛けになるところで、ムリかも知れませんが、聴いて見てあげましょう」と、恩に着せた口吻をされても

「どうぞよろしく」

と、ペコンとお辞儀をするより手がないのである。適確な穿ちの句である。

親切な巡査は地理を知つて居ず

雨 眠

「何町何番地は何処でしょう」

と巡査に訊く。

「そうだね。僕は最近ここへ変つて来たのだが、僕の受持ちの区域にはそんな町はないようだぜ」と、背後の地図を根氣よく探してくれる。「矢張りないようだ」と云いながら、今度は机の抽斗から自分の地図を取り出したが

「どうも判らないね、もう少し行けば右側に区役所があるからそこで訊いて見給え」と親切に教えてくれたと云うのである。これも穿ちの句である。

柔道の帯を風呂屋へしめてくる

光 路

ワザワザ風呂屋まで柔道の帯をしめて来なくてもいいのに、少し柔道がやれるようになると、俺は柔道がやれるんだと云うことを人に知らしたいものらしい。勿論黒帯にはなっていないのである。

これは柔道には限らないようである。人間の弱点を巧くつかんだ句である。

弱い者元利の外に何か添え

草 明

世の中には強い者は何処までも強いが、弱い者は何処までも弱いものである。又貸してもらうことがあるかも知れない。その時にことわられてはと、元金と利息の外に、まだその外に何か添えたところである。利息どころか、元金まで踏み倒す人間もいる世の中にこんな弱い人間もいるのである。気の弱い人間の心理をうまくつかんでいる。

昭和三十年十一月十日 印刷
昭和三十三年八月二十日 再版

學生教養新書

川柳とは何か

―川柳の作り方と味い方―

定価二百五十拾円

著者 麻生路郎あそ お じ 郎 ぢう

東京都新宿区弘方町二七

発行者 佐藤正叟さとう まさ じゆう

東京都千代田区神田司町一ノ一六

印刷者 下谷修久しもや じゆう けう

東京都新宿区弘方町二七

発行所 至文堂

電話九段(33)一四一五番

振替東京二九五〇七番



(千修印刷株式会社印刷)

